
インフィニット・ストラトス 黒き叡智

竜華零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス 黒き叡智

【Nコード】

N0293Z

【作者名】

竜華零

【あらすじ】

IS、それは宇宙開発を目的に開発されたマルチフォーム・スーツ。現行兵器を遥かに凌駕する性能を持つそれは、瞬く間に世界を変革させた。

そしてそんな世界に生きる少女、名は「篠ノ之 楓」。

IS開発者、篠ノ之 束の実妹にして、IS操縦者養成所「IS学園」の女生徒、篠ノ之 篁の双子の妹。好きなものは姉、将来の夢は宇宙進出、そんな女の子。篠ノ之姉妹の末っ子、ただいま15歳。長姉、束によって黒き叡智を授けられた彼女は、はたしてこの世界

で何を見るのか？

この物語は、「インフィニット・ストラトス」を原作とするオリジナル主人公再構成モノです。苦手な方はご注意ください。原作準拠・非アンチが基本原則、でも原作の範囲を超えたらオリジナル展開になる可能性があります、ご注意ください。

*パロディ要素あり、そういった表現が苦手な方はご注意ください。

ブログ：「お姉ちゃんのお願い」（前書き）

はい、それでは・・・。

妹「はーじまーるよー」

・・・！？

プロローグ：「お姉ちゃんのお願ひ」

プロローグ：「お姉ちゃんのお願ひ」

インフィニット・ストラトス、通称『IS』。

人間が宇宙に進出し、活動することを目的に開発されたマルチフォーム・スーツ。

核である「コア」とそれを守る装甲から成る、人類を次のステージへと押し上げることを可能とする鍵。

開発者の名は、篠ノ之 束。

しかし従来の機械を遥かに凌駕する性能を知った主要国は、これを宇宙開発では無く「兵器」として利用することを考える。

結果、『IS』は現行兵器を超える「機動兵器」として世界に認知されることになった。

しかしこの新たな「兵器」には、致命的な欠陥が2つ、存在した。1つは『IS』の起動に不可欠な「コア」の存在、これは世界に467個しか存在しない。

開発できる唯一の人間である篠ノ之 束がそれ以上の数を製作しないため、これにより『IS』の絶対数は467機と制限されることになった。

そしてもう1つ、むしろこちらの方が致命的かつ決定的な欠陥……。

『IS』は、女性にしか使用できない。

原因は不明、開発者である篠ノ之 束ですらわからないとされている。

しかし、いずれにせよ『IS』の絶対性と欠陥は、世界を変革した。誰が望んだ変革かは別として・・・そう。

世界は、変わったのだから。

・・・「誰か」のために、「誰か」によって。

Side
篠ノ之^{しのの}楓^{かえで}

某国・某地域・某秘密ラボ・某部屋。
正確な位置を教えられなくてごめんなさい、でも一応、私は潜伏中なので。

誰にともなく謝りながら、私は空中投影のディスプレイ3枚と睨めっこ中。

2枚の空中投影型のキーボードに指を踊らせつつ、12畳四方くら

いある部屋の中央にある「モノ」に、時折視線を投げる。
そこは、ちよつと普通では無い部屋。

「・・・お？」

灰色の無機質な部屋には無数の大きな機材とケーブルの束があつて、
そこら中に小さなネジやボルトが散らばつてゐる。
そして今、私と目が合ったのは・・・機械仕掛けのリス。
ドングリのようにネジを齧る姿は、何だか可愛い。

束お姉ちゃんが作つたリスだけど、用途は良く知らない。
でも束お姉ちゃんが作つた物の中では比較的マトモな部類で、結構
好き。
だつて、可愛いし。

「何より、無害だし・・・無害なのは良いよね」

ここは、束お姉ちゃんの秘密ラボ。
場所は定期的に移動するから、何とも言えないけど・・・設備はた
ぶん、世界一。
かれこれ数年間、ここで束お姉ちゃんと「クーちゃん」さんと過
してゐる。

「・・・えーでーちゃんっ」

「・・・お？」

「かーえーでーちゃーんっ！！」

声が、した。

次いで、ドタドタドタ・・・と言う誰かが駆けて来る音。それに反応して、すぐに私は身構える。

過去の経験から、「あの人」は部屋のドアから突撃してくることはわかってる。

彼我の距離7メートルを物ともせず、まさに「飛びついて」来るのだ。

危ないからやめてって言うてるのに、全くもって聞いてくれない。だから、私の方がちゃんと対応してあげないと。

「だあーいニユースだよっ、楓ちゃんっ！！」

しかし、相手の方が上手だった。

何故なら相手は、ドアの方ばかりに気を取られていた私の虚をついて、上から来たから。

がぱっ、と天井の一部を外して、上から飛び下りると言う形で。

むぎゅっ。

・・・人が潰される音をいくらコミカルに変換してみても、痛みは

変わらないと言うことがわかった。

何と言うか、押し潰された。

首と腰とか足とか、諸々の骨が軋んで　　むしろ、何で折れ無かつたんだろう　　潰された。

成人女性が身体の上に落ちてくれば、それなりの音と衝撃が駆け抜けるわけで・・・。

「・・・お、お姉ちゃん・・・お姉ちゃんが全力で飛びつくと私の命が危ないと何度お願いしたら・・・」

「あつははは、楓ちゃんは今日もラブラリーだねっ、お姉ちゃんは嬉しいよっ」

息も絶え絶えな私の言葉を軽くスルーするこの人は、私のお姉ちゃん。

天井から落ちて来たのは、20代の女性。

腰まで伸び放題になった髪に、どこことなく「不思議の国のアリス」を思わせる青色のワンピース。

頭には何かの機械らしいウサミミカチューシャ、眠そうな目を目一杯笑みの形に歪めて、私を抱き潰そうとしている。

名前は、篠ノ之　　^{たばね}束。

私の実の姉で、『IS』を開発した本物の「天才」。

「天才」の名に恥じず・・・と言うか「天才」という言葉がバカらしくなるくらいの「天才」のんだけど、何だろう、身内^{かそく}に対する距離感がゼロ距離な人・・・。

「ねえねえねえ、楓ちゃん楓ちゃん、大ニユースだよ大ニユース、もう大ニユース過ぎてお姉ちゃんは楓ちゃんに抱きつかざるを得なかったよー」

「・・・それは良いから、離してお姉ちゃん・・・」

「実はねえ、いっくんがね　あ、いっくんは知ってるよね？」

知ってるに決まってるよね、楓ちゃんだもんね　うん、いっくんがねえ、どーんっ、何と『IS』を動かしちゃいました、ぱふぱふ」

そして、人の話を聞いてくれない。

でも、まるで緊張感も何も無いような人だけど、絶賛世捨て人中。先程も言ったように、私・・・と言うか東お姉ちゃんは世間的に言うところ、失踪中だから。

どうして世間から身を隠そうとしたのかとか、それは良く知らない。でも数年前のある日、何を思い立ったのか失踪した。

でも『IS』開発者である東お姉ちゃんの失踪は、他の人にとっては無視できない大事件。

何しろ、『IS』のコアを作れる唯一の人物の居場所を把握できないわけだから。

まあ、東お姉ちゃんがどう感じているかは、わからないけど。

そしてどう言うわけか、東お姉ちゃんはある日、私も一緒に連れ出した。

・・・何で私まで連れ出したのか、東お姉ちゃんはさっぱり教えてくれないけど。

「いっくん・・・ああ、一夏さんですか、篝姉さんの幼馴染

の」

「ほうね 箒姉さんは、日本にいる私の双子の姉。
おりむらいちか 織斑一夏さんは、その箒姉さんの小さい頃のお友達。」

私も、何度か会った覚えがある。」

私は小さい頃は身体が弱くて、ずっと家にいたから……。
……だから同年代で会った子は少なくて、良く覚えてる。
……あれ、でも一夏さんって。」

「……男の子、だよな？」

「うんうんっ、不思議だよなっ、ISは女の子専用なのにねえ」
「それは……うん、本当にびっくりだね……」

東お姉ちゃんの作った『IS』は、男性には使えない。

と言うか、唯一にして最大と言っても良い欠陥で……。なのに、男性の一夏さんが動かした。

東お姉ちゃんですえ、驚いている……。みたい。

いつもニコニコしてるから、何を考えているかはわからないけど。」

「本当はお姉ちゃんが行きたいんだけど、でもでも、お姉ちゃんにはやるのが一杯なのでした〜！」

「はあ……」

「と言うわけで、そこで登場お姉ちゃんのエンジェルっ、楓ちゃんに見て来て貰おうと思いまーすっ」

「はあ？」

ダメだ、脈絡が無さ過ぎてダメだ。

でもお姉ちゃんの笑顔は、花のエフェクトを飛ばしながら全力全開状態。

こうなると、私は嫌と言えないわけで……。

「いつくんはねえ、何だかどうでも良い連中が勝手にちーちゃんと篝ちゃんのいる所に放りこんじゃったみたいなんだよねえ」

「ちーちゃ……千冬姉様と、篝さん？」

千冬^{ちふゆ}姉様は、束お姉ちゃんの親友、ついでに言えば一夏さんのお姉さん。

その人と篝さんがいる所……って、まさか、「あそこ」！？

「む、無理無理無理っ！ 束お姉ちゃんと一緒に失踪してた私が突然現れて良い場所じゃ無いでしょ！？」

「んん……のーぷろぶれむっ！」

「そんなバカな！？」

親指を上にも拳を握り込んでウィンク、そんな束お姉ちゃんに私は悲鳴を上げる。

『IS』のコアを作れる束お姉ちゃん……にくつついて失踪してた私が、突然ひょっこり「あそこ」に出現したらどうなるか……考えただけで恐ろしい、と言っかリアルに怖い！

突然黒服に囲まれて拉致とかされたら、何とするっ!?

「あっはははは、楓ちゃんは心配性だねえ」

「いやいやいや、そう言う問題じゃ・・・」

「だーいじょーぶっ、これまでお姉ちゃんが大丈夫って言って大丈夫じゃ無かったことがあるかなあ?」

ある。

例えば、今。

「むう、楓ちゃんお願いっ、お姉ちゃんのお願いを聞いてほしいなあ」

顔の前で手を重ねて「お願い」ポーズ、うう・・・そ、そんな風にされると。

ああっ、そんなウルウルした眼差しで見つめられたらあ・・・! う、うう・・・。

「しよ、しょうが無いな、今回だけだよ・・・?」

「ほんと? ありがとう、楓ちゃん大好きっ!!」

「ろ、了解ロケ・・・」

結局、私が折れて・・・むぎゅっつと、東お姉ちゃんに強く抱き締められる。

豊かな胸に顔を埋められて凄く苦しいけど、でも私は引き剥がさない。

むしろこっさり、お姉ちゃんの背中に手を回してみたりして。

はあ、私ってどうして東お姉ちゃんに甘いのかなあ……。
でも、お姉ちゃんってポカポカだね。

「あ、ちなみに筆記試験って言うのが明日あるんだって。会場はイスタンブール」

「な、何でイスタンブール……？」

「あみだくじー」

「え、ええええ……。？」

はあ……。東お姉ちゃんから離れて、私は傍の『IS』の黒い装甲に触れた。

何か、物凄く不安だけど……。でも、お姉ちゃんが大丈夫って言うてるし。

それに、箒姉さんにも久しぶりに会えるし……。

何より……「学校」に、行けるんだ。

……。それじゃ、行こうか、『黒叢こくそう』
いつか、お姉ちゃん達と宇宙ソラを飛ぶために。

プロローグ：「お姉ちゃんのお願い」（後書き）

篠ノ之 楓：

はい、ではここでは「IS」についての説明をしますね！。

お姉ちゃんの方がよく知ってるんですけど、説明とかしない人なので。

えーと・・・。

アイエス

IS：

正式名称「インフィニット・ストラトス」。宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。まあ、ちょっと大きな機械仕掛けの鎧みたいな物だと思って頂ければ・・・黄金聖 みたいな物です。

開発当初は認められませんでした。ある事件以降、世界にその性能が認められます。はい、でも宇宙開発には使用されずに軍事転用されました。現在では核兵器に替わる「抑止兵器」とも呼ばれますね、数は500もありませんけど。

国際条約で、各国のIS保有台数は厳格に定められています。

ISはコアと腕や脚など装甲から形成されています。シールドエネルギーによるバリアーや「絶対防御」などによって現行兵器（核兵器含む）ではISに乗ったパイロットを倒すことはできません、チートです、流石は東お姉ちゃんです。なお、物質の量子化と言うトンデモ機能もついています。

最大の特徴は「自己進化」。経験を積むとISのコアは学習して成長します。成長するとより性能が上がります、まるで人間みたいですよね。

篠ノ之 楓：

・・・はい、この世界で一般に知られているISの情報を説明しました。

もちろん、これで全てではありませんので、後は本編での説明をお待ちください・・・っと。

ふう・・・疲れた。

飴食べよ・・・って、あれ、ドロップ缶が空っぽ？

篠ノ之 束：

あつはつはつ、中身はお姉ちゃんがぜえんぶ頂いたよ！

楓ちゃんの説明が長かったからね！

篠ノ之 楓：

え、えええええ・・・。

主人公設定（物語スタート時点）（前書き）

お久しぶり、あるいは初めまして。

この度「IS」に参入致しました、竜華零です。

最近読み始めた作品ですが、頑張って完結まで持つて行きたいと思っています。

まずは本編を投稿する前に、主人公設定を公開。

今後、増えて行く可能性がありますのでご注意ください。

では、どうぞ。

主人公設定（物語スタート時点）

主人公設定（物語スタート時点）

氏名：篠ノ之 楓（しのののかえで）

誕生日：7月7日 年齢：15歳

身長：156cm 体重：43kg

スリーサイズ：B74/W56/H80

髪の色：黒 瞳の色：黒

特技：

束お姉ちゃんの暇潰しに付き合うこと。

パソコン関係（ハッキング、プログラミング、タイピング等）。

IS関係（整備・設計・解析・改良等・・・勿論、実姉の束の足下にも及ばないが）。

好きなもの：

パソコン関係、読書、機械（特にIS）弄り、飴（オレンジ味）。

苦手なもの：

「劣化束（あるいはそれに類する呼称）」と言われること、言われ
たらキレます。

激しい運動（幼少時に身体が弱かったことが原因）。

略歴：

肩先まで伸びた黒髪に黒い瞳、白い肌の少女、日本人形のように例
えられることもある容姿。顔立ちは双子の姉である箒にそっくり、
ただし箒よりも柔らかい印象。

篠ノ之家の3女にして末娘、束の実妹にして箒の双子の妹。実家は
剣道場でもある篠ノ之神社、ただ幼少時から身体が弱かったため、
双子の姉である箒と違って剣道は習わなかった。現在ではそれほど

身体は弱くないが、それでも激しい運動は苦手。あまり学校に行けなかったので、学校生活に淡い期待あり。

IS開発者である実姉、束が世間から身を隠す（つまり失踪）する際、その姉によって拉致・誘拐される（おそらく、IS開発直後の重要人物保護プログラムから守るためと思われる）。この際、束は箒も連れて行くつもりだったらしいが、結果として楓のみが束についていくことになる。

その後、束と共に逃亡生活・研究生生活を送ることに。そして15歳になったある日、束がいつものように持ってきた「お願い」が、彼女に新しい扉を開かせることになる・・・。

人物：

2人の姉が大好き、2人の「お願い」を聞くのが自分の生きがいだと思っている。

2人の姉はそれぞれが別分野で才能を開花させている（束はIS、箒は剣道など）が、身体が弱かった頃から活動的な2人の姉が憧れだった。そのためいずれの姉にも自分は劣ると考えており、ある種のコンプレックスを抱いている。特に双子でありながら身体も丈夫で強い箒に対しては、幼少時から強い憧れにも似た感情を抱いていた。だが身体的スタイルについては、神の不公平さを呪っている。たまにカッコついで姉の頼みごとに「了解」と返すが、これは幼い頃に読んだ小説の影響だとか。別に本人はミリタリーが趣味なわけでは無い。

将来の夢は「姉妹で宇宙を飛ぶこと」。

束の「ISは宇宙開発のため」という言葉を、本気で信じてる。だから軍事に使ってる今の世界には少し不満があるらしい。

他者との関係性（束に拉致される前の時点）：

対織斑 一夏・・・

実は直接の面識があまり無い、何せ幼少時はほぼ布団の中。とは言え、何度かは顔を合わせたことはある。それと姉の箒が仲良くしていることや、束の親友の弟であることは知っている。個人的には、一応「お友達」カテゴリー！。

対織斑 千冬・・・

長姉である束により、嫌と言うほど話を聞いた。引き合わせてもらったこともあり、回数で言えば弟の一夏よりも多い。束に連れ出されていた間も束から（過剰に）話を聞いていたので、「凄い人」と認識。個人的には、束の唯一の抑止力として尊敬している。

対篠ノ之 束・・・

上の姉、楓の全ての基となった相手。まったく同じでは無いが一夏にとつての千冬が、楓にとつての束。大好きだが苦手、尊敬しているが何を考えているのかわからなくて怖い。連れ出されている間は、束によつて手ずからIS関係のスキルを学んだ。最も、教え方も宇宙的だったか・・・。

対篠ノ之 箒・・・

下の姉、身体が弱かった幼少時には憧れの的。箒のようになりたいと願っていたし、箒も運動のできない妹の分も・・・と思っていた節がある。楓が束に連れ出されてからも、ちよくちよく連絡はとっていた。でも何だか、少し距離感が・・・。

IS（専用機）：「黒叡」^{こくえい}（楓が把握している範囲内）

国籍：無 所属：無（名目上は篠ノ乃 束の個人所有）

*現在、国際IS委員会で対応を協議中。

楓の専用機、楓が束に連れられていた3年間で束から盗ん・・・学んだ技術を活用して基本設計した機体。そのため楓は「私の子供！」と呼んで可愛がっている。実姉、束のラボで製造、コアは束の個人所有の物を縁故で譲渡された（束曰く、妹へのプレゼント）。製造の過程で束からいろいろと調整を受け、世代としては第3世代相当の性能を持つ。

設計コンセプトは「ISを助けるためのIS（by 楓）」、しかし束は「ISを制するISだよん」と言っているらしい。束が第4世代型の開発の直前に製造したいわば「過渡期」の機体と言う側面も持つ。なお、束の「少し手伝う」の範囲がおかしいため、楓も把握していない機能がある可能性が高い。

機体色は黒、全体的に流線型で、肩先、腰部などが丸みを帯びたデザインになっている。スラスタは腰部の後ろについている2基、それと背中に2基のタンクがあるが、これはナノマシン格納庫になっている（用途については下記参照）。

待機形態は菱形の黒い指輪、楓は普段左手の中指に嵌めている。

ISの装備：（IS学園に提出するスペック・データより抜粋）

「黒叢」の初期装備は2種類しか無い、と言うのも元々ISを補助・コントロールするために設計した「非戦闘用」のISだからである。そのため、楓本人は「お手伝いIS」と呼称。

「黒翼」：

単純に言ってソードビット、機体腰部に6基装備されている特殊な複合素材製の短剣型ビット。それぞれが固有のスラスタを持っており、自立した行動が可能。制御は原則として全自動、攻撃では無

く防御が主目的であり、至近距離での直接的な脅威からIS搭乗者を守るための兵装。また、全ビットを円環状に配置することで限定範囲にシールドを展開することもできる。ただしシールドは一方方向に一つしか展開できず、自動なため機械的な動きにならざるを得ない。

「黒叢」：

機体名の由来となったシステム。

書類上は自機以外のISの機体内にナノマシンを侵入させ、エネルギー供給の効率化などを行う仕様。

製作者は東、コアの開発者である東だからこそ可能にした新世代装備と言える。

使用時は「黒叢」の背中部分に搭載されたタンクの中に貯蔵されているナノマシンを、周辺に散布する。この際、散布したナノマシンの群れが影が広がるように見えることから、「黒叢」の名が付けられた。

*装備についてのさらに詳しい設定は、本編で少しずつ紹介する予定。

主人公設定（物語スタート時点）（後書き）

IS 装備元ネタ：

黒翼・・・ソードビット（ガンダム00）

黒叡・・・名前と待機状態（伝説の勇者の伝説）

今後も、パロディ装備が出るかもしれません。

その度、元ネタを公開していく予定です。

篠ノ乃 楓：

初めまして、楓です（ぺこり）。

えーと、好きなものは姉です、あとISです。

これから頑張ります、よろしくお願いします。

基本目的、束お姉ちゃんの暇潰しです。

・・・あれ、何か違う気がする。

えー、今後、ここ後書きでは作中登場のISとかの説明をしたりする予定です。

では、また本編で会いましょう。

・・・束お姉ちゃん、髪を三つ編みにするのやめて。

篠ノ乃 束：

ええええ~~~~???

第1話：「そのクラス、男女比率1：30」（前書き）

前書き、妹語録コーナー。

妹「ねえお兄ちゃん、私、お兄ちゃんとパパ、どっちのお嫁さんになるの？」

その日、我が家で戦争が起きました。

最終的に母が「ソレスタルビ イング」のように武力介入、紛争は早期に終結致しました。

妹がまだ、小学生だった頃のお話です・・・。

第1話：「そのクラス、男女比率1：30」

第1話：「そのクラス、男女比率1：30」

S i d e

おりむらちふゆ
織斑千冬

・・・『IS学園』、それはIS操縦者育成のための特殊国立高等学校。
運営と資金提供は日本国、しかしそこで得た技術は世界に公開する義務がある。
学園内においては、いかなる国家も介入できないことに表向きにはなっている。

IS技術独占国である　正確には、「だった」　日本、そしてここIS学園には世界中からISを、技術を、人材を求めて多くの生徒が入学してくる。
私の役目は、そんな連中を使えるように鍛えてやることだ。
一応、教師だからな。

「まあ、正直・・・どうかとも思うが」

コッ、コッ・・・そのIS学園の敷地内を歩きながら、私はそう声に出す。

だがその声は誰にも届かない、と言つか、教師も生徒も入学式だからだ。

もちろん、私も先程までは入学式に出席していた、教員として。

本来ならそのまま担当する1年1組の教室に向かう所だが・・・実は1人、迎えに行かねばならない小娘がいる。ただの小娘なら捨てている所だが、ただの小娘では無いからそうもいかない。

「・・・束の奴・・・」

ここにはいない親友 親友、か を罵りながら、私は思考を続ける。

ただでさえ今年は、「世界でISを使える唯一の男」と言う触れ込みで私の弟が入学してきているんだ。

1年1組、私が面倒を見る。

私のたった1人の弟、家族、織斑一夏。

それだけでも手がかかると言うのに、ここに来てまた1人、面倒な生徒が増える。

篠ノ之 楓、私の親友でIS開発者でもある束の妹。

妹と言うだけなら、すでに私のクラスには筈と言うもう1人の妹がいる。

問題は・・・今度の妹が、失踪中の束と行動を共にしていた可能性が高い、と言うことだ。

すでに政府の方からいろいろと言われている、私としても捨てておけない。

・・・個人的にも、だ。

「それを、メール1つで『よろしくサンキュー』だと？ 今度会ったら殺す」

もう数年間会っていない上に、殺しても死なないだろうが。

まあ、奴の考えていることなど私もわからん。

メールには詳細な・・・そう、不必要なまでに詳細な情報が添付されていたが。

『飴ちゃんあげたらついてっちゃう子だから、気を付けてあげてね』だとか、特にいらん。

後は何だ、方向音痴で都会に慣れて無いからどうなの・・・。

「がつ・・・学校

っ!」

・・・はあ。

顔を手で覆って、私は溜息を吐く。

一夏だけでも、大変だと言うのに・・・。

そんな私の目の前には、正門ゲートの前で奇声を上げる1人の女生徒。

せめて、次女はつねに似ていてくれればと願った私が馬鹿だった。

何年かぶりに再会した、束お姉ちゃんの親友。それは何と、IS学園の先生だった……。しかも、出会い頭に出席簿で頭を殴られた。かなり、痛かったとだけ明言しておく。

「あう……。私の脳が二つに割れるかと……。千冬姉様、酷い……」

「ほう、良かったな、これからは左右の脳で別のことが考えられるぞ……。後、学校では織斑先生と呼べ」

「学校……。そう、学校だ つ!! ぶぐつ!？」

2 撃目、しかも今度は角で……。かなり痛い。軽く泣きそう、あ、涙が。

「私に、同じことを2度言わせる気が……。？」

「い、いえっ、大丈夫、静かにしマス!!」

びしっ、敬礼しもって元気よく返事。

何年かぶりに再会した千冬姉様は、子供の頃よりもずっと厳しい人になってた。

黒のスーツをビシッと着こなす、カッコ良い20代の女性。

名前は織斑千冬さん、東お姉ちゃんの親友さん。

子供の頃からの知り合い、今ではここ「IS学園」の先生・・・学園、「学校」。

そう、私は学校に来てるんだ・・・！

子供の頃は良くて保健室登校、東お姉ちゃんに拉・・・連れ出されてからは逃亡生活。

ちゃんと学校に通うのは、実はこれが初めて！

「もう、興奮するなって言うのが無理・・・！」

「・・・篠ノ之・・・？」

「す、すみませんデス！」

再び出席簿を掲げる千冬姉様に、私は頭をガードしながら返事をする。

あ、アレは・・・アレだけはどうかお許しを・・・！

・・・でも、学校に来て嬉しいのは本当。

校門で興奮して叫んじゃって、千冬姉様に叱られたけど。

東お姉ちゃんに教えて貰った自己紹介も覚えたし、きっと大丈夫だよね。

お友達とか、できるかなあ・・・。

「あ、あの、千・・・織斑先生、入学式に間に合わなくてごめんなさい・・・」

「それについては後で罰則を加える」

「あう・・・」

いや、だって束お姉ちゃんがいきなり言いだしたから準備が……。は、初登校でいきなり罰則……。あ、でも結構、憧れてたかも。学校の罰則って、伝説のアレかな、トイレ掃除1週間？

「……束は」

「はい？」

「束は、どうしてる？」

私が学校の罰則について考えていると、千冬姉様が束お姉ちゃんのことを聞いて来た。

やっぱり親友、お姉ちゃんのことになるのかな。

お姉ちゃんが言ってた通り、本当はとても優しい人なのかも。

「えっと、ここに私を送り出した後、移動したと思うので……。どこにいるかは。あ、でも凄く元気ですよ、千冬姉様のことも良くお話してくれました」

「ちっ」

何故か、舌打ちされた。

あ、あれ……。？

その後は、お喋りはせずに廊下を歩く。
でもこう言っ学校に来ること自体が初めてに近い私は、周囲をキョ

口キヨ口と見回す。

だって、何もかもが新鮮で、珍しいんだもの！
今日からここが、私の学校！

・・・っと、興奮するとまた叱られる、落ち着かなきゃ。

「・・・新学期早々、騒がしいな」

「え？」

不意に、立ち止まる。

そこは、「1年1組」のプレートがかけられた教室の前。
中からは、複数の声が聞こえて・・・。

「・・・大丈夫か？」

扉に手をかけた所で、千冬姉様が私に声をかける。

相変わらず厳しそうな声だけど、気のせいで無ければさっきまでは
無かった柔らかさを感じる。

・・・東お姉ちゃんの、言ってた通りの人。

「はい、大丈夫です！」

ハッキリと答えると、少しだけ笑ってくれた気がする。

・・・初めての学校、初めてのクラス。

もちろん、凄く凄く緊張するけれど、でも。

それ以上に・・・楽しみ。

これから、どんな毎日を過ごすことになるんだろう。

「・・・では、入るぞ」

ガララツ・・・千冬姉様が、教室の扉を開ける。

見ててね、東お姉ちゃん。

楓は、お姉ちゃんのために頑張るよ・・・！

S i d e

織斑 一夏

あの日、女にしか動かせないはずの『IS』を動かした瞬間から、俺の人生は一変した。

変な黒服に『IS』操縦者のための特殊国立高校、「IS学園」に入学願書を押し付けられてから、選択肢も無いまま・・・ほとんど無理矢理、この学園に押し込められた。

「セシリア・オルコットですわ。ご存知でしょうが、イギリスから派遣されて日本へ・・・」

いや、「IS学園」と「藍越学園（学費の安さと就職率の高さが売りの私立高校）」の受験会場を間違えたり、勝手に置いてあった『IS』に触った俺にも悪い所はあったのかもしれないけど。けどさ・・・これは罰にしては重すぎると思うんだ、神様。

「あ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。怒ってる？ 怒ってるかな？ ゴメンね、ゴメンね！ でもね、あのね、自己紹介『あ』から始まって今『お』の織斑君なんだよね。オルコットさんの自己紹介も終わったからね、だからね、ご、ゴメンね？ 自己紹介してくれるかな？ だ、ダメかな？」

いや、別にそこまで謝らなくても・・・と言いたくなるほどに俺の目の前でオドオドとペコペコしているのは、俺のクラスの副担任、山田真耶先生。

低い身長、だぼつとした服に大きめの眼鏡、短い緑色の髪の子教師。・・・見た目的には、学生で通りそうな先生だな。

ここで状況を再確認、今日はIS学園の入学式で初めてのクラス、絶賛、自己紹介中。

ここまでは良くある話だ、つまり次は俺が自己紹介する番と言っただけで。

未だにペコペコ頭を下げる山田先生に「大丈夫、ちゃんとしますから」と答えて、最前列と真ん中と言っある意味最悪の席で立ち上がる。

ここまでは良い、極めて普通だ、問題は・・・。

「織斑一夏です、えー……よろしくお願いします」

問題は、クラスメイトが……いや、全校生徒、教員から用務員に至るまで、ほぼ全員が女だと言うことだ！

実際、俺の他のクラスメイト29名は全員、女だ。

そりゃそうだよな、『IS』は女しか使えないんだから、その操縦者を養成する学校は女しかいないに決まってる、おかしいのは俺だよ悪かったな。

「えー……以上です」

ガタタタンッ、と何人かの女生徒がズツコケた。

し、仕方無いだろ、他に女子相手にどんな自己紹介をしろと……あれ？

その時、俺は窓際に座る女子と目が合った。

と言うか、あの黒髪ポニーテールは、確か……。

「……箒？」

そう、篠ノ之箒だ。

小学校まで一緒だった、幼馴染と言う奴で……「凜とした」って雰囲気ピッタリ当てはまりそうな、典型的な大和撫子。

ただし、何と言うか目つきが鋭くて睨んでいるように見える……性格は、見た目通り「キツイ」。

「・・・まともに自己紹介もできないのか、お前は？」
「は？・・・いつ！？」

突然、何か固い物で頭をはたかれた。

こ、この速度、この容赦の無さ、そして声。
もしかしてと思って振り向いてみれば、そこには思った通りの人物
がいた。

げえっ、関　！？　じゃなくて・・・。

「ち、千冬ね・・・」

「学校では織斑先生と呼べ、馬鹿者が」

ちふゆねえ

千冬姉・・・俺の実の姉が、そこにいた。

黒のスーツとタイトスカート、狼を思わせる眼差しとスラリとした
体形。

箒とは別の意味の「鋭さ」を備えた、見るからに才色兼備な・・・
と言つか、何でここに？

「あ、織斑先生、会議はもう終わられたんですか？」

「ああ、山田君、クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

・・・って、先生！？

先生って言ったか今！？　そ、そんな話、聞いて無いぞ・・・と、
俺が抗議するよりも先に。

クラスの女子達が、黄色い声を上げた。

「キャ　　ッ、本物の千冬様！　千冬様よ！」

「愛してます！」「美しすぎます！」「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れて北九州からこの学園に来たんです！」

「お姉様のためなら死ねます！」

・・・大人気、だった。

いや、まあ・・・仕方無いけどさ、でも当の千冬姉は「馬鹿が多いな・・・」とか言ってるし。

それをクールと勘違いしたのか、女子達はさらにヒートアップ。

み、皆さん？　あれはポーズじゃなくて本気で言ってるんですよ・・・

・・・？

いや、「もつと罵って」とか「躡けてください」とか言ってる場合じゃ無くてね？

「ほら、静かにしろガキ共・・・ちょっとした事情で入学式に間に合わなかった生徒を紹介する」

・・・あ、まだいるのか、どうせ女子だろうけど。

女の中に、男が1人、しかも3年間。

・・・いや、思ったよりキツいんだぜ・・・？

俺がそんな風にこれから先のことを思い悩んでいると、廊下から教室に入ってきて、千冬姉の隣に立ったのはやっぱり女子。

肩のあたりまで伸びた黒髪に、シャープで綺麗な顔立ちだけどキツさは感じない雰囲気。

むしろ、ほわほわと柔らかい感じ・・・制服はもちろんIS学園、1年用の青いリボンが胸元で揺れる。

太腿まで覆う黒い靴下・・・オーバーハイって奴か？ 良く分からないけど。

・・・あれ？ でも何だかどこかで会ったような・・・？

「えーっと、篠ノ之楓です。何年か行方不明になってましたけど、どうぞよろし・・・はうっ!？」

すぱーんっ、自己紹介を始めた瞬間に千冬姉に頭をはたかれた。

あ、少し親近感・・・じゃなくて、篠ノ之、楓？ 楓って言えば・・・。

・・・・・・箒の、妹の？

ゆ、行方不明だったって・・・俺は慌てて、窓際の箒の方を見た。

・・・箒は、まるでそっぽを向くように窓の外を見ていた。

Side セシリア・オルコット（イギリス代表候補生）

織斑千冬、元IS日本代表にしてISの世界大会である「モンド・グロッソ」の総合優勝及び格闘部門優勝者、わかりやすく言えば元

「世界最強」。

現役を退いた後は、ここIS学園の一教師に甘んじている・・・とは言え、今でも彼女の崇拜者は多い。

『ブリュンヒルデ』・・・織斑千冬は、現役引退から数年経つても、敬意をもつてそう呼ばれますの。

ISのイギリス代表の候補生、つまりエリートである私もわたくし織斑千冬わたしのことは認めざるを得ませんし、国からも「できれば仲良くするよ
うに」と言い含められておりますわ。

「・・・であるからして、ISの運用には・・・」

今は、山田先生がISの基本的に関する基本的な抗議をしています
わ。

織斑千冬・・・織斑先生は、教室の後ろで腕を組んで授業の様子を
見えています。

そちらももちろん、気になりますが・・・私が国から気にしろと言
われているのは、別の人間。

織斑一夏、あの織斑先生の実の弟にして「世界で唯一ISを動かせる男」・・・。

・・・でも正直、拍子抜けですわ。
基礎の基礎の部分の再確認の授業に過ぎませんのに、彼はそれについていけない様子なのですから。

山田先生が「どこがわからない」と聞けば、「全部わからない」と
答える始末。

その上・・・。

「・・・織斑、入学前に渡した参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました！」

・・・と、バカ丸出しで答えて織斑先生に殴られています。

ISは現行の兵器を凌ぐ新時代の兵器、基礎知識も訓練も無しに動かせる物ではありませんのに。

本当にあの男がISを動かしたのでしょうか、どうにも信じられませんか。

所詮、男なんてそんなもの。

このエリートの私がこんな極東の島国に来たのは、あの男の調査も1つの目的ですけど。

正直、男であると言う以外に取り立てて報告すべき点は見つかりませんわね。

大体、男がISに乗るだなどと生意気に過ぎますもの。

今は、物珍しさで優遇されて目立っているだけ・・・。

「はい、では2時間目は終了です。休憩時間ですよ」

山田先生がそう言って、授業が終わりましたわ。

内容としては、代表候補生である私にはつまりませんでしたけど。

まあ、なかなかお上手な講義だったのでは無くて？

・・・本当は、男などに話しかけるなど、私のプライドが許しませんけれど。

1時間目の休み時間は、ポニーテールの女子に先を越されて話しかけられませんでしたから、今、仕掛けることにしますわ。

これも国のため、私のプライドは一時置いて、話を聞いてみることにしますわ。

「ちよつと、よろしくて？」

・・・本当は、嫌で嫌でたまりませんけど。

ああ、代表候補生も^{エリート}楽ではありませんわね。

私が声をかけると、その男は振り向いて・・・。

Side 篠ノ之 楓

東お姉ちゃん、私は今、凄く興奮してるよ。

学校、しかも教室でちゃんと授業を受けられる日が来るなんて。

子供の頃は病弱で寝たきり、それからは東お姉ちゃんについて行っていたから・・・。

人がたくさんいるのは少し怖いけど、それでもやっぱ楽しい。
もう、ソワソワしちゃってもう、押さえきれないよね・・・！
おおっといけない、さっきも千冬姉様に叱られたし、平常心平常心・
。。。

「ねえねえ、楓ちゃんって呼んでも良い？」

「おおっ！？」

「・・・？ どうしたの？」

「い、いえ、何でも無いです、何でも無いですよ！」

「そっか、じゃあ良いや」

早速、クラスの人に話しかけられた。

こ、これは、お友達になるチャンス・・・かも。

私に声をかけてきたのは、何だかおっとりした感じの女の子。

袖丈がやけに長い制服 ある程度の制服改造は校則で許容
を着た子で、ネズミさんの髪飾りをつけた長い髪に、とても眠そ
うな目が特徴的。

・・・心無し、束お姉ちゃんに似てる気がする。

「あ、えっと・・・」

「あ、私？ 私はねー、のほけ 布仏 ほんね 本音だよ」

「布仏さん、布仏さん・・・はい、覚えました」

「ありがとー、でも本音で良いよ」

「どういたしまして、本音さん」

おお、普通に会話できてる、できてるよ……！
このまま、お友達になれたりして……あれ？
……お友達って、どうやってなるんだろう？

「でねでね、楓ちゃんはどうして入学式に来なかったのかな、かな？」
「え、えー……道に迷って？」

「おお、楓ちゃんは方向音痴さんなのかな？」

「ちん……ああ、いや、そんなはずは……」

ただ学校と言う物に興奮してただけで、普段は……道に迷うなんて。

……ち、ちよつとだけしか。

それに千冬姉様にも会えたし、箒姉さんにだって……ああ、そう、箒姉さん！

慌てて振り向くと、窓際の座席で1人、窓の外を見ている箒姉さんを見つける。

最後に会った時と変わらない髪型と雰囲気、私のもう1人のお姉ちゃん。

私がここに来たのは、東お姉ちゃんの「お願い」のせいだけど……でも、箒姉さんにも会いたかった。

年に2、3回くらい、電話で話すくらいしかできなかったし、早速声を……。

「私を知らない！？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの

代表候補生にして入試主席のこの私を！？ 私の華麗な自己紹介が胸に響かなかったと！？」

急に大きな声がして、教室が静まり返った。

何かと思えばこのクラス唯一の男子　　わ、そう言えば一夏さんとも同じクラスなんだよね、声かけなきゃ　　の前で、金髪の女の子が凄く怒ってた。

かすかにロールのかかった長い綺麗なプラチナブロンドと、透き通った青い瞳。

欧米人特有の肌の白さとスタイルの良い身体、全身から「私、優秀です」なオーラを放ってる女の子。

セシリア・オルコットって名前は知らないけど・・・イギリスの代表候補生なんだ。

代表候補生は読んで字のごとく、国家のIS代表の候補生のことだよ。

オルコットさんが、今まさに一夏さんに説明してる。

「つまり私は、エリートなのですわ！　泣いて頼むなら、優しくしてあげても良くてよ？」

・・・えっと、アレは学校で友達を作る時に言う台詞なのかな？
良し、じゃあ私も早速、えっと・・・な、泣いて頼むなら。

「何せ私、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから

？」

「・・・入試つてアレか？ ISを動かして戦うってやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ？ 俺も倒したぞ、教官」

「は・・・？」

ざわっ・・・な、何だか教室の雰囲気が。

に、入試？ 入試・・・私は何か、束お姉ちゃんがいろいろしてたことしかわからないけど。

えっと、どれのことかな・・・？

「あ、貴方も・・・教官を倒したって言うんですの！？ 入試で！？」

「あ、ああ・・・たぶん」

「たぶんって何ですの、たぶんって」

「

あ、チャイムだ。

3時間目が始まる、オルコットさんは何か言いながら自分の座席に戻る。

「楓ちゃん、じゃあまた後でね」

「あ、はい・・・また・・・」

そして当然、本音さんも座席に戻る。
くう、お友達になり損ねた！

まあ、でもまた後でつてことは話しかけて貰えるつてことで・・・。

「・・・あ」

ふと、窓際の座席から篝姉さんが私のことを見ていることに気付いた。

笑顔で小さく手を振ったら、ぷいってそっぽを向かれた。

・・・あ、あれー・・・？

S i d e 千冬

3時間目は、ISで実際に使われる武装に関する講義・・・の前に、再来週のクラス対抗戦（もちろん、ISで、だ）のクラス代表いこうたいひょうを決めるつもりだった。

・・・が、何だこの状態は。

「納得できませんわっ！！」

どう言うわけか知らんが、オルコットが息を巻いている。

それはクラスのガキ共が私の弟・・・つまり一夏をクラス代表にしようとする推薦を重ねた後のことだ。

・・・本人はやりたがっていないようだが、それはどうでも良い、

推薦された者に拒否権など無い。

オルコット曰く、男がクラス代表など恥さらし以外の何者でも無い。クラス代表はそのクラスの実力ナンバー1がなるべきで、それには代表候補生であり「専用機」持ちである自分こそが相応しい・・・と言つのが言い分だ。

まあ、「実力ナンバー1がなるべき」と言う部分には首肯してやつても良いが。

「物珍しさで男をクラス代表にするなんて・・・サーカスじゃありませんのよ!？」 大体、文化としても後進的な極東の島国で暮らさなければならぬこと自体、私にとっては耐え難い苦痛ですのに・・・!」

「イギリスだつて島国だし、大したお国自慢無いだろ」

口を滑らせおつたな、馬鹿者が。

聞き流せば良いだろうに、一夏がオルコットの祖国を「侮辱」

先に日本を「侮辱」したのはオルコットだが したことに腹を立てたオルコットが、一夏に決闘を申し込んだ。

「・・・良いぜ、四の五の言うよりわかりやすい」

そして一夏も、それを受ける・・・何だこの流れは。

大体、一夏はまだ機体も無いと言つのにどう「決闘」するつもりだ、馬鹿が。

・・・まあ、一夏には政府が「専用機」を用意するらしいから、そこは問題無いだろうが。

・・・「専用機」。

代表・代表候補生や企業に所属する人間に与えられる専用のIS。特定の個人にしか使用できない、まさに「専用機」だ。IS学園でも、「専用機」を持っているのは数える程しかない。このクラスで言えば、オルコットと・・・一夏、そして・・・。

「・・・」

私の視線の先には、まだ実技試験を受けていないのに入学が確定している生徒がいる。

篠ノ乃楓、後で日程は伝えるが・・・ISさえ動かせれば基本は合格だ。

第一、アレは束の下でISについて叩き込まれた馬鹿だ。

一夏も似たような状態で入試を受けたが、それは形式として受けたに過ぎない。

その意味では、無意味な通過儀礼に過ぎない、が・・・。

・・・脳裏に、束の送りつけて来たデータの内容を思い浮かべる。束は、本当に何を考えているんだろうな。

妹に個人所有の「専用機」を授けて、IS学園に送りつけてくるのだから・・・。

S I d e 一夏

はぁ・・・疲れた。

今日の授業が終わって、自分に割り振られた寮の部屋に向かいながら、俺は溜息を吐く。

今日は本当に疲れた、女子にはジロジロ見られるし、変な奴・・・セシリア・オルコットだっけ？ には、突っかかられるし。

しかも、来週の月曜に第3アリーナとか言う場所で勝負しなくちゃいけないとなった。

勝負自体は良いとして、ISバトル（最近はその言う名前の「スポーツ」として定着）なんてやったこと無いし・・・大体、教科書すら専門用語ばかりでさっぱりわからない。

「・・・まあ、やるしかないな。男が一度決めたことを撤回するわけにゃいかねーし」

教室でのことを思い出す、「男が女に（特にISで）勝てるわけが無い」と言わんばかりのあの雰囲気。

クラスの女子は皆、「セシリアに頼んでハンデつけて貰ったら？」とか言う始末だ。

しかもしれは、嫌味でも何でも無く・・・当然のこととして受け止められてる。

今の時代、男の立場は圧倒的に弱い、女尊男卑と言っても良いくらいに。

ISは現行兵器を鉄屑同然にした新時代の兵器、だからそれを扱う女性の立場が急上昇するのわかる、IS（及び操縦者）の保有数が即軍事力・防衛力になる時代なんだから。

実際、ISを操縦できる可能性のある女性に対しては国も企業もこれでもかと言くらいに優遇措置を取る、それもわかる。

だけど・・・国家の軍事力になるからIS操縦者、つまり女性は偉くて男性はいらない。

・・・それだけは、何か違うと思う。

「まあ、男と女で戦争したら男陣営は3時間で負けるだろうけど」

悲しい現実を口にしつつも、俺は頬をぱんつと両手で叩いた。

いけないいけない、思考がマイナスになっちまってたな。

とにかく、この1週間で基礎だけでも・・・き、基礎・・・基礎か・・・。

「・・・はあ、束さんも面倒な物を作ってくれたよなあ」

別に束さんが悪いわけじゃ無いけど・・・千冬姉の親友の顔を思い出す。

記憶の中にあるのは、何を考えているんだかわからない人を喰った

ような笑顔。

・・・あの人がISを開発したって言うの、わからなくも無いけど、イマイチ実感がわかない。

昔からやたらに天才だったのは覚えてるけど・・・そうだ、束さんだよ！

「箒と・・・あと、楓か」

今日、6年ぶりに再会した幼馴染2人のことを思い出す。

・・・って言っても、箒とはガキの頃に通ってた剣道の道場で良く一緒だったけど、楓とはあまり会ったこと無いんだよな。

確かアイツ、身体弱くて・・・今は、どうだかわかんねーけど。

と言うか、自己紹介の時の行方不明って、アレ何だろうな？

束さんは今も絶賛、失踪中だけど・・・。

小4の時に箒の家が引っ越してから全然連絡取って無かったから、今アイツらの家がどうなっているのかもわからないし・・・いやいや。

「はあ・・・今日はもう良いや、とにかく寝よう」

とにかく、疲れた・・・もう寝たい。

えっと、千冬姉が用意してくれた寮の部屋「1025室」に向かう。部屋に入った後、俺は真っすぐにベッドに向かった・・・。

Side 篠ノ之^{ほつぎ} 篇

・・・6年ぶりに、一夏に会った。
休み時間にほんの少しだが、話せた。
私だとすぐにわかったと言ってくれた、髪型が同じだったからと・
。

「・・・良く、覚えていたものだ」

私の髪は、頭の後ろで結んでも腰まである程に長い。
それこそ、子供の頃から変えていない・・・もしかしたらと、思っ
ていたから。

一夏と会えた時、すぐに気付いてくれるだろうかと・・・。

・・・はっ!?

いやいやいや、一夏は関係無いぞ、一夏は、うん。

私は単純に、この髪型が気に入っているだけだ、それだけだ、うん。
・・・ま、まあ、覚えていてくれて、良かったと思わなくも無いが。
いやいや・・・軽く頭を振って、私はリボンを解く。

制服と下着を脱いで、タオルを手に寮の部屋のシャワールームへ。

「・・・ふう」

熱い湯のシャワーを浴びると、小さく息を吐く。

ぼんやりと湯を浴びながら考えるのは・・・やはり、一夏のこと。当たり前だが、6年前とは何もかも違う。

記憶にあるよりずっと大人で・・・そして、男らしくなっていた。

ニュースで見た時は、本当に驚いた。

忘れるはずも見間違えるはずも無い姿がテレビに映ったのだ、驚きもする。

世界で初めて、ISを動かした男として・・・。

「・・・だが」

キュツ・・・蛇口を捻って、湯を止める。

ポタポタと髪先から垂れる雫を見つめながら、私はもう1人のことを考えた。

そのもう1人とは・・・楓のこと。

この数年間、姉さん・・・「IS開発者」篠ノ乃 束と行動を共にしていただろう、双子の妹。

年に2回か3回、短い時間だが電話で話したことはある。

姉さんとは、1度も話したことが無いが・・・いや、それ自体はどうでも良い。

もつと、重要なのは・・・。

「・・・楓・・・」

・・・昔は、身体の弱かったあの子のためにと世話を焼いたこともある。

それなりに、姉妹仲は良かったと思う。

少なくとも、私と姉さんの関係よりはマシだったはずだ。

ただどあの日、姉さんが楓を連れ出して、どこかに消えて・・・それで。

・・・ボスンッ。

・・・？

今、シャワールームの外から、何か音がしたか？

「誰か、いるのか？」

シャワールームの外に声をかけながら、バスタオルを身に纏う。

・・・ああ、そう言えば今日から相室になるんだったか、元々2人部屋だしな。

となると、外にいるのは同室になる者か。

まあ、1年間一緒に生活するんだ、それなりの関係を築いた方が良いだろう。

「・・・こんな格好ですまないな、私は篠ノ乃箒と・・・」

シャワールームの外に出て、部屋の中にいるだろう同居人に向けて挨拶する。

そして濡れた髪を払いながら顔を上げると、そこには・・・。

Side 篠ノ之 楓

放課後、私はホクホク顔で寮の廊下を歩いていた。

と言うのも、本音さんが彼女のお友達に私を紹介してくれて、その子達とも仲良くなれたから。

これって、お友達になれたってことかな？

だとしたら嬉しいなあ、同年代の女の子のお友達なんて初めてだから。

東お姉ちゃんはお友達とかいない人だけど、私は普通に嬉しい。

明日は私の実技試験をやるって千冬姉様が言ってたけど、ISが動かせれば良いらしいから。

えっへへー、お友達げつと！

そして同時に、買って所でドロップ缶もげつと！

「学校って楽しいなあ、本当に本当に楽しいなあ」

私のだって言う寮の部屋に戻ったら、束お姉ちゃんに秘匿通信で教えてあげないと。

まあ、メールを送り合うだけで電話とかじゃ無いけど・・・でも、その前に。

篤姉さんに会いたいな、昼間は結局、話せなかったし。

電話で話せなかったこととか、近況報告とか・・・束お姉ちゃんのこととか、いろいろ。

たくさん、お話しすることがあるからね。

えーっと、千冬姉様によれば姉さんの部屋は「1025室」で・・・。

「かりつとね・・・」

口の中に早速一粒、飴を放り込む。

普段は地図に弱い私も、飴を舐めてる間はドロップ大丈夫。

糖分を摂取した脳が活性化して、断然OKな状態に・・・。

「・・・お？」

とぼとぼ歩いていると、廊下に人だかりができている場所を見つけた。

廊下のそれぞれの部屋から女生徒が顔を出して、一つの部屋を見ている。

その部屋からは、何かドタバタと言う音が・・・かりっと、飴を上下の歯の間に入れてカリカリする。

次の瞬間、激しい物音がしていた部屋から何かが転がり出て来た。

・・・ドアが物凄い勢いで開いて、何かがまさに「転がり出て」きたの。

それは反対側の壁に激突する「いつてえ!？」と、唸りながら身悶えてた。

と言うか、一夏さんだった。

かりっ・・・小さくなった飴玉を、噛み潰してから飲み込む。

「・・・あつ、もしかしてこれって、最近の学校で流行ってる何かのゲームで」

「んなわけ無いから!・・・って、楓?」

「お久しぶりです、一夏さん。実に久しいのですが、ゲームで無いならいったい何を・・・と言うか、箒姉さんはどこにいるか知りません?」

「・・・まさに今、その箒に殴られた所なんだが・・・」

「お?」

一夏さんの指差した先には、何故か剣胴着姿の箒姉さん、手には木刀を持つてる。

もしかしてあの木刀で一夏さんを殴打したのかな、だとしたら凄く

危ないよ箒姉さん。

長い髪に鋭い目、数年ぶりに会う私の双子の姉が、そこにいた。

「箒ね・・・」

声をかけようとする、箒姉さんは即座にドアを閉めた。

私を一瞥して、驚いた顔・・・それからキツイ顔になって、即座に。
・・・あ、あれ？

「・・・機嫌、悪かったのかな・・・？」

「まあ、良くは無いだろうけど」

一夏さんは、箒姉さんに何をしたのか・・・でも、今の箒姉さんの態度は、あくまで私に向けられていた気がする。

その後聞いた話だと、箒姉さんと一夏さんはこれから同じ部屋なの
だとか。

あー、私知ってるよ、同棲って言うんだよねそれ。

・・・結局。

その日は、箒姉さんと一言も話せなかった・・・。

第1話：「そのクラス、男女比率1：30」（後書き）

篠ノ之 楓：

はい、どうも、楓です。

今日は、ウチの家と家族環境について説明したいと思います。

東お姉ちゃん、箒姉さんの事以外はあんまり教えてくれないので、自分で調べてみました。

篠ノ之家・・・

篠ノ之家は、神社の神主の家系です、つまり私達姉妹は巫女さんなんです。

私と東お姉ちゃんは全然ですけど、箒さんはお神楽を舞ったりしてましたよ。ご近所ではお祭りとか・・・割と親しまれてた家みたいですね。あと、剣術道場もしてましたよ、篠ノ之の流派はもともと、女性のための古い剣術でして。神に捧げる舞と古武術がくっついて剣術に変わったらしいです、剣舞・・・と言うような意味で。

だから私達姉妹の中では、箒さんだけが正統な篠ノ乃流の継承者たり得ると言うわけですね。

で、家族。

私は東お姉ちゃんと世界を巡ってましたが、箒さんはずっと日本に。政府の重要人物保護プログラムで両親と各地を転々としてたらしいですね。東お姉ちゃんがプログラムの実行機関に「何か」してからは、千冬姉様のいるIS学園に・・・と言う感じだそうです。でも、何故か両親はそのまま政府の保護下に放置・・・まあ、東お姉ちゃんにも何か考えがあるんだろうけど・・・。

篠ノ之 楓：

はい、今回はここまでです。

次回から、学園生活がスタートですね。

えーと、私は束お姉ちゃんにいろいろと教えて・・・。

あれ？ データ消えてる・・・。

篠ノ之 束：

データは全部頂いたぜー！ ばーい、束おねーちゃん。

篠ノ之 楓；

えええ・・・。

第2話：「クラス代表決定戦・前編」

第2話：「クラス代表決定戦・前編」

S i d e 織斑 一夏

入学式の翌日、つまりは俺が幼馴染の箒との同居（と言うか、同室？）になってから一晩。

あれ以来、箒が機嫌が直してくれない。

確かにシャワー上がりの姿を見てしまったのは俺が悪い・・・悪いのか？　むしろ幼馴染とは言え年頃の男女を同室にする学園側に問題があるんじゃないだろうか。

まあ、この学園はそもそも男が通うことを想定して無いから・・・。

何せ、男性用トイレも無いってんだから・・・あと、大浴場も使えない。

どこを見ても女性、女子、女・・・。

ちなみに物心ついた頃から親がおらず、千冬姉と2人暮らした俺は女子に夢を見る程ウブじゃない。

なので、リアルに疲れるばかりで・・・。

「・・・と言うわけで、ISは宇宙での活動を想定して設計されているので、特殊なエネルギーバリアで身体を包んでいて・・・」

ちなみに今は授業中、セシリアとの決闘に向けて頑張ろうと意気込んでは見た物の。

・・・さっぱり、わからない。

千冬姉に貰った参考書で予習した分、単語がわかる程度で・・・根本的な所が、さっぱり。

だけど他の皆はうんうん頷いてるし、理解できてる様子だ。つまり、俺だけがついていけない。

窓際の幼馴染、箒を見ても・・・特段、困った様子は無い。

つまり、今やってるのはそれくらい基礎なわけで。

・・・結論、俺1人じゃどうにもならない。

「それからISにも意識のような物があって、対話・・・つまり、一緒に過ごした時間だけ、わかり合う・・・操縦者の特性を、把握しようとするわけなんですね。これがいわゆる『コア』に経験を積みまけると言われることで・・・練習は裏切らないと言うことですね」「先生、それって彼氏彼女みたいな関係ですかー？」

「え、えー・・・と、そうですね。でも私は経験が無いので、わかりませんけど・・・」

彼氏彼女・・・恋人とか恋愛とか、そう言う話になると空気が華やぐ。

と言うか、甘くなる・・・色で言うと黄色か桃色？

一言でいえば、「女子校」的な雰囲気。

まあ、男って俺1人だしな・・・むしろ、俺が邪魔な感じだ。

その割に、周りから物珍し気にジロジロみられるもんだから・・・
困る。

何と言うか、いたたまれない。

「んんっ、山田先生、授業の続きを」
「は、はいっ」

教室の後ろに立っていた千冬姉が、咳払い一つで教室の空気を引き締める。

このあたりは流石だと思う、おかげで助かった。
俺は小さく息を吐くと、教科書に目を戻して・・・。

・・・やっぱり、わからない。

まあ、ここに来て初めてISの勉強を始めたわけだから、仕方が無い、はず。

でもセシリアとの勝負は、来週なわけで。
困り果てた俺は、もう一度、箒の方を見る。

「・・・っ」

一瞬だけ目が合って・・・って、おい、目を逸らすなよ、傷付くだろ。

はぁ・・・とにかく、箒に教えてくれるよう頼んでみよう。

同じ部屋だし、教えて貰う分には不自由しない・・・と思う。

千冬姉に頼んでも教えてくれるだろうけど、忙しいだろうし・・・

鼻屑だと思われるのもアレだし。
でも箒って、まだ機嫌直って無い、よな？

憂鬱な気分になりながら、教室を歩く山田先生の姿を追いながら少し後ろを見る。

すると、視界の隅の座席に見た顔がいた（いや、クラスメイトは全員見た顔だが）。

箒と似た顔だが雰囲気は真逆、むしろ束さんに近い幼馴染。

篠ノ之楓・・・何故か背筋を伸ばしてニコニコしながら両手で教科書を開いてる。

・・・何がそんなに楽しいんだ・・・？

「・・・はあ」

溜息を吐いて前を向いて、教科書のページを開きながら、ふと昨夜のことを思い出す。

箒に会いに来たらしい楓と、少しだけ話した。

箒自身は、どうしてか楓と会おうとしなかったけど。

・・・後で聞いても、箒はその件については何も答えてはくれなかった。

まあ、元々機嫌、悪かったしな。

で、楓からは束さんが元気だと言うことを聞いた。

あの人が元気で無い所が想像できないけど、元気だと聞いて悪い気はしない。

楓もすっかり身体も良くなったって言うし、良いことづくめだ。

何はともあれ健康が1番、だからな。

S i d e 篠ノ之 楓

はあ 、 「授業」 っ て楽しいなあ！

こう、本当に教科書に沿って進めて行くんだね。

学校にあんまり来たことが無いから、感無量だよ。

まあ、でも・・・ばらばら、教科書をめくってみる。

・・・ISを完全に「兵器」扱いしてるのは、ちよつとだけ不満。
だって、東お姉ちゃんはそのためのためにISを作ったわけじゃ
無いもの。

「おお、楓ちゃんご機嫌だお」

「うんっ、学校って面白いね！」

「はわ、え、笑顔が眩しい」

休み時間には、お友達とお喋り。

本音さんはお友達が多い人みたいで、おかげでたくさんのお友達に
紹介して貰えた。

本音さんには感謝感激、ちなみに本人が私に声をかけてきたのは。

「生徒会長に聞いて、興味あったからだよ」

とのこと。

ははぁ、生徒会長、私の入学資料でも見たのかな。
実技試験、ただだけど。

何でも本音さんは「生徒会」のメンバーで、しかも整備科志望なのだとか。

ちなみに、私も整備科志望。

2年生からは科が別れると言う話で・・・本音さんはお姉さんが整備科にいるとか。

私も東お姉ちゃんの影響でISは動かすより整備したりする方が好きで・・・親近感が湧く。

私がそう言つと。

「じゃあ今度、かんちゃんを紹介するよぉ」

「かんちゃんさん？」

「うん、4組の子。きっと仲良くできると思うよ」

本当に本音さんはお友達が多い、まだ学校が始まって2日目なのに。うーむ、この間延びした独特な喋り方が人を引き寄せるのだろうか・・・。

私も、見習った方が良いかな・・・？

「ええ つ、織斑君って専用機が貰えるんですか!？」

「1年の、しかもこんな時期に!？」

その時、一夏さんの周辺から大きな声が聞こえた。

そこには千冬姉様と山田先生もいて、前者はうるさそうに、後者はアワアワしながら一夏さんに話しかけてる。

「・・・で、だ。本来なら専用ISは国が企業に所属する人間しか与えられないが、お前は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。理解できたか？」

「な、なんとなく・・・」

専用機、専用IS。

読んで字の如く、個人に与えられる専用のISのこと。

ISはコアの数(467個)しか作れないから、つまりはどう頑張っても世界で467人しかISを持てない。

東お姉ちゃんは、467個目を作ってから国にも企業にも提供しなくなつたから・・・。

世間的にはいろいろ言われてるけど、個人的には飽きただけだと思う。

「あ、あの、先生。篠ノ之さん達って、篠ノ之博士の関係者なんでしょうか・・・？」

「ああ、2人ともアイツの妹だ」

おおっと、いきなり個人情報漏洩・・・いや、別に隠してないけど。

束お姉ちゃんは、ISのコアが作れる唯一の人間。

そして、今も失踪中（今や私にも居場所がわからない）。

でもいろいろ言われるかと思ったけど、思ったほど私、何も聞かれなかったな……。

「す、すごいっ、このクラス。有名人の身内だらけじゃん!？」

「ねえねえ、篠ノ之博士ってどんな人？ やっぱり天才!？」

「篠ノ之さん達も天才だったりする!？ 今度ISの操縦教えてよ!」

そして、にわかに活気づく1年1組。

篝姉さんと、あと私の所にもたくさんの女生徒がやってくる。

おお、こんなにたくさんの人に囲まれると……緊張する。

子供の頃も束お姉ちゃんと一緒にいた時期も、人に囲まれた経験が無いから。

でも、束お姉ちゃんは本当に人気者なんだね。

それは嬉しい、だから私は話せる範囲で束お姉ちゃんのことを……。

「あの人は関係無い!!」

耳元で叫ばれたかと錯覚するような、大きな声。
声の主は、篝姉さん。

「・・・大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃ無い。教えられるようなことは何も無い」

静まり返る教室、箒姉さんは足早に歩き出して・・・どうしてか一旦、私の方へ。

お、お・・・？

何か話しかけられるのかと思えば、私の目の前を通り過ぎてそのまま廊下へ。

箒姉さんに押しのけられるような形で、私に寄ってきていた生徒が私から離れる。

・・・？

「ね、姉さ・・・」

声をかけようとしても、にべも無く教室の扉が閉められる。うう・・・昨日もだけど、今日も箒姉さんと話せないかも・・・。と言いか箒姉さん、授業だよー・・・？

「・・・ほら、不満そうにするなガキ共、授業だ授業」

後には、千冬姉様の手を打つ音が、虚しく響く・・・。

と言いか、不満って何？

不満そうにする箇所、どこかにあったかな？

Side セシリア・オルコット（イギリス代表候補生）

男が、生意気にも専用機！

データほしさ
物珍しさでの提供と言っことらしいですが、それにしても不愉快ですわね。

専用機持ちと言う意味で、あんな男と私が同格に置かれたと言っことなのですもの・・・。

・・・まあ、良いですわ。

専用機持ちにも、格の違いがあることを教えて差し上げますわ。それに同じ条件で戦った方がフェア・・・そして嫌でも実力の違いを思い知るでしょうから。

男が女に勝てるなんて、あり得ないのだと言っことを。

「安心しましたわ、まさか訓練機で対戦するとは思っていませんでした。しょうけど？」

授業が終わった頃を見計らって、あの男に声をかける。

織斑一夏、不愉快にも世界中が注目していると言っ男に。

「私も専用機持ちですから？ 訓練機を相手にするのもフェアではありませんからね」

「へー・・・」

「馬鹿にしますの？」

「いや、すげーとは思っけど・・・どうすげーのかわからないだけで」

それを一般的に、馬鹿にしていると言うのではなくて！？

・・・ふう、いけませんわ、庶民、それも男に感情を乱すなんて私らしくも無い。

ま・・・男ですから、知らないのも無理はありませんわね。

専用機は、極端に言えば世界人口60億の中で選ばれた467名にしか与えられない稀少な機体。

代表候補生の中でも、専用機を与えられるのは私を含めてほんの握り。

すなわち、エリート中のエリートにしか与えられない特権。

女性優遇のこの時代、専用機持ちはある意味で国家首脳よりも強い権限を持っていますのよ？

それを、こんな男などに・・・本当に気に入らせんわ。

「・・・そう言えば貴女、篠ノ之博士の妹さんなんですってね？」

どう言うわけかこの男・・・織斑一夏の傍にいる篠ノ之箒と言う少女に、声をかける。

入学時に見た名簿と自己紹介の時にもしやと思っていましたが、先程の休憩時間の騒動で言質を取れましたもの。

何しろ、日本人の名前の特徴とか、まだ良くわかりませんの。

とにかく、この篠ノ之箒と言う少女はあの稀代の大天才、篠ノ之束博士の妹。

ISの開発者にして世界唯一のコア製造者、各国が血眼になって探している、あの篠ノ之博士の。

ISの保有数が軍事力の大きさに直結する現在、篠ノ之博士を味方に引き入れた国家が覇権を握るのは自明。
だからこそ、その妹である篠ノ之箒はイギリスの人間として放置できない……。

「妹と言うだけだ」

「……ま、まあ、どちらにしてもこのクラスの代表に相應しいのは私、セシリア・オルコットであることをお忘れなく」

とりあえず言いたいことは言いましたし、こんな男の近くからはとつと離れるが吉ですわ。

……べ、別に篠ノ之箒の目つきに気圧されたわけではありませんでしてよ？

そこの所、誤解無きように。

……後で、もう1人の妹さんの方に声をかけましょう。

篠ノ之箒よりは、とつきやすそうでしたもの。

……いえ、別に篠ノ之箒が怖いとかそう言うわけではけしてなくてですね……。

とにかく、誤解無きように！

昼休みになると、一夏は私を昼食に誘ってきた。

私は良いと言うのに、無理矢理・・・他のクラスメイトも誘おうとした所を見るに、今日の休み時間での一件以来クラスで浮いていた私をフォローしてくれようとしたのだと思う。

好意は嬉しいが・・・クラスの女子は私では無くて一夏と食事に行きたかっただけだと思う。

だから良いと言ったのに、一夏は私の手を離してくれなかった。結果、恥ずかしさの余りに、その・・・古武術で一夏を床に投げってしまった。

それを見たクラスの女子は散ってしまって・・・一夏は溜息を吐いていた。

わ、悪いことをしてしまったが、呆れられてしまったらどうか・・・？

「よし箸、飯を食いに行くぞ」

「い、いや、私は良いと・・・」

「黙ってついてこい」

「・・・む」

そして最終的には、一夏と2人きりで食堂で昼食を取ることになった。

いや、別に2人きりになるのを狙ったわけでは無くて・・・そう、これは一夏が無理矢理、故に私は悪く無い。

「良いか？ 頼まれたからって俺はこんなこと、普通はしないぞ？ 箒だからしてるんだぞ？ 幼馴染で同門なんだからな」
「べ、別に・・・頼んで無いだろ」

幼馴染で、同門だから。

一夏はそう言った。

私の家は、剣道の道場をやっている・・・子供の頃、一夏とそこで一緒だった。

男の子にイジめられていた私を、助けてくれたりとか・・・まあ、いろいろあった。

・・・懐かしい、な。

楽しかった、毎日がドキドキして・・・本当に。

・・・姉^{たばね}さんが、ISなんか作るまでは。

そのせいで、一夏とも、父さんや母さん、それに楓・・・・・・・・・・離れ離れに、一家離散だ。

私の幼少時代は、そこで終わったんだから。

「そっぴやさあ」

「・・・なんだ」

いけない、せつかく一夏が昼食に誘ってくれたのに。

私は慌てて定食の味噌汁に口をつける。

「ISのこと教えてくれないか？ このままじゃ来週の勝負で何もできないまま終わっちゃう」

かつ・・・と、身体が熱くなるのを感じた。

一夏が私に、ISのことを教えてほしいと頼んできた。ただ私は。

「くだらない挑発に乗るからだ、馬鹿め」

違う、こんなことが言いたいわけじゃないのに。

・・・自分が嫌いになりそうで、ほうれん草のおひたしを箸でつつく。

「頼むよ、箒、なあ・・・」ねえ、キミ」・・・へ？ 俺ですか？」

「キミって噂の子でしょ？ 代表候補生と試合するって本当？」

「・・・？」

その時、先輩 リボンの色からして、3年生 が1人、話しかけて来た。

名前も知らない、たぶん、一夏も知らない。

良く分からないが、一夏の隣の椅子に図々しく座って・・・な、何なんだ？

「キミってさ、IS稼働時間いくつくらい？」

「え？ えーっと、20分くらい？」

「それじゃあ無理よ、稼働時間」上達・強さだもの」

ISの稼働時間は、操縦者の熟練度に比例するのは確かだ。

昔でいえば戦闘機乗りの飛行時間、それはISでも変わらない。

代表候補生クラスになれば、300時間は最低でもISの稼働訓練を受けているだろうな。

「・・・で、さ？ 私が教えてあげようか、ISのコト」

「・・・！」

突然、その先輩がまるでか、一夏に身体を擦り寄せるようにそんなことを言った。

さつきとは別の意味で、身体が熱くなる。

一夏自身は特に何も感じていないような顔をしているが、私は気が
気じゃ無い。

「結構です。私が教えることになっていきますので」

「あ、教えてくれるの？」

「あれ？ でも貴女1年生でしょう？ 私の方が上手く教えられる
と思うよ？」

先輩の言葉に、たじろぎそうになる。

確かに、1年生が教えるよりも3年生が教える方が良いと考えるのが普通だ。

それに私自身、そこまでISに乗った経験があるわけじゃない。少なくとも、代表候補生クラスには及ばない。

だけど、このままだと一夏がとられる。

せっかく、一夏と話ができるのに・・・何か、何か無いか。

私が3年生よりもISについて詳しいと、わからせる何か・・・。

「・・・私は」

・・・どれだけ考えても、1つしか無かった。

でもそれは、とても身勝手で・・・本当に、嫌で。

だけどそれしか思いつけない自分が、とてつもなく・・・。

「私は、篠ノ之束の妹ですから」

さっき、クラスであれ程「関係無い」と啖呵を切っておきながら、都合の良い時だけ、姉たばねさんの名前を出す。

「篠ノ之つて・・・え、ええ!？」

「・・・ですから、結構です」

「そ、そう・・・それなら、仕方無いわね」

先輩が、私の言葉に・・・姉たばねさんの名前にたじろいで、去って行く。その背中を見つめながら、私はどうしようも無く嫌な気分になっていた。

「何だ・・・教えてくれるのか？」

「そう言っている」

一夏の言葉に叩きつけるようにそう返して、私は再び味噌汁を啜った。

・・・一夏の顔を、見れなかったから。

Side 一夏

放課後、箒に剣道場に来いと言われた。

いや、俺はISのことを・・・と言おうとしたら、「一度、腕が鈍っていないか見たい」と返された。

その後は「見てやる」の一点張りだったもんで、俺は了承するしか無かった。

千冬姉と言ひ箒と言ひ、俺の周りには強情な女しかない。そう言う運命なのかもしれない、やれやれだ。

「行くぞ」

「ああ」

放課後、剣道の道着やらタオルやらを取りに一旦、寮の部屋に戻った。

・・・まあ、つまりは同じ部屋なのだけでも。

やっぱりこれ、問題あるよなあ・・・。

箒だって嫌だろうし、早く個室を用意してくれない物が・・・。

いや、本当は個室が用意できるまでは自宅通いの予定だったんだよ。でも家にいると日本政府とか各国大使館とか研究所から、「生体を調べさせてほしい」って人が押し掛けてくるんだよ、誰が頷くか馬鹿。

いくら「世界初の男性IS操縦者」だからって、人を実験材料みたいに言うなよ。

・・・で、千冬姉によって無理矢理、箒の部屋に押し込まれたわけ。

普通、女の子いれるだろ・・・妹の楓とか、でもそう言ったら。

「姉妹や血縁者を同じ部屋にしてはならない」

・・・と言う規則を示されて、そうですかーと引き下がらざるを得なかった俺である。

ああ、そうだ楓と言えば・・・。

「・・・なあ、箒」

「なんだ」

「楓とは話したのか？」

「・・・」

「・・・おい」

「・・・」

「・・・無視ですか、そうですか。」

束さんのこともそうだけど、箒は楓のことが会話に上ると黙っちまうんだよな。

箒と2人、寮の廊下を歩きながら腕を組んで考える。

えーっと、確か束さんがISを作った小4の頃に転校してからのことを、俺は良く知らないんだよな。

日本政府の重要人物保護プログラム・・・だっけ？　で、いろんな場所を転々としていたってことしか。

だから中3の時、新聞で箒が剣道で全国優勝した記事を見た時は驚いたぜ。

「・・・いや、今はその話は良いな。」

しかしアレだ、親に捨てられて千冬姉と2人暮らした俺に言わせると、姉妹仲が良くないって言うのは気になるんだよな。どうにか、話だけでもさせられない物か・・・。

「なあ、ほう・・・き？」

「・・・」

その時、箒が立ち止まった。

表情は強張っていて、その視線を追うと・・・そこには。

何人かの生徒に囲まれた、楓の姿があった。

何してんだ、アイツ・・・？

S i d e 楓

・・・どうしよう、東お姉ちゃん。

今日も、箒姉さんとちゃんとお話できなかったよ・・・！

数年ぶりの再会だから、もう少しこう、何かあると思ってたんだけど。

「東お姉ちゃんだったら、有無を言わず抱きついて来るのに・・・」

そんなことをブツブツと呟きながら、寮の自分の部屋から箒姉さんの部屋に向かう。

まあ、良く考えてみれば箒姉さんは東お姉ちゃんと違ってスキンシップとか好きじゃ無かったしね。

むしろ東お姉ちゃんが過剰だと思う。

あれ？　じゃあ篝姉さんの反応が常識のある普通の行動なのかな・・・？

それはそれとして今日こそ、篝姉さんとちゃんと話しないと・・・。

東お姉ちゃんから、篝姉さんにいろいろと言伝ても頼まれてるし。何より、私が篝姉さんといういろいろお話したいし。

「あ、あの子じゃない？」

「ホント？　噂になってる子？」

「・・・お？」

途中、寮の廊下で何人かの生徒に鉢合わせた。

私と色の違うリボンをつけてるから、上級生だね。

2年生か3年生かは、ちょっと自信が持てないけど。

「ねえねえ、ちょっと良い？」

「あ、はい、何でしょう？」

「貴女、篠ノ之博士の妹さんって本当？」

「えーっと・・・まあ、はい、そうです」

噂とは何のことやらさっぱりだけど、東お姉ちゃんの妹って意味ならその通り。

隠す意味も無いし、と言うか調べれば一発だしね。

学校って噂が広まるの早いつて聞いてたけど、本当なんだね。

ちょっと感激、生で見れるなんて。

私が頷くと、先輩方は黄色い声を上げる。
おお、ちょっと耳に来た。

「ねえねえ、篠ノ之博士ってどんな人？」

「やっぱり天才？ 頼んだら会わせてくれたりする？」

「と言うか、貴女も当然ISに詳しいのよね？」

矢継ぎ早の質問、どれもこれも答えにくい物ばかり。

まず、東お姉ちゃんがどんな人かって言われても困る。

私のお姉ちゃんでも・・・そりゃあ天才なんだけど、でも私からしても変な人だし。

会いたいと言われても、私も居場所知らないし。

と言うか、私もだけど東お姉ちゃん、出てきたら捕まるんじゃないかな。

この間なんて、どこかの国の戦闘機に撃墜されそうになってたし。

で、最後のは・・・私が東お姉ちゃんに及ばないのは私が1番良く知ってるし。

私知ってることなんて、基本的には教科書に全部書いてるし。

・・・それ以外で、何を聞きたいのかさっぱりわからない。

うーん、でもちゃんと答えないと・・・。

「・・・何をしているんですか？」

その時、聞き覚えのある声がした。
顔を上げると、そこには。

「・・・箒姉さん」

剣道の道具らしい荷物を持った箒姉さんと、一夏さんがいた。
一夏さんはのほほんとしてたけど、箒姉さんの目が凄く険しい。

「箒って・・・あ、もう1人の方じゃ無い？　あと、男の子だ・・・」

「

「ホント？　ねえ、貴女も篠ノ之博士の妹さん・・・」

「妹と言っただけですが、何か？」

「あ、いや・・・」

ギロリ、そんな擬音が聞こえて来そうなくらいの目つきで先輩方を
睨みつける箒姉さん。

隣で、一夏さんが溜息を吐いてる。

箒姉さんの剣呑な雰囲気吞まれたのかどうなのか、先輩方はそそ
くさと去って行った。

「あ、えと、箒ね・・・」

「・・・」

スタ、スタ、スタ・・・ 箒姉さんは私の横をあっさり通り過ぎて行った。

・・・ま、またお話できなかった。

「あー、うん。元気出せよ楓」

「一夏さん・・・」

軽く落ち込んでいると、一夏さんがポンツと肩を叩いて慰めてくれた。

「俺達これから剣道場の方に行くんだけど、一緒に行くか？」

「あー・・・でも私、先生に呼ばれてまして。その前に箒姉さんとお話したかったのに・・・」

「そ、そっか・・・ま、まあ、たぶん箒も照れてるだけだから、すぐに話せるようになるって、な？」

「はい・・・」

照れてる・・・照れてるのかなあ・・・？

まあ、もう少し頑張ってみようと思う。

それに・・・今の、たぶん・・・。

S i d e 織斑 千冬

第3アリーナ、来週の月曜日には一夏とオルコットが対戦することになる場所だ。

とは言え今日は、別の目的でここを使用させてもらう。

その目的とは、篠ノ之楓の実技試験だ。

本来ならあり得ない処置だが、政府の意向で許可が下りた。

おそらく、「篠ノ之束の妹」を掌中に収める好機だと思っているのだろう。

。 箒と楓、あの双子を入学させて何を企んでいるのかは知らんが・・・

だが下手な手出しができないことも、わかっている。

「束が黙っているはずも無いからな・・・」

「・・・？ 何か言いましたか？」

「ああ、いや、何でも無い」

・・・アレの姉、篠ノ之箒がIS学園に入っただのは、他に束が納得できる場所が無かったからだ。

政府や委員会による度重なる詰問と転居、それによってアレが受けた精神的な苦痛は相当な物だったろう。

そしてあるルートからそれを知った束は・・・。

篠ノ之箒の獲得に関係しようとした企業・組織を、1日で全て壊滅させた。

それも一滴の血も流さず、死者も出さず・・・ただ、物理的に壊滅させた。

その方法は、誰にもわからない。

それで失われたデータと機材は、金額にすると兆を軽く超える。もちろん、ドル換算でな。

・・・私がいるIS学園だけが、確保できてしかも安全な場所だった。

「・・・山田先生、準備は？」

「あ、大丈夫です」

アリーナの中央に、1機のISがいる。

それに乗っているのは山田先生で、彼女は元々入試の教官だった。加えて言えば日本の代表候補生だったわけだが・・・それは良いな。

乗っている機体は『ラファール・リヴァイヴ』・・・フランス製のISだ。

ネイビーカラーをした4枚の多方向加速推進翼が特徴的で、量産型ISの中では世界第3位のシェアを誇る機体、操縦のしやすさと汎用性の高さが売りの第2世代IS。

「専用機が相手だと、ちょっとキツいかもですけどね」

「冗談を、山田先生なら専用機持ちのガキに負けはしませんよ」

実際、山田先生は強い。

私だって油断すれば負ける・・・まあ、ここ数年はISに乗っていない私が言うのも、おこがましいが。

その山田先生がこれから模擬戦・・・試験をするのは、篠ノ之楓とその専用機。

スペックや機体特性などは束の送りつけたデータで見ているし、コアも束所有の登録済の物。

書類申請上は、「試験機」として篠ノ乃楓に「貸与」と言う形になっている。

国籍をどこにするか、一夏の専用機と合わせて国際間で話し合われているが・・・。

・・・下手なことをすると束に制裁されかねないから、話し合いは進んでいないのが実情だが。

「お待たせしましたっ」

「遅い！ 5分前行動が基本だと教えなかったか！」

「す、すみません！！」

指定した時間の少し前に、受験者・・・つまり、篠ノ乃楓がやって来た。

そのまま私達の前に来て、背筋を伸ばして立つ。
心無し、緊張しているようにも見える。

・・・当たり前だが、2人の姉のどちらとも違う反応だな。

「これより試験を行う。基本的にはISを動かせば良いが・・・
一応、こちらの山田先生と模擬戦をして貰う」

「よろしく願いますね」

「は、はいっ、願います！」

物凄い勢いで頭を下げる・・・その後、山田先生とペコペコし合っ
て止まらなくなったが。

まあ・・・とにかく、見せて貰おうか。

「では、ISを起動しろ・・・お前の姉には許可を取ってある、安
心してやると良い」

「・・・はい」

私の言葉に、篠ノ之楓は左手の中指に嵌めていた黒い指輪を撫でた。
それが、待機状態らしい。

専用機として「最適化」したISは、量子化して形態を変える。
基本はアクセサリーの形になる・・・ああ言う、指輪とかにな。

「・・・おいで、『黒叢』」

小さな眩き、同時に操縦者の身体が光の粒子に包まれる。

現れるのは、インフィニット・ストラトス・・・IS。
それは・・・。

S i d e 篠ノ之 束 たばね

んー・・・暇だなあ、楓ちゃんもいなくなっちゃったしなー。
引越しもとりあえず終わったし、篝ちゃんや楓ちゃんやいつくん
にちよっかい出しそうな所も全部潰しちゃったしなー。

ちーちゃんが怒るから、死亡者はゼロ。
え、どうやったかって・・・さあ、覚えて無いや。
いーじゃん、どーでも。

「楓ちゃんは今頃、とつくのとつくにあそこについてるよねー、良
いなあ、篝ちゃんといっぱいお話できてるんだろっなー」

篝ちゃんはお姉ちゃんに冷たいって言うか、嫌ってるからね。
何せ、電話もかかってきたことも無いし、かけても無視だしね。

その時、束さんの携帯電話からゴッドファ ザーのテーマが鳴り響
く！

こゝこの着信音は・・・ちーちゃん！

東さんはもう、それはそれは俊敏に携帯電話を取ったね！

「もすもす終日^{ひねもす}ー、東さんだよーんっ！」

そして、出た瞬間に切られた、ぷちっと。

あーん、待つて待つて、ちーちゃん待つて！

そう念じたら、再びゴッ ファーザーのテーマ、ちーちゃん愛してるう

「やふー、この世一の天才、東・・・いやいや、切らないで切らないで・・・」

その後、ちーちゃんに5分くらい怒られた。

うふふ、ちーちゃんだけだよ、私を怒れるの。

他の人なら、明日には一文無しになってるんだから。

「それでそれで、何かなちーちゃ・・・え？ 何だアレはって、何の話？」

はあ、はあはあゝ、なるほど、楓ちゃんのIS見たんだ？

ああ、うん、まあ、アレは確かに半分くらい私が作ったんだけどね。基本設計は楓ちゃんだよ、私はお姉ちゃんだから、ちょちょゝっと

手伝っただけで。

「アレはねえ、そうだねえ、何と言うか・・・うん、他のISとはコンセプトがね、違うんだよ」

何と言っても、後から生まれる2機とセットのつもりでいろいろしたからさあ。

アレ単体だと、いろいろと変なことになるんだよね、うん。

まあ、天才の束さんが、弟子で助手で可愛い末の妹な楓ちゃんのために作ったからね、他のとは千味くらい違うよね。

「ああ、『ひやくしき白式』？ モチロン大丈夫・・・」

クルツ、と座ってた椅子を反対側に回して、「それ」を見上げる。
そこには・・・「白」がある。

束さんがいっくんのために丹精込めて作ってあげたISが・・・。

「来週の月曜日には、ちゃんと届けてあげるからね、ちーちゃん」
「

束さんをお願い事ができるのは、この世で4人だけなんだから。
うーん、サービス精神旺盛だね、流石は天才の束さんだねっ。

第2話：「クラス代表決定戦・前編」（後書き）

篠ノ之 楓：

どうもです、どうにか学生生活も軌道に乗って来た・・・と思う、楓です。

そもそも学生生活って何をすれば良いのかさっぱりだけど、とりあえずお友達を作る所から初めて見ました。

今日は、この世界でのISの運用に関する国際的な取り決めなどについて説明させて貰いますね。束お姉ちゃんはバラまくばかりで後は放置だから・・・。

ある事件を境に、ISは現行兵器を上回る機動兵器としてデビュー、各国はこの新たな脅威の扱いについて話し合うことになります。

まあ、束お姉ちゃんが日本人だったんで、基本的に世界中から日本が叩かれていたようです。

長いようで短い話し合いの後に締結されたのが「アラスカ条約」。

アラスカ条約：

正式名称は「IS運用協定」、通称「IS条約」。467のISコアを主要国に「平等に」分配することや技術・情報開示、関連製品取引の規制などが取り決められてます。軍事転用の「禁止」も盛り込まれてますけど、誰も守ってません。IS学園の設置についてもここで明記されています。各国のIS保有数や動向を監視する機関としては国際IS委員会がありますけど、これも結局は主要国のクラブです。

モンド・グロツソ：

主要21カ国・地域が参加するISの対戦の世界大会。各部門の優

勝者は「ヴァルキリー」、総合優勝者は「ブリュンヒルデ」と呼ばれて称えられます。千冬姉様はどちらも持ってます、凄いですよね！。

篠ノ之 楓：

・・・とまあ、こんな感じです。

その他、いろいろ細かい規定とかありますけど・・・ほとんどあつて無いような規定ですし、そもそもISはブラックボックスが大きいので。

・・・もしかしたら、東お姉ちゃんが面倒がって適当に組んだシステムかもしれないし。

篠ノ之 束：

むふ？ そんなこと言うお口はぐ、こつだぐ

篠ノ之 楓：

あばばば・・・っ

第3話：「クラス代表決定戦・後編」（前書き）

もしかしたら、楓VS山田先生な展開を期待しておられた方。
残念、まだ引っ張ります（申し訳ありません）。
では、どうぞ。

第3話：「クラス代表決定戦・後編」

第3話：「クラス代表決定戦・後編」

S i d e 織斑 一夏

入学式のあった次の週の、月曜日。
つまりは、俺とセシリアの対戦の日だ。
ただし、大きな問題が2つある。

「なあ、箒……ISのことを教えてくれると言っのはどうなったんだ？」

「……」

「……目を逸らすなよ」

1つは、箒が俺に剣道の稽古しかしてくれなかったことだ。
いや、もちろんありがたい……試合の感覚を取り戻すのも大事だ
つてのはわかる。

何しろ中学時代は家計を助けようと それでも生活費の9割は
千冬姉が出してたけど 3年間、アルバイト生活で剣道なんて
して無かったからな。

だけど問題はこの1週間、剣道しかなかったことだ。

個人的に教科書を読んだり山田先生のレクチャーを受けたりはした
物の、それ以外はさっぱり。

楓を頼ってみたこともあるが、「箒姉さんに教えて貰う約束をしたでしょ」と突っぱねられた。

おかげで毎日毎日放課後3時間、みっちり箒と剣道の日々だった。

「し、仕方が無いだろう、お前のISだってまだ来てないんだから」「いや、それでも基礎とか知識とか、いろいろあっただろ・・・？」

そしてもう1つ、当日だと言うのに俺のISがまだ来ていない。そう、まだ来ていない。

・・・大事なことから、2回言った。

一応、千冬姉に呼ばれた通り、第3アリーナのAピットに来たんだけど・・・。

「お、織斑君織斑君織斑君ッ！」

不意に、3回も呼ばれた。

顔を上げれば、転びそうな足取りでこちらに駆けて来る山田先生。

千冬姉は歩いてるのに、どうして走ってる山田先生と並んでこっちに来れるんだろう。

「山田先生・・・と、千冬ねって、痛あつ!？」

「学校では織斑先生と呼べと言っている。いい加減に学習しろ、さもなければ死ね」

出席簿で俺を殴るのは、もちろん千冬姉。

実の姉からの温かい言葉に、俺は涙が出そうだった。

俺の周りの女性は、どうしてこんな・・・それとも、女尊男卑の時代の影響か？

いや、時代のせいにするのは良く無いな、うん。

「そ、それですねっ、来ました、織斑君の専用IS！ピットに搬入してあります！」

「織斑、さっさと準備をしろ・・・アリーナの使用時間は限られている。ぶつつけ本番でモノにしろ」

「男子たる者、この程度の障害は軽く乗り越えて見せろ、一夏」

山田先生、千冬姉、箒がそれぞれ俺を激励してくれる・・・激励、だよな？

でも俺、何をしたら良いのかさっぱりわからないんだが。

プシュッ・・・空気の抜けるような音共に、ピットへ出る扉が開く。山田先生に背中を押されて、たたらを踏みながら中へ。

そこにいたのは、『白い騎士』だった。

真っ白な、純白の、飾り気のない無骨な鎧。

それが第一印象、装甲の一部が開いていなければ、乗り物だとは気付かなかったかもしれない。

真っ白なそれは、まるで俺を待っているかのように膝をついていた。これが、俺の。

「・・・これが？」

「はい、織斑君の専用機・・・『ひまへし白式』です！」

白一式と書いて、『ひまへし白式』。

どうしてだろう・・・このISがまるで、ずっと俺を待ってたみたいに感じるのは。

これが、俺の・・・と、1歩近付いたその時、誰かが『ひまへし白式』の陰から出て来た。
それは・・・。

「どうも、箒さん、一夏さん」

「・・・楓!？」

あ、箒とハモった。

そこにいたのは、箒と同じ顔の女子だった。

髪は箒と違って短く、表情も厳しさよりも緩さが目立つ。

ミニのスカートとオーバーハイの靴下の間の肌色が、眩しい。

・・・って言うか、気のせいで無ければ、箒が楓の名前を呼ぶのを初めて聞いた気がする。

そのせいなのかどうなのか、楓は箒を見ると嬉しそうにっこりと微笑んだ。

「背中を預けるように、ああそうだ、座る感じで良い。後は勝手にシステムが最適化してくれる」

「あ、ああ・・・」

千冬姉様の言葉に従って、一夏さんが『びやへんしき白式』に乗る。

カシュッ・・・渴いた音がして、一夏さんの身体がISと「融合」する。

操縦者とISの「意識」が繋がる瞬間で、人によっては違和感を感じることもあるけれど。

どうやら、一夏さんは大丈夫みたい。

私にはわからないけど、一夏さんは今『びやへんしき白式』から膨大な情報を得ているはず。

操縦方法、性能、特製、装備、活動時間、エネルギー残量、出力限界、そして「敵」の情報。

ISは操縦者が必要とするあらゆることを教えてくれる、パートナー相棒として。

「ISのハイパーセンサーは、問題無く動いているようだな。一夏、気分は悪くないか？」

「・・・大丈夫、千冬姉、行ける」

「・・・そうか」

千冬姉様と一夏さんが、おそらくは身内にしかわからないだろう視線の交わし方をする。

そう言うの、素敵だと思う。

私が箒姉さんを見ても・・・あ、また逸らされた。

割とシヨック・・・。

「ところで、楓はさつきから何をしてるんだ・・・？」

「見てわからないのか、馬鹿者。お前のために『フォーマット初期化』と『ファイッテ最適化^{インク}』をしてるんだよ・・・篠ノ之妹、間に合いそうか？」

「時間が足りません」

千冬姉様の声には、きっぱりと答える。

答えないと後で何をされるか・・・まあ、出席簿の一撃だけだと思うけど。

そんな私の前には、空間投影式のディスプレイとキーボード、それぞれ6枚と2枚。

キーボードの上で指先を躍らせながら行うのは、『ひやくしき白式』の^{フォーマット}初期化作業。

このISを本当の意味で一夏さん専用にするためには、まずコアから前の機体の情報を消して、さらに一夏さんの情報を入力しなければならぬ。

1秒ごとに、ソフトウェアとハードウェアが一夏さん専用のそれに微修正されていく。

普通、何時間もかけて少しずつやる作業なのだけんど・・・。

「え、ええと・・・ありがとう？　でも何で楓が？」

「コイツは整備科志望だからな・・・本当は専用機には整備チームがつくが、お前にはまだ無い。手伝って貰えるだけありがたいと思えよ」

「な、なるほど」

・・・2つのキーボードを同時に扱って、どうにか『フォーマット初期化』を最終段階まで進める。

同時に一夏さんの情報の入力を初めて『フィッティング最適化』。時間が無いから、いろいろな作業を一度に済ませないと・・・。

・・・ハイパーセンサー接続、最適化完了、操縦者視界良好、クリアー。

機体制御システムオンライン、姿勢保持システム及び各部推進装置グラフィティ・ヘッドの偏向重力推進角錐度数をアトランダム設定して最適数値でそれぞれ自動固定、加減速補助システム作動・・・バックシフ・イナーシャル・キャンセラーPIEC関連システム問題無し。

登録武装・・・あれ？　一個だけか、じゃ良いや。

推進ユニット・コントロール・システム最適化、エネルギー・バイアス・オペレーティング・システム及びシールド・エネルギー制御システム更新・再構築・・・それぞれ30秒以内に再実行、仮想試験結果を反映しつつ数値変更・・・。

「・・・凄い・・・」

山田先生の声、でも私はそんなに凄く無い。

束お姉ちゃんなら、1分もあればこれくらいの作業は終わらせてる。でも私は搬入の時点から3分経つても、『初期化^{フォーマット}』しかできてない。まだ半分も……。

「……篠ノ之妹、もう良い。後は一夏が試合中に何とかするだろう。できなければ負けるだけだ」

「ああ、サンキューな楓」

「……わかりました」

『白式^{ごまへつし}』からコードやケーブルを抜いて、接続を解除する。後は『白式^{びやくしき}』が自動で『最適化^{フィッティング}』する、でも試合終了まで間に合うかどうかはわからない。

……悔しい、凄く中途半端な仕事をした気分。
でも一夏さんは、凄く落ち着いた笑顔でお礼を言ってくれる。
それから、心配そうに一夏さんを見ていた篝姉さんの方を向いて……。

「篝」

「な、なんだ？」

「……行ってくる」

「……ああ」

一夏さんの言葉に、篝姉さんが少しだけ微笑む。

・・・・それに私が少しだけ驚いている間に、一夏さんはピットの会場側出口の方へISを進ませる。
重い音を響かせて、『白式^{びやくしき}』が歩く。

・・・良かった、ちゃんと動く。
でもあのシステム構築様式、確か東お姉ちゃんの・・・。

「・・・勝つてこい」

祈るような篝姉さんの声に、一夏さんは篝姉さんを見ずに手を上げるだけで応える。

おお、良く分からないけど、通じ合ってる感がある。
そして、一夏さんはゲートの外へと・・・。

Side セシリア・オルコット

・・・私の母は、厳しくて強い人でしたわ。
女尊男卑の風潮が世に広まるよりも前から、いくつもの会社を営
んで成功した人。
家柄でも能力でも母に劣っていた父は、いつも母の顔色を窺ってい
た・・・。

そう、だから「男なんて」そんなもの。

そんな2人の間の愛情が続くはずもなく、母はいつしか父を避けるようになっ ていきました。

でもあの日・・・3年前、死者100人を数えた越境鉄道事故で2人が亡くなった時。

その日だけは、どうしてか2人一緒に・・・でもその理由を考える間もありませんでした。

私は両親の財産を狙う下種共から家を、両親の遺したものを守るため、勉強の日々を過ごし。

そして・・・。

「・・・『ブルー・ティアーズ』」

小さな声で囁くのは、私の身体を覆う青の鎧の名前。

鮮やかな青、背中には特徴的なフィン・アーマーを備えた蒼穹の騎士^{アイ}。

これが私の、一つの結果ですわ。

IS適正テストで世界でも有数のランク・・・「A+」を出して。

政府から国籍保持のための好条件が出されて、家を守るために受け入れました。

そして第3世代試験機のこのISの専属操縦者になり、稼働データと戦闘実績を得るために日本へ。

だから彼と戦うのは、そのためでもありますの。

「個人的に気に入らないと言う気持ちも、まあ、ありますけど・・・」

何しろ、男だと言うだけで専用機まで与えられるのですから。

私が数年かけて　それでも短い方だと言うのに　手に入れたものを、彼は数日で。

男だと言う、ただそれだけの理由で。

・・・叩き潰して差し上げますわ。

私がそんなことを考えた時、ようやく彼がピット・ゲートから姿を現しましたわ。

私の目の前にディスプレイが浮かび、『ブルー・ティアーズ』が彼の・・・織斑一夏のISの情報を教えてくれます。

ありがとう、『ブルー・ティアーズ』・・・でも大丈夫、私と貴女が負けるはずがありませんわ。

「最後のチャンスを差し上げますわ」

「・・・チャンスって？」

「私と『ブルー・ティアーズ』が、一方的な勝利を得るのは自明の理。今、ここで謝罪すると言うのなら、許してあげないこともなくつてよ？」

<射撃コマンドを展開、セーフティロック解除>

頭の中に響くのは『ブルー・ティアーズ』の声、同時に左目の部分にターゲット・ロック・システムが展開、右腕部分に展開されている主力レーザーライフル「スターライトmkⅠⅠⅠ」にエネルギーが充填されます。

そして同時に、試合開始の鐘が鳴り響きます。

彼も気付いたのでしょうか、身構える。

あの白いISの性能自体は、それなりのようですね。
でも……。

「……そう言うのは、チャンスとは言わないな」

「あら、そう？ 残念ですわ、それなら……」

< ターゲット・ロック
標的確認、 射撃開始まで3秒、 2、 1…… >

……でも本人の能力は、どうかしらね！

「……お別れですわね!!」

トリガーを引いて、甲高い独特の射撃音が響く。
同時に、私の『ブルー・ティアーズ』から最初の射撃ショットが放たれました。

「うおおおっ!？」

いきなり撃ってきやがった!

いや、もう試合開始の鐘は鳴ってるんだから、卑怯でも何でもない。ただ、俺がボンヤリとしてただけだ。

一応、ギリギリでかわしたけど・・・俺の手柄でも何でも無く、『
白式』のオートガードが俺を守ってくれたただけ。
オートガードだから、俺の意思とは関係無く、『
白式』が動いただけ。
つまり、俺が『
白式』の反応についてこれて無い・・・!
と言うか、動かし方だって碌にわからん!

<ダメージ46、シールドエネルギー残量521>

頭の中に『
白式』の声が響く、ちなみに今やってるみたいなIS同士の戦いは、「ISバトル」と言うスポーツとして世間に認知されてる。

まあ、学園では普通に模擬戦って言うんだけど。

「ISバトル」と言うこのスポーツは、相手のシールドエネルギー・

ヒットポイント

・まあ、HPみたいな物をゼロにすれば勝ちだ。

エネルギーがゼロになると実体（本体）にダメージを通せる、それで勝ちつてわけだ。

後、ISには「絶対防御」って言うシステムがあつて、最低限操縦者が死なないようになってる。

・死ぬとか、縁起でも無いけどな。

「さあ、踊りなさい！ 私、セシリア・オルコットと『ブルー・ティアーズ』の奏でる円舞曲で！！」

声と同時に、セシリアの射撃が雨のように降り注いでくる。

いくらオートガードって言っても、全部を凌げるわけじゃない。

しかも相手の射撃が的確なもんだから、ガンガン当たる・・・直撃だ、しかも連続。

と言うか、避け方がわからん。

おかげで、『白式』も警戒音を鳴らしっぱなしだ。

上へ避けても左に飛んでも・・・200メートルもあるアリーナなのに、どこへ飛んでもセシリアの射撃が俺を襲ってくる。

・・・アイツ、凄いな。

「・・・って、感心ばかりしてらんねえ・・・何か、武器は」

丸腰じゃ無理だ、『白式』に武器の一覧を出すように頼む。

・・・って、1個だけかよ！？

ええい・・・ままよ！

右手を掲げて、量子化していた武器を実体化させる。

束さんが基礎理論を構築したって言うこの量子化・物質化のシステム・・・いったいどう言う理屈なのか、さっぱりだ。

だけどそのシステムが、俺に武器を・・・1本の「刀」を与えてくれる。

片刃の長刀・・・刃渡り1・6メートル。

「中距離射撃型の私達に、近距離格闘装備で挑もうだなんて・・・笑止ですわね！」

そして、セシリアの射撃。

機体を無理矢理捻って、かわす・・・でも彼我の距離は絶望的、27メートル。

俺の攻撃射程にセシリアを捉えるにはその距離を、しかも弾幕の中を潜らなきゃいけない。

今にして思えば最初の一撃は挑発でも奇襲でも無く、距離を広げるための物だったのかもしれない。

「・・・やってやるさ」

千冬姉や箒、それに『初期化^{フォーマット}』してくれた楓、機体搬入の手続きをしてくれた山田先生に・・・無様な格好は、晒せないよな。
だから、やってやるさ・・・この『白式^{びやくしき}』で！

一夏が、戦っている。

初めてのISバトルで代表候補生との戦い、予想通りと言うか、苦戦だった。

オルコットの射程距離の長さに、近接用の装備しか持たない一夏は翻弄されている。

特に、オルコットの機体から放たれている4機のビットのような物が厄介だ。

青いISの背中についていたフィンが分離して、それぞれ独立したビットになっている。

それぞれが独立軌道で動く銃器のような物で、先端から特殊なレーザーを放つ。

「何だ、アレは・・・?」

「イギリスの第3世代装備『ブルー・ティアーズ』。オルコットさんのISと同じ名前なのは、あの兵器を積んだ実戦投入1号機だから、だとか」

私の呟きに答えたのは、楓だ。

私は千冬さん達と一緒に、Aピットからリアルタイムで一夏の戦い

を観戦している。

目の前の大きなモニターには、第3アリーナで行われている試合が映されている。

私の立ち位置は千冬さんと山田先生の後ろで、そして私の左隣に楓がいる。

楓・・・数年ぶりに会った私の双子の妹。

楓は空間投影式のディスプレイとキーボードを1枚ずつ展開させたまま、一夏の試合をデータ面で分析しているようだった。

その姿は・・・嫌でも、あの人を思わせる。

「見た限りにおいて『ブルー・ティアーズ』　ややこしいので

以下ビット　は相手の死角からの全方位オールレンジ攻撃が可能、まだ稼働実験段階の「BT兵器」と呼ばれる兵装だと思う。展開前にはスラスターとして使用していたようなので、ある程度の汎用性も備えているみたいだね」

楓の声が続く間にも、画面の中の一夏は追い詰められている。

上下左右に展開したビットがビームを放ち、一夏をオルコットのライフルの照準地点に追い込む。

その繰り返しだ、気の休まる暇も無い。

一夏はIS稼働時間20分とは思えない身のこなしで、ビットの攻撃を回避、防御し続けている。

だが、このままでは・・・。

「・・・一方で『白式』^{びやくしき}は現在、近接用のブレードのみを装備。あれはまさに敵を殴りつけないと効果の無いタイプで・・・懐に飛び込めない限り一夏さんに勝機は」
「っ・・・一夏が負けるわけが無いだろう!」

思わず、怒鳴った。

直後に後悔する、何をやっているんだ、私は・・・。

「う・・・ごめんなさい、姉さん」
「・・・いや」

頭を振って、苛立たしい気持ちを落ちつけようと親指の爪を噛む。
この1週間、楓のことを避けていたから・・・これが、数年ぶりの会話と言つことになる。

数年ぶりの会話が、これが。

だが、他に何を喋れば良いのかわからない。
私と違って、あの人と一緒にいた楓。

・・・憎んでいるわけでも、嫉んでいるわけでも無い。
だけど・・・何を言えば良いのか、わからない。

「一夏・・・!」

画面の中では、一夏がオルコットの弾幕を潜り抜けて、ようやく接敵した所だった。

ぎゅっ・・・口元を持って行っていた手を、無意識に握り込む。

一夏・・・。

S i d e 織斑 千冬

後ろで小娘共が騒いでいるようだが、そんなことは知らん。
姉妹の問題に口を出す程、私はお節焼きじゃない。

「はああ・・・凄いですね、織斑君。とてもISを動かすのが2回目とは思えません」

モニター前の椅子に座っている山田先生が、感嘆したように呟く。
確かに、画面の中の一夏は素人とは思えない程の健闘ぶりを示している。

初陣、しかも相手は代表候補生だと言うのに。

画面の中の一夏が、オルコットのビットの1機を叩き斬った。

それは、オルコットのビットの弱点を看破したが故の結果だ。
あのビットは、オルコットの射撃と同時に動かせない。

つまり自動じゃない……それを逆手にとって、一夏はわざと隙を作ってビットを誘導、迎撃する。

そう言っている間に、2機目、3機目と墮としていく……。

「……馬鹿者め、浮かれているな」

「え……どうしてわかるんですか？」

「さっきから左手を閉じたり開いたりしているだろう……昔からのクセだ」

「へええ……流石はお姉さんですね、そんなあいたたたたっ！？」

私をからかおうとした山田先生にヘッドロックをかけつつ、私は画面を注視する。

そこには、4機目……「最後の」ビットを墮とそうとしている一夏が映っている。

とは言え、ダメージは深刻……にも関わらず、その機動性は上昇しているように見える。

普通、ダメージを受ければ機動性は落ちるはずだが……。

「……直前の『最適化』フィッティング作業が、ここに来て生きてきたか」

あの機体は元々、倉持技研と言う日本のIS企業が開発していたが、
・色々な理由で、放棄された。
そしてそれを束が引き取って、完成させた。
……前代未聞の第4世代ISとして。

各国が第3世代の開発に躍起になっている所に第4世代のIS、公表などできない。

アレの整備担当として篠ノ之妹を呼んだのは、他にできる人間がいなかったからだ。

加えて言えば、『びやくしき白式』のコアに接続できるのが私と一夏、篠ノ之かえで姉・・そして篠ノ之妹だけだった。

もちろん、開発者である束は例外とした場合だが。

「・・・束の、弟子か」

先の束との電話で、篠ノ之妹かえでのことを少しだが聞いた。

最も、束の言っていることは8割は意味不明だが・・・。

「・・・何だ!？」

篠ノ之姉の声に、思考を現実に戻す。

画面の中で、一夏が4機目のビットを墮とした時、「それ」は起こった。

・・・機体に救われるか、馬鹿者が。

< 『フィッティング最適化』 終了、確認ボタンを押してください >

な、何だ・・・？

セシリアの最後のビットを刀で斬り落とした後、いきなり『ひゃくしき白式』が話しかけて来た。

目の前のディスプレイに浮かんだ「確認」を押すと、膨大なデータが意識に直接流れ込んでくる。

刹那、俺のISが量子化して・・・直後、再び実体化する。

中世の無骨な鎧のようだったそれは、形がかなり変わっていた。

より曲線的に、よりシャープに・・・そして、直感的に理解する。

これでこのISは、「俺専用」になったと。

ファースト・シフト

「一次移行・・・じゃあ、今までは初期設定だったって言うの!？」

「ふぁー・・・何だつて？」

セシリアが驚いているみたいだけど、俺には細かいことはわからない。

右手の刀を見ると、それもまた形状が変わっていた。

「・・・『ゆきひら・にがた雪片式型』？」

そこには昔、千冬姉さんが現役だった頃の動画で見た、あの刀があ

った。

姉さんの、刀。

刀に形成した……形名。

刀と言うより反りの深い「太刀」、鎬に刻まれた溝からは工業的な粒子が溢れている。

……ああ、そうだよな。

俺は本当に、最高の姉さんを持ったよ。

元「世界最強」……誰よりも綺麗で強い、世界一の姉さんだ。

だから千冬姉が誇れるとまでは言わなくても……恥じることの無い、そんな弟でいたいと願う。

「だから」

チャキツ……新しくなった刀……いや、太刀を両手で持って、下段に構える。

「……『白式』、距離は？」

<16メートルです>

……遠いな、だけどビットは全部落とした。
後はライフルをかわしながら……飛び込む！

「……ぜああああああっ！」

「くっ……面倒ですわ！」

距離を開こうとするセシリア、縮めようとする俺。

これまでの動きが嘘のように、『ひやくしき白式』を思い通りに動かせる。

追いかけては唐突に終わり、ライフルの銃口を蹴りつけて外し、太刀を大上段から振り……。

「お生憎様」

次の瞬間、セシリアの機体のスカート部分が開く。

開いたそこから現れたのは、2つの突起物……つまり。

「『ブルー・ティアーズ』は……6機ありましてよ！」

放たれるのはビームじゃない、2発のミサイル

！

「……！」

だけど、見える。

ミサイルの軌道、どこを狙うのか……頭が判断するのと同時に、機体が動く。

思った通りに、斜めにロール移動。

1 発目、右肩の装甲を掠めつつも回避。

2 発目・・・斬る！

ガンッ・・・両手に鈍い重みを感じると同時に、爆発の衝撃が俺を襲う。

<ダメージ66、シールドエネルギー残量

>

『白式』^{びやくしき}の声も無視して、爆煙の中を直進する。

黒煙を抜けた際には、焦りの色を浮かべたセシリアの顔があった。

・・・獲る！！

「ううおおおおおおおおおおおおっ！！」

下段から上段へ、逆袈裟払い。

『白式』^{びやくしき}から太刀にエネルギーが供給されていくのを感じる、太刀が熱い。

『雪片』^{ゆきひら}の刀身が輝き、俺はその輝きに導かれるように。

・・・太刀を、振り切った。
そして。

Side 篠ノ之 楓

「大馬鹿者め、武器の特性もわからないくせに無理に使うからそうなるんだ」

「大馬鹿者って・・・馬鹿者から嫌な方向にランクアップしないでくれよ・・・」

「何か文句があるのか？」

「・・・無いです」

試合の後、一夏さんは千冬姉様にこつてりと絞られていた。

自分の武器を中途半端に使いやがって・・・と言う内容にも聞こえるけれど、たぶん照れ隠し。

自分の武器を弟が継いでくれたことが、実は物凄く嬉し・・・。

「・・・篠ノ之妹？」

「な、何でも無いデス！」

一夏さんを絞っている千冬姉様の標的が私に移りかけたので、慌て思考を止める。

と言うか何、相手の思考が読めるの・・・？

いや、それ以前に篠ノ之妹って。

東お姉ちゃんから見れば、篠ノ之妹って2人いるよ？

まあ、良いや・・・今はとりあえず、『びやくしき白式』の方に興味あるし。
ブウンツ・・・と私の目の前に上下4枚、合計8枚の空中投影型デ
イスプレイが浮かぶ。

そこには、一夏さんの専用IS『びやくしき白式』の『フィットイキング最適化』後のデータが
映しだされる。

「うーん、やっぱりちゃんとパーソナライズした方が・・・」

千冬姉様に聞いた話だと、これを作ったのは東お姉ちゃん。

どつりで『フォーメット初期化』しやすいと思った、お姉ちゃんは私がやりやす
いようにシステムを組んでくれてたんだね・・・えへ、何か嬉しい
な。

東お姉ちゃんの作ったISを、私が整備。

うん、美しい。

これが箒姉さんの専用機だった日には、きつともつと楽しい
よね。

東お姉ちゃんが作って、私が調整して、箒姉さんが動かす。
・・・理想だね。

「篠ノ之妹、そろそろ良いか」

「あ、はい」

千冬姉様に言われて、『びやくしき白式』との接続を切る。
それから一夏さんが『びやくしき白式』を待機状態にして、白いガントレット

の形になって一夏さんの手首に納まる。

待機状態になったISは、操縦者が望めばその場ですぐに展開できる。

でもここはIS学園、当然のように電話帳並の規則の本がある。

一夏さんは、山田先生からそれを青い顔で受け取っていた。

「・・・何にしても、今日はこれでおしまいだ。帰って休め」

締め言葉は、やっぱり織斑先生。

と言うわけで、今日は一件落着・・・。

「・・・あ」

ふと視線に気が付く、それは篝姉さんの物だった。
いつもと同じ、鋭い視線。

何と言うかこの1週間、上手く話せなかったから・・・ちょっと緊張。

「・・・ISの」

「う、うん・・・」

「ISの整備、姉さんに習ったのか・・・？」

「あ、うん」

「・・・そうか」

それだけ。

それだけ言って、箒さんは一夏さんを連れてピットから出て行った。

・・・ほんの、一言だけ。

たった数秒間だけだけど・・・箒さんと、お話ができた。

それが嬉しくて、私はその場で歓声を上げた。

・・・直後、千冬姉様にはたかれた。

Side 篠ノ之 箒

・・・この感情は、何だろうな。

楓は束姉さんにISのことを教えてもらって、それで一夏のISの『フォーマット初期化』をした。

羨ましい・・・の、だろうか、私は。

まさか、そんなはずは無い。

ただ、私は・・・。

「・・・なあ、箒」

「・・・」

「おい・・・無視すんなよ、篤さん」

一夏の声に、ふと立ち止まる。

振り向くと、何だかバツの悪そうな顔をした一夏がいた。

「・・・勝てなかったな」

「ぐあ」

私の言葉に軽く呻いて、そしてかなり落ち込んだような表情を見せる一夏。

その姿を見ていると、ささくれ立った心が少しだけ安らかになるのを感じた。

我ながらどうかとも思うが、一夏と一緒にいると安らぐ。

・・・ど、同門の人間が傍にいと落ち着くと言う、それだけの意味だ。

それ以上の意味は無い、無いつたら無いからな！

心の中で自己完結した後、再び歩き始める。

当然、一夏もついてくる・・・。

・・・と、当然と言うのは、行く場所が同じだからと言う意味で、共にいるのが当然と言う意味では無いぞ。

「い、一夏」

「ん、何だ？」

「く、悔しかったか・・・？ 勝てなくて」

「そりゃ・・・まあ」

どこか沈んだような一夏の声に、私は少しだけ目を閉じる。

思い出すのは、幼い頃の剣道場。

中学時代は剣を握っていなかったと言う一夏は、あの頃とは違つて物凄く弱くなった。

この1週間、剣を合わせて・・・私から1本も取れなかった程に。

だけど、根本の部分は変わっていない。

今の言葉でそれがわかつて、とても嬉しかった。

・・・楓と話せ話せ言うのは、正直アレだが。

「・・・なら、明日からはISの訓練もいれないとな」

「あ、教えてくれるのか？」

「そう言っただろう」

いつかの会話を繰り返す。

「い、一夏が私にどうしても教えてほしいと言つのならな、仕方無い」

「ああ、そうだな、是非頼むよ」

「・・・う、うむ。では明日からは必ず放課後を空けておくのだぞ、良いな？」

「おう」

・・・明日から、放課後はずっと一夏と2人きり。
い、いや、単にISの訓練をするだけだ、うん、それ以上の他意は
無いぞ！

私は単純に、出来ない同門にいろいろと教えてやろうと言っただけだ。
・・・それだけだからな！

「か、勘違いするなよ、一夏！」
「え、お、おうっ！」

・・・まあ。
とにかく今日は、頑張ったな。
・・・一夏・・・。

S i d e セシリア・オルコット

シャワールームの中で熱いお湯に打たれながら、私は今日の試合に
ついて反芻しておりました。

今日の試合・・・織斑一夏とそのISとの試合を。
私が・・・私と『ブルー・ティアーズ』が・・・。

「・・・一撃を、喰らうだなんて・・・」

今日専用機を持ったばかりの男に、代表候補生であるこの私が、最後の一撃は、いったい何ですの・・・？
私の機体のバリアを無効化して、直接ダメージを与えるなんて、そこで相手のエネルギーが切れましたから、それ以上の追撃はありませんでしたけど。

とは言え、どうして彼の機体が直後にエネルギー切れを起こしたのかもわかりませんわ。
私に一撃を与えた時には、まだ残っていたはずだけど・・・。
・・・そのおかげで機体のダメージが最小限に留められたのですから、不幸中の幸いなのでしょうけど。
でも、もしエネルギー切れを起こしていなかったら・・・。

「・・・結果的には、私の勝利・・・とは言え・・・」

でも昨日今日にISを動かした素人、まともな訓練も受けていない相手。

それに、一撃を許した。

直後に彼のISがエネルギー切れを起こさなければ、ゼロ距離で撃ち落としていたとは言え。

ビットも破壊されて、無様にも程がありますわ。

・・・何なんですの、あの男！

「・・・織斑、一夏」

彼の・・・織斑一夏のことを、思い出す。
最初から女である私に媚びようとせず、むしろ反発して見せた彼。
母の顔を窺ってばかりいた父とは、まったく違いましたわね・・・。

強く、迷いの無い、真っ直ぐな瞳。

最後の一撃の瞬間、視線を交わしたあの時。
あの瞬間だけは、本物でしたわ。
身体にはまだ、あの時に撃ち込まれた一撃の感触が残っています。
そして、私が撃ち込んだ攻撃の感触も・・・。

「・・・織斑、一夏」

初めて会った男・・・男だと言うのに、それでも。
私に、このセシリア・オルコットに一撃を喰らわせた男・・・。
他の男とは違う、何かを感じるのはどうしてでしょう・・・？
たかが、男の分際で。

きゅっ・・・蛇口を捻り、お湯を止める。
湯気で包まれるシャワールームの中、曇った鏡を掌で大きく擦る。
そこに映るのは、見慣れたはずの自分の顔。
・・・もっと良く、知らないといけませんわね。
織斑一夏、私と『ブルー・ティアーズ』に一撃を与えた男の、こと

を。

S i d e 織斑 一夏

セシリアとの試合の翌日、クラスに来たらとんでも無いことになっていた。

具体的に言うと、何故か俺がクラス代表になっていた。

・・・何でだよ、負けだったじゃん俺！

「では、1年1組のクラス代表は織斑一夏君に決定です。あ、一繋がりで良い感じですよね」

嬉しそうにしないでください、山田先生。

クラスの女子達は「唯一の男子なんだから、持ち上げないと」とか「経験が積めて情報も売れる、一粒で二度美味しい」とか言ってるけど・・・いやいやいや！

第一、あのセシリアが納得するわけが。

「私、代表は辞退致しましたの」

・・・って、本人が納得してるし！
それなら、まあ・・・って、そうじゃないだろ！

「おおつ、見事なノリツツコミですね、一夏さん」
「だね、実に見事だと思うよ」

「いやいや楓、のほほん（布仏本音）さんと一緒になって拍手するなよ。」

波長が似てるのか何なのか知らないが、すっかり友達になっているらしい。

箒もあれくらい社交的なら、もう少し人付き合いも上手くなるだろうに。

「一夏？」

「と、とにかく、何で俺が代表なんだよ!？」

隣にいた箒が物凄く剣呑な雰囲気放ったので、話題を戻す。

「・・・と言うか、何で俺の考えてることってバレるんだ？」

俺、わかりやすいのか・・・？

「勝負自体はああ言う結果でしたが・・・初めてのバトルで代表候補生の私とあれだけ戦ったのも。むしろ私が退かないと面目が立ちませんわ。快く代表の座を受け取ってくださいまし」

その心遣い、今は知らないから。

「・・・と言うか、セシリアの俺を見る目が観察しているような物に

見えるのは何でだ？

「ISの技術向上には場数を踏むのが一番・・・クラス代表ともなれば、バトルには事欠きませんもの」

「いや、そうかもしれないけども・・・」

「何でしたら、私が教えて差し上げてても良くてよ？」

「必要無い、私が頼まれたからな、私が教える」

おお、箒さん。

いきなり話に混ざって来たかと思えば、何故か言葉に物凄い棘が。

「あら、そう。なら仕方ありませんわね・・・私は見ればそれで十分ですし」

そしてあっさりと引き下がるセシリア、最初の刺々しさはどこに行つたんだよ。

と言うか、後半に何かブツブツ言っただけか？

いや、まあ、良いけど。

「あ、ね、姉さん・・・」

その後、楓がおずおずと箒に近付いて来た。

期待と不安が混ざった表情で、ツツツと傍に寄って行くその姿は、ちよつと可愛かった。

「そ、その・・・お、おは・・・おはよう・・・」

「・・・」

「・・・えと。あ・・・」

対する箒はと言うと、ふいっと猫のように顔を背けて、自分の座席へと向かって行った。

おい、妹に対して何て態度だよ。

そして楓は楓で、落ち込んだ猫のようにしゅんとしている。

話相手を失ったセシリアも、「やれやれ」と言いたげに肩を竦めて自分の座席へ。

「うーん・・・」

「だ、大丈夫だって楓、箒もさ・・・」

「・・・グッドモーニングの方が良かったかな・・・？」

いや、そこじゃないと思うぞ。

楓は腕を組んで何やら考えながら、自分の座席に戻った。
箒の反対側、廊下側の座席に。

・・・まあ、俺は実の所、あんまり箒と楓のことは心配してない。
先週からの箒の行動を見てれば、何となくだけわかる。

入学式の日、教室と寮で・・・箒、ちゃんと楓のことを守ってたもんな。

束さんのことを聞いて来る生徒から、さ。

「・・・やれやれ」

さっきのセシリアじゃないけど、肩を竦める。
素直じゃ無いんだからな、箒は。
あ、昔からか。

「さつさと席につけ、大馬鹿者が」
「・・・つてえっ!？」

チャイムが鳴ったのに気が付かなかったから、教室に來た千冬姉に
頭をはたかれた。

・・・と、言うわけで。

俺は、1年1組のクラス代表になった。

第3話：「クラス代表決定戦・後編」（後書き）

篠ノ之 楓：

どうもです、「白式」に触れてひやつほうな楓です。

アレは今やどこの企業にも国にも所属していないので、私も触れて嬉しいです。

ま、詳しい所属はまたどっかに決まるでしょ。

それでは今回はIS整備に関する物で、「初期化」と「最適化」、それでもって「一次移行」について説明しちゃいますね。

「初期化」・・・

読んで字の如く、ISのコアを初期化する作業。全世界に配備されているISの内100〜150くらいは研究開発用で、新しいIS（コア外装）の開発に日夜研究されてるわけですが・・・そこで新しい外装にしたり、あるいは操縦者を変更したりする場合は前の外装・操縦者の記憶をコアから「初期化」しないとイケないんです。今回の場合、「白式」に一夏さんを操縦者と認めさせるための第一段階としてその作業が必要だったわけです。

「最適化」・・・

これも読んで字の如く、そのIS（特にコア）を新たな操縦者に適合させる作業。これが終わると「一次移行」と言う現象が起こってその操縦者の「専用機」になることができます。量産機・訓練機なんかは「最適化」せずに使うんで、これは特に専用機持ちの人に施される作業ですね。自動でもできますが、時間が・・・今回の場合、一夏さんが試合中に適合させた感じですね。

篠ノ之 楓：

ふう・・・では次回、セカンドが来るそうです・・・セカンド？
・・・束お姉ちゃん、勝手にドロップ缶持って行かないでね？

篠ノ之 束：

ぎくうっ！？

第4話：「その幼馴染、2番目」（前書き）

妹語録。

妹「ねえ、お兄ちゃん・・・食べて」

何を？

妹「私を」

その時、竜華零に電流走る

！！

*単純にグラム単位で体重が増えたから肉を減らすのを手伝えと言われただけと言うのが、今回のオチです。

第4話：「その幼馴染、2番目」

第4話：「その幼馴染、2番目」

S i d e ファン
 リンイン
 鳳 鈴音

あー・・・疲れた、言い出したのは自分だから仕方無いけどね。
本当ならもう1週間早く、来たかったんだけど。
いやまさか、アイツがあんなことになるとは思わなかったからさ。

「えー・・・本校舎1階総合事務受付ってどこよ」

と言うか、広すぎんのよココ。

初めて来る人に不親切にも程があるじゃない、要塞じゃあるまいし。
・・・まあ、いざって時は要塞になるのかもしれないけどさ。

何たってここはIS技術の最先端、「IS学園」なんだから。

とは言えそこは規則、IS使えれば楽なんだけどな。

でも無断で使うと私の中国クニとの外交問題になるかもだし、そこは自重よね。

何と言っても、私は代表候補生なんだから。

「・・・ふふん」

IS適正「A」、専用機持ちの代表候補生。

年上の大人や男がヘコヘコする、そんな環境がとても心地良い。
まあ、男なんて興味無いけどね。

・・・1人を除いて、ね。

「元気かなあ・・・一夏」

中学2年生の時まで、私はここ・・・日本にいた。

その後は、親の都合で中国^{グニ}に帰らないといけなかったけど。
でもニュースでアイツ、一夏を見て、ここに来ようって決めた。

私は決めた後は行動あるのみ、なタイプだからその通りにした。

政府高官に頼み込んで 向こうも、「唯一の男性操縦者」に近い私は好都合だと思っただろうし 何とか、編入手続きをねじ込んだ。

その代わりここに来るまで強行軍で、こんな夜中に着くことになった
ちゃったけど。

ま、それくらいは必要税よね。

それより一夏の奴、ちゃんと私との約束を覚えて・・・。

「だから、そのイメージがわからないんだよ」

・・・不意に。

1年と少し前まで毎日のように聞いていた声が、聞こえた。

若い男の子の声。

と言うか、ここIS学園に男の子は1人しかいないって聞いているから、この声は……

角を曲がると、「IS訓練用第3アリーナ」って書かれた施設から、誰かが出て来る所だった。

そこに、男の子がいた。

見間違えるはずも無い、中学生の半ばまで毎日のように一緒にいた、幼馴染の男の子。

……織斑、一夏。

嘘、こんなに早く会えるなんて思ってた……。

「だから、こう……飛ぶ時は、くいつて感じた!」

「何だよその独特な感性! そんな擬音で俺にISの何を掴めってんだよ!」

「な、情けないぞ一夏! それでもクラス代表か? クラス対抗戦まで日が無いんだぞ?」

「お前が言っな!」

思ってた……え?

「まったく……じ、じゃあ、明日も放課後に教えてやるからな」

「明日はもう少し理論的に頼むぞ……?」

「それはお前のやる気次第だな」

反射的に隠れて、やり過ごす。

・・・え、何よあの女の子、何であんなに親しそうなの？
そもそも、何で一夏を呼び捨て・・・？

「・・・クラス代表、対抗戦・・・」

・・・その後、事務所はすぐに見つかった。
そこで私は、一夏のこととか対抗戦のこととか、いろいろ聞いた。
いろいろ、ね・・・。

S i d e 織斑 一夏

正直に言おう、俺は今グロッキー状態だ。

何しろ、ISの訓練の後に俺の「代表就任記念パーティー」と言う
催し物があつたからな。

でも途中から俺そっちのけで、夜の10時過ぎまでどんちゃん騒い
でただけだけだな。

ところが今、クラス的女子達はいつもと同じ様子でワイワイ騒いで
る。

どうして体力が持つんだ・・・はっ、女子力ってそう言う意味なの
か？

「またどうせ、くだらないことを考えているのだろう?。」

「な、何を馬鹿な、し、失礼だぞ箒」

「どうだかな」

ふんつ、と鼻を鳴らして、教室まで一緒に来た箒がさっさと自分の席に行った。

箒との同居生活が始まって1週間経つが、箒はどう思ってたんだろうな……。

俺? 着替えとかシャワーとか気が気じゃ無い。

15歳の健全な男の子ですから……まあ、相手が箒で助かった。

これが知らない女子だったら、本気でどうすれば良いのかわからなかったからなあ。

知らない女子と同居してる俺……想像するだに恐ろしいな。

まあ、流石にそんなことは無いだろうけどな。

「……お、おはようございまーす!」

「えへへー、間に合ったねえー」

「うお?」

その時、俺のすぐ後に教室の扉を開けた奴がいた。

扉の枠に寄りかかるようにして立っていたのは、楓とのほんさんだ。

よほど急いで走って来たのか、楓なんかぜえはあ言ってる……身体弱いのに、大丈夫か?

「む、昔の話で、今は・・・」
「あ、そうなのか」

そう言えば、今は平気って言ってたもんな。
うん、健康なのは良いことだもんな。
と言っか、そんなに急いでどうしたんだ？

「千冬姉様のホームルームに遅刻できる人間がいたら、見てみたいですよ・・・」

「あ、あはは・・・そりゃ確かにな」

遅刻したら、確実にお仕置きが待ってるからな。

俺が苦笑していると、その脇を通り抜けて楓が箒の所まで駆けて行った。

箒は窓の外を見ているから表情は見えないけど、楓はどこか嬉しそうだ。

「ほ、箒さん、おはよ・・・」

「・・・ああ」

「う、うん、えへへ・・・」

いや、挨拶はちゃんと返そうぜ箒。

まあ、それでもここ最近で大分改善してきたよな、無視はしなくな

つたし、一応。

仲良きことは、良いことだからな。
箒も、もっと素直になれば良いのになあ。

「あ、そうそうおりむー」

「おりむー・・・って、ああ、俺のことか」

「うん、そうだよー」

楓に置いて行かれた形ののほほんさんは、俺の横でにへらーとつとした笑みを浮かべていた。

うーむ、全身からゆるゆるオーラを出している人だな、袖丈が明らかにダボダボだし。

とは言え、俺も随分とクラスの女子に馴染んだのではなからうか。

・・・慣れって、怖いな。

「隣の2組にねー、中国の代表候補生が転校してきたんだってー」

「あ、それ知ってる知ってる!」

「うん、私も聞いたー!」

のほほんさんの話題に食い付いたのは、俺じゃ無くてクラスの女子だった。

おお、これが女子の噂力か。

そして、代表候補生と言えば・・・。

「ふふん、今さらながらに私の存在を危ぶんでの転入かしら?」

出ました、イギリス代表候補生のセシリア・オルコットさんです！
・・・でも、「危ぶむ」って何をだ？
それにしても、4月のこの時期に転入って珍しいな。

「何だ、転入生が気になるのか、一夏」
「え？ あ、ああ・・・まあ、少しは」

うお、さっきまで自分の席にいたはずの篤まで来た。
その傍には、ちよこんと楓がついてきている。

やはり篤も楓も女の子、噂話が好きと言うことだろうか。
でも何故だ、何故か少し不機嫌そうだぞ。

昨日の夜、篤が寝間着に使ってる浴衣の帯が変わってることを指摘したら凄く機嫌が悪くなったのに。

・・・いや、あれも何で機嫌が悪くなったかわからないけど。

「ふん、今のお前に女子を気にしている暇があるのか、クラス対抗戦はすぐだぞ」

「そうですね一夏さん、この私と『ブルー・ティアーズ』をキズモノにしたのですから、勝って頂かないと困りますわよ？」

「・・・キズモノって、お前な」

俺の言葉に、セシリアはふんっ、と腕を組んで鼻を鳴らす。

最初みたいに毛嫌いされてはいないみたいだけど、正直これもどうなんだろう。

最終的に「お前を倒すのはこの私だからな」とか言って俺のピンチに駆けつけてきたりするのだろうか、それはとても嫌だぞ。

ちなみにクラス代表戦は、読んで字の如く、各クラスの代表が戦うリーグマッチだ。

優勝すると、学食デザートの学年フリーパス（半年）が景品として与えられる。

だからクラスの女子達の俺への期待値は年初来最高値を連日更新中だ、何てこった。

「・・・まあ、やれるだけやってみるけど」

「やれるだけでは困りますわ！　一夏さんには勝って頂きませんと！」

「男たる者、そんな弱気でどうする一夏」

「織斑君が勝つと、皆が幸せになれるよ！」

皆して勝手なことを言っているけど、でも俺まだIS動かして間も無いんだぜ？

筈との訓練でも基本動作で躓いている段階で、とてもじゃないが「任せろ」とは言えない。

・・・我ながら情けないとも思うけど、事実だしなあ。

「でも専用機持ちはウチと4組だけだから、楽勝だよ。しかも4組の専用機持ちは・・・」

「その情報、古いよ」

その時、また別の誰かが話に混ざって来た。

クラスの女子の言葉に被せるように響いたその声は、どこかで聞いたような・・・。

Side 篠ノ之 楓

今日も箒姉さんと挨拶できた・・・とか考えていると、クラス対抗戦の話の最中に、隣のクラスの人がやってきた。
小柄な体躯、ツインテールにした長い髪、日本人とは少し違う鋭角的で艶やかな瞳。

「鈴・・・お前、鈴か!？」

「そうよ、中国代表候補生、凰 鈴音! 2組も専用機持ちがクラス代表になったの・・・だから今日は、宣戦布告よ!」

腰に手を当てて、ビシッとこちらを指差して来るファ・・・えーと、凰、さん?

どうやら一夏さんのお知り合いのようで、一夏さんはどこか戸惑った様子で頭を掻いている。

「・・・何、格好つけてんだ鈴？」

「んなつ・・・な、何てこと言うのよ、アンタ！ 普通そこは空気読むでしょ、日本人なら！」

「いや、知らんけど・・・」

あーでも、中国代表候補生のISには少し興味が。

この学園の訓練用IS、『打鉄』うちがね（日本製・純国産・初心者用）はもうデータ取っちゃったし・・・一夏さんの『白式』びやくしきは整備の時に見れるし。

オルコットさんの『ブルー・ティアーズ』は、国籍の問題で私は手を触れられない。

・・・まあ、直接手を触れなくてもデータは取れるけど。

ちなみに私の『黒叢』こくそうはまだ、誰にも見せていない。

左手に待機状態の指輪をしているし、試験の時に千冬姉様と山田先生には見せたけど。

いやあ、山田先生強かったなあ・・・まあ、良いや。

私、たぶんIS学園最弱だと思うし、なら最弱として振る舞うだけだし。

中国のIS、どんなのかな。

あそこは貧困層放置でISにお金かけてるから、結構良い機体が・・・。

「もうSHRの時間だ、さっさと自分のクラスに戻れ、邪魔だ」

「げ・・・ち、千冬さん・・・」

「織斑先生だ」

一夏さんと鈴さんの言い争いがさらにヒートアップする直前、千冬姉様が登場。

鈴さんの頭を出席簿で二度もぶって黙らせる千冬姉様、クール過ぎ・

・。・。
と言うか、「千冬さん」と呼ぶと言うことは鈴さんも千冬姉様の知り合いらしい。

千冬姉様は、いろいろと顔が広い。

束お姉ちゃんとは正反対、だからお姉ちゃんのお気に入りなのかな？
他にもいろいろ、あるのだろうけど。

「いや、驚いた・・・鈴の奴がIS操縦者になってるんてな」

「一夏、今のは誰だ？ 随分と親しそうだったが・・・どう言う関係だ？」

「そうですね、ライバルと慣れ合うのはどうかと思いますわよ？」

「え、ええっ・・・？」

篝姉さんとオルコットさん、そしてクラスの皆から集中砲火で質問の嵐。

一夏さんが困ってる・・・けど、今それをする。

「静かにしろ、バカ共！！」

ほら、千冬姉様の出席簿が火を噴いた。

・・・あれ？ 何で私まで叩かれてるんだろう・・・？

S i d e セシリア・オルコット

まったく、一夏さんには1組のクラス代表としての自覚が足りませんわ。

篠ノ之さん ああ、ややこしいので箒さんで良いですわね

とは、放課後に毎日訓練をしているようですけど。

でもISを使った訓練はしていないとか、確かに操縦者はそれなりの訓練が必要ですけど。

今の一夏さんに必要なのは、可能な限りISに触れること。

私に一撃を与えた 男とは言え 方が、簡単に負けてしま
うのも気に入りませんわね。

「待ってたわよ、一夏！」

「おお、鈴・・・でもそこ、通行の邪魔だぞ。食券が出せない」

「わ、わかってるわよ・・・」

そして昼休み、私達（一夏さん＋私＋箒さん）がお昼休みに食堂に行く、噂の転校生が何故か立っていました。

どーんと現れておきながら、一夏さんの言うことは素直に聞くと
言う態度。

アレは、狙っているのかしら・・・あ、ちなみに私が一夏さんと行動を共にしているのは、単純に一夏さんに興味があるからですの。

・・・他意は無くてよ？

まあ、私の隣に立っている篤さんはどうなのかは別でしょうけど。それにこのメンバー、イギリスの人間として見逃せませんし。

「そう言えば丸一年ぶりくらいだよな、鈴、元気だったか？」

「元気に決まってるじゃん、アンタこそたまには怪我病氣しなさいよ」

「何だよそれ・・・親父さんはどうだ、元気にしてるか？」

「え・・・あ、ああ、うん・・・元気、だと思っ」

そうこうしてる内に、えー・・・鈴さんだったかしら、その子と一夏さんが楽しそうにお喋りをしていました。

・・・おそらく、知り合いなのだと思いますけど。

でもIS初心者の一夏さんが、どうして中国の代表候補生と知り合いなのだろうか？

「一夏、そろそろどう言う知り合いなのか説明してほしいのだが」

「いや、幼馴染だよ、ただの」

「幼馴染？」

・・・幼馴染と言うなら、篤さんが知らないのはおかしいのではないかと？

それについて一夏さんが言うには、篤さんが引越した後に鈴さんが引越してきたので、擦れ違いのような形だったそうですわ。

何でも、織斑先生がIS操縦者として活躍して・・・家を空けることが多かった時期。

その時に毎日のように食事に行っていた中華料理屋の、娘さんなのとか。

だからかは知りませんが、鈴さんのトレイには中国の麺料理が乗っておりますわ。

「・・・ところでアンタ達、誰？」

「なっ・・・わ、私を知らない！？ イギリス代表候補生であるこのセシリア・オルコットを！？」

「俺も知らなかったけど・・・」

一夏さんは黙っておいてくださいまし！

一夏さんはこの学園に来て初めてISのことを知ったのですからまだしも、中国の代表候補生ともあるう者が私を知らない！？
そ、それは・・・それは、私への侮辱ですわ！

「うん、私、他の国とか興味無いし」

「な、な・・・言うておきますけど、私、貴女のような方には負けませんわ！」

「そうなんだ、でも戦ったら私が勝つよ。私、強いもん」

ま、まあぁ・・・な、何て自信過剰な！

・・・な、何ですの一夏さん、その「お前が言っただ・・・」みたいな目は。

「あ、あああ、鈴。こっちは篤・・・ほら、昔話したろ、剣道場の娘」

「ああ・・・あの。まあ、よろしく」

「・・・こちらこそ」

篤さんと視線を交わしたのも一瞬、彼女はすぐに一夏さんの方へ視線を戻しましたわ。

そして、どこか少しだけ恥ずかしそうにしながら。

「そ、そう言えばさ、アンタIS初心者なんでしょ？ 代表候補生の私が、教えてあげても良いわよ？」

な！？

「ああ、そりゃ助か「結構ですわ！」・・・ええ、またこの流れか？」

「ああ、一夏は私と放課後にISの特訓をするのだ」

「ええ、専用機持ちの私が教えて差し上げますわ！」

「「え？」」

そもそも、一夏さんもそんなに頷こうとしないでくださいまし。
今回ばかりは、私も黙っていられません・・・中国の代表候補生、
凰 鈴音。

お、覚えましたわよ・・・？

「大体、貴女は2組でしょう・・・敵の施しは受けませんわ！」

実際、1組のクラス代表のIS訓練を他のクラスの人間に任せるなんて、あり得ませんわ。

ええ、そう、あり得ませんとも！

こうなったら、是が非でも何が何でも、一夏さんに勝って頂きます！

「ふーん・・・あつそ」

理屈が通っている分、彼女も反論が難しい様子ですわね。

一夏さんには見えていないでしょうけれど、私達の間には確実に火花が散っておりますわ。

しかし「クラス対抗」と銘打っているだけに、この理屈は崩せないでしょう？

「じゃ、それが終わったら部屋に行くから。空けといてよね、一夏

」

「は？・・・あ、ああ」

さつさと自分の分の昼食を食べ終わると、鈴さんは食堂から素早く出て行きました・・・って。
だから一夏さん、そう簡単に頷かないでくださいまし！

Side 篠ノ之 篇

一夏の奴め、この上まだ女子が増えるとは・・・軟弱だ！
とは言った物の、心は焦る。
何故なら私には専用機が無い、対して向こうは専用機持ち。
しかも何故かセシリアまで混ざって・・・2機になってしまった。

ISの訓練と言う名目^{もくろみ}で一夏の放課後の相手を務める以上、どうしてもISがいる。
でも、私には専用機が無い。
結局は、そこに行きついてしまうわけで。
これは・・・とても大きい、思ったよりもずっと。

「どうしたものか・・・」

と言いつつ私の足は、IS学園の訓練機の貸出申請を行うための総合受付に向かっている。
いろいろ考えたが、やはりこれしか手が無い。
正直、今まではここに来るのが嫌だった。

別に私で無くても、きちんと申請さえすればIS訓練機の貸出は誰でもできる。

もちろん、順番とかはあるが・・・運が良ければ、その場で借りることも可能だ。

一夏の訓練のためと思ってはいても、やはり、その・・・。

・・・私は、「篠ノ乃 束」の妹だから。

でも、せめて訓練機が無いと一夏が・・・。

「あれ？ 篝姉さん」

「・・・あ」

総合受付の前でどうしようかと思っていると、反対側の通路から自分と同じ顔が歩いて来るのが見えた。

同じ顔・・・双子の妹、楓。

再会してからもう1週間以上経つが、どうしても1歩退いてしまう。

何を話せば良いのか、どう接すれば良いのか、わからない。

いや、普通に姉妹として接すれば良いと言っるのは、頭ではわかっているのだが。

・・・楓は、たばね姉さんよりはまだ、理解できるから。

「わ、わー・・・篝姉さんだ、こんな所でどうしたの？」

「う、う・・・その、訓練機を・・・」

「あ、訓練機の貸出申請？ 私もだよー」

ほら、と見せて来るのは申請用の紙の束・・・実はあの束を手に入るだけでも時間がかかる。

それだけ、ISの機体は厳重に管理されているのだ。

官僚主義とまでは言わないが、面倒な手続きが必要なのは確かだ。

「私はお友達のお手伝いなんだけど、箒姉さんは？」

「いや・・・わ、私は、その」

「あ、わかった、一夏さんでしょ？ 箒姉さん、昔から一夏さんのことがす」

反射的に、殴った。

「・・・い、痛いよ、姉さん・・・」

「お、お前が変なことを言うからだろっが!!」

「え、ええー・・・」

両手が書類で埋まっているため、私に叩かれた頭を撫でることもできない楓。

正直、悪かったと思う。

一夏に対してもそうだが、すぐに手が出るのは私の悪い癖で、それでいて素直に謝罪もできない物だから・・・。

・・・いや、でも今のは楓も悪いだろう。

それにアレだ、一夏のことが・・・その、どうとか言う話は子供の頃に「内緒だぞ」と言って話したことであって、こ、こんな往来でだな。

私がそんなことを考えていると、楓が嬉しそうににへら、と笑った。

「・・・な、何だ」

「うっん、篝姉さんとお話できて嬉しいなって」

言われて、はたと気付く。

そう言えば・・・そう、だな。

「えっと、東お姉ちゃんもね、その・・・篝姉さんの機た」
「その話はするな」

先程までの柔らかな気持ち、その「名前」を耳にした途端に冷める。

楓も空気が変わったことを感じたのか、少し表情が曇る。

ここ数日でわかったが、楓は姉たはねさんのことが好きらしい。

失踪している間、楓だけは姉たはねさんの傍にいたのだから・・・そう言うこともあるだろう。

だが、私は違う。

重苦しい沈黙が続く中で楓はおずおずと、しかし意外と力強く、手に持っていた書類の束を私に押し付けて来た。

訓練機の貸出申請用紙、しかも優先度1位・・・って、これは？

「・・・おい！」

私の声に返事をせずに、楓はそのまま背を向けて駆け出して行った。私は手の中に残った申請用紙の束に視線を落として・・・溜息を吐いた。

・・・友達の手伝いだったんじゃないのか、楓。

S i d e 織斑 一夏

き、今日はキツかったな・・・。

夜8時、ようやく寮の部屋に帰れた俺は溜息を吐いた。

まあ、つまりは箒と一緒に部屋なわけだが・・・個室、まだかな。

「ふん、鍛えていないからそうなるのだ」

ベッドの上でぐったりとしている俺を見下しながら、箒が鼻を鳴らしていた。

何とも優しい幼馴染である、まる。

今日の訓練は、剣道じゃ無くて本格的なIS戦闘だった。

どう言うわけか、箒が訓練機を借りて来てくれて・・・初めてかもしれない本格的な訓練だった。

そして、セシリア・・・何だか知らないけど、鈴に挑発されたのが頭に來たらしい。

それはそれは、もうビシバシと俺を苛め・・・鍛えてくれた。

と言うか、途中から箒と2人がかりで俺をボコボコにしていた。

身体で覚えるって、限度があるだろ・・・3時間休憩無し、アイツらは俺をどうしたいんだ。

まあ、とにかくシャワーでも浴びて・・・と思った矢先。

「と言うわけで、部屋かわって！」

台風・・・じゃない、鈴が部屋に來た。

しかも来ていきなり、箒に部屋を変わるよう要求。

要求であってお願いじゃない所が、鈴の鈴たる所以だ。

俺と出会ったばかりの頃は、俺ともよく喧嘩してたよなあ・・・って、懐かしんでる場合じゃ無く。

「い、いきなり何だ！？ 大体、なぜ私がそんなことをしなければならぬ！？」

「いや、男と一緒になんて嫌でしょ？ その点私は平気だから、かわってあげようかなって」

「い、いらん！」

前半は頷いても良いが、後半の意味がわからない。

ちなみに何故に鈴に俺と箒の同居状態がバレたかと言うと、訓練の

終わりに鈴が第3アリーナのピットに来たんだよ。

スपोर्टドリンクとか差し入れてくれて、嬉しかったわけだが・・・
箒とシャワーの順番について話してたのを聞かれて、それでバレた。

・・・あれ？ この流れでどうして鈴と箒が部屋をかわる話になるんだ？

それ以前に鈴の荷物、異常に少ないな。

ポストンバッグ一つで移動できるって、フットワーク軽過ぎだろ。

「ええい、くどい！ さっさと出てい・・・」

「ねー、一夏。一夏も私と一緒にの方が良いよね？」

「・・・無視、するな！」

「げ、馬鹿ほ・・・」

鈴の行動に堪忍袋の緒が切れた箒が、ベッド脇から竹刀を取り出した。

あ、馬鹿、防具も何も身に着けて無い相手にお前。

冗談抜きで危ない、そう思った次の瞬間、鈴の右手が光った。

Side 凰 鈴音

操縦者を守るISの「絶対防御」・・・これ、実は待機状態でも働いてるのよね。

。 IS 開発者の篠ノ乃博士は言ったわ、「IS は IS でしか倒せない」
そしてその操縦者も・・・「絶対防御」を抜ける IS（及び対 IS
兵器）でなければ、殺せない。

もちろん、それも絶対じゃ無い。

操縦者は自分で、自分の危機を乗り越えられるようになっていなければならぬ。

最低限、IS コアだけは死んでも守らないといけないから。

「鈴、大丈夫か!？」

「大丈夫に決まってんじゃない・・・私、代表候補生だもん」

「な・・・」

私の右手には、実体化した IS の装甲が展開されてる。

その右手の装甲に、箒とか言う子が振り下ろした竹刀がぶつかってる。

と言うか、今の・・・私じゃなかったら、本気で危ないよ？

IS は操縦者の意思で部分的に展開できるの・・・候補生なら、0.5 秒以下だね。

IS を展開するのは生身の人間だもの、反射よりも速く展開はできない。

だから代表候補生は全員、無意識に反応して展開できるのが、当然。できなければ、死ぬもの。

「絶対防御」は生命が危ないって時にしか発動しないし・・・片腕

くらいとかだと、守ってくれない。

「・・・ま、それはそれとして、一夏。昼間に聞きそびれたんだけどさ」

「あ、ああ？」

「その、さ・・・約束、ちゃんと覚えてるよね？」

候補生から女の子な気持ちにチェンジ、このへんの切り替えって重要よね。

そもそも、私が日本に来た理由の1つは一夏との「約束」だもの。本人が女の子に囲まれてるのを見て、ちょっとイラッとして後回しにしちゃったけどさ。

「約束、約束・・・ああ、もしかしてアレか！」

少し考え込んでいた一夏が、ぼんっ、と思い出したように手を打った。

お、覚えててくれた！

だよねだよね、女の子の一世一代の約束だもんね、覚えてるのが当たり前よ！

1年とちよつとしか経って無いし・・・ね。

私が、大きくなったら毎日酢豚を・・・。

「奢ってくれるって話だったよな？」

作ってあ・・・へ？

私がぼかん、としていると（箒とか言う子も似たような顔してた、どうでも良いけど）、一夏はうんうんと頷きながら。

「うん、確か鈴が料理が上手になったら、酢豚を毎日ご馳走してくれるっー・・・」

「・・・っ！」

それ以上は、聞きたくなかった。

違う、と叫ぶ代わりに、私は思いつきり一夏の頬を張った。乾いた音が、部屋に響く。

「へ・・・？」

「さ・・・最っ低！ 女の子との約束をちゃんと覚えて無いなんて、男の風上にも置けない奴！ 犬に噛まれて・・・死ぬ！！」

顔を見てらんなくて、箒って子の脇を擦り抜けて部屋から飛び出す。箒って子が何か私に声をかけようとしたみたいだけど・・・知らない。

一夏のバカ、馬に蹴られて死ねば良いのよ・・・！！

S i d e 篠ノ之 楓

「ほらほら楓ちゃん、急いで」

「は、はいっ」

「もう、先生に無理言って10時まで整備室使って良いってことになつてたのに」

「ご、ごめんなさい！」

本音さんに手を引かれるようにしてやって来たのは、IS学園の第2整備室。

整備室と言うか、もうドックとか格納庫とか、そんな風に呼んだ方が良いような場所。

量産型から専用機まで、2年生以上の整備科の人達がISの研究・開発を行っている場所。

束お姉ちゃんの秘密ラボほどじゃないけど、たぶん、世界最先端の技術の宝庫。

この中では、国籍も何も関係無い。

ただ、ISの整備の技術だけが物を言う世界。

「こ・・・こんな時間でも、人がたくさんいるね」

「対抗戦近いから」

「ああ、それで・・・」

もう夜8時を過ぎていると言うのに、第2整備室にはたくさんの方がいる。

楽しそうにやっている所もあれば、怒鳴り合いながらISを弄っている場所もある。

あ、アレって専用機・・・？　と言うかあの発電機、最新型・・・？

「楓ちゃん、こっちだよ」

「は、はいっ」

私と本音さんの手にあるのは、訓練機『打鉄』うちがねの貸出申請許可証明書。

さっきまでかかって・・・本音さんに「遅いよー」って凄く怒られた。

か、格好つけて簿姉さんに渡しちゃったから、書類集めからやらなといけなくて・・・。

うん、素直にごめんなさい。

「良いよ良いよ・・・でも、今回きりでお願いだよ？」

「う、うん」

にへらへって笑う本音さん、可愛い。

でも、うん・・・二度としない、まさか書類の再発行があんなに面倒だなんて。

迷惑もかけちゃうし、うん、学んだ。

学校って、いろいろ大変なんだね・・・。

「え、えつと、それで・・・どこまで？」

「ちよちよーっと向こう、かんちゃんに紹介するから」

「か、かんちゃんさん・・・」

「うんっ、もう、ちようちようちよう可愛い子なんだよ」

以前から名前は聞いてる、えーと・・・かんちゃんさん。

本音さんに手を引かれてやってきたのは、第2整備室の奥。

そこには『打鉄^{うちかね}』にどこか雰囲気^{ふんいき}が似た、見るからに未完成のISがあつた。

「かんちゃーん、来たよ」

「・・・本当に・・・来た・・・の？」

「うん、私はかんちゃんのメイドさんだから」

その機体を包んでいるのは、無数のディスプレイ。

そしてその中から、1人の女の子が降りて来る。

どうやらその子が、この機体の操縦者^{マスター}にして本音さんの「かんちゃん」らしかった。

肩を過ぎたあたりまで伸びた青みがかった綺麗な髪、赤い瞳をかすかに隠す小さな眼鏡。

小柄な身体を包むのはIS学園の制服、普通のそれよりも肌の露出は控え目。

それでいて・・・私は、剥き出しの細い指に目を奪われた。

青白いディスプレイの光の海の中に浮かぶその子は、まるで魔法使

いみたいで・・・。
とても、「綺麗」だった。

「楓ちゃん、紹介するね、この子があ、かんちゃんっ！」

「その呼び方・・・と言うか、誰・・・？」

「かんちゃん・・・更識^{さらしき}簪^{かんざし}ちゃんだよー！」

・・・更識、簪。

この日、私は初めて・・・。

彼女と、目を合わせた。

第4話：「その幼馴染、2番目」（後書き）

篠ノ之 楓：

どうもー、楓です。

そろそろこの出だしも変わるかもしれないとつばらの噂、まあ良いですけど。

今日は、私の通う学校についてご説明！。

まあ、ある程度は本編でもすでに説明されてますけど・・・。

IS学園

国際条約に基づいて日本に設置、IS操縦者育成用の特殊国立高等学校。操縦者以外にもメカニックとかを育成してます。学園はどの国家・組織にも属しません。国際規約上は外部の国家・組織が学園関係者に干渉してはならないことになっています。まあ、建前って大事ですよ。

各種アリーナ・訓練施設に学生寮、食堂、お風呂・・・どれもこれも超一流、運営資金は日本国が全部持つてます、今も昔も国際社会から力もらってます。10人ちよつとぐらい専用機持ちがいて、その倍くらいの代表候補生が所属しています。まあ、ちよつとした国際社会の縮図みたいな物。一般教養もあるので、れっきとした学校です。

篠ノ之 楓：

では、今回はここまでですね！。

うーん、そろそろ説明することがなくなるなあ・・・。

篠ノ之 束：

じゃあじゃあ、私達姉妹の幼少時のことでも・・・あの頃はスタイルに差も無かったんだけどねえ。

篠ノ之 楓：

お姉ちゃん！！

第5話：「クラス対抗戦」（前書き）

ISの二次創作を描く上で気になること。

・時系列（途中、明らかに矛盾が）

・IS機体分配数（ドイツ10機、少なくない・・・？）

ここはオリジナルで考えた方が良さそうですね。

例えば「ドイツ10機」は実戦配備数で、研究・訓練用の分が後10〜20機くらいあるとか、そんな感じでは、どうぞー。

第5話：「クラス対抗戦」

第5話：「クラス対抗戦」

S i d e 織斑 一夏

あれから結局、鈴とは話せないまま、クラス対抗戦の当日を迎えることになった。

俺のISの操縦技術自体は、箒とセシリアのおかげで「まあ、形になってきたかな」程度にはなった。

授業と放課後の訓練、夜を徹しての参考書読み・・・まあ、やれることはやった、が。

「来たわね一夏、ぶっ潰してやるわ・・・！」

超満員の第2アリーナ、第1試合は1組代表と2組代表。

つまりは俺と鈴だ、アリーナの中央まで飛んだ俺の目の前には鈴がいる。

鈴は赤みがかった黒の機体、中国第3世代型IS『シエンロン甲龍』を装着している。

全体的に無骨なデザインだけど、両肩の横に浮いている非固定の棘付き装甲が特徴的だ。

・・・やたらに凶悪と言う意味で。

ちなみに、鈴はかなり激怒している雰囲気だった。

と言つのも、実は一度だけ鈴と話せたんだが・・・俺が約束をちゃんと覚えていなかった（俺的には、完璧に覚えていたつもりなのに）ことについて、謝る謝らないの口喧嘩っぽくなってだな。
その・・・非常に、言つてはならないことを口走ってしまったわけ
で。

「私のスタイルを馬鹿にしたこと、後悔させてやるわ・・・!!」

「いや、その件に関しては本当に悪かったと思つてる」

「その件『は』？ その件『も』でしょ!？」

スタイル・・・まあ、その、鈴は同年代の女子に比べて小柄だからその、胸部と言つか何と言つか、とにかくそれだ。
それについては、本当に俺が悪かったと思つてる。

「今すぐ謝るなら、痛めつけるレベルを下げてあげるけど・・・？」

「雀の涙程度だろ・・・それに真剣勝負なんだ、全力で来いよ」

「わかった、殺す」

何か似たような会話をセシリアともしたけど、こつ言つ物なのだろうか。

いや、剣道のようにもう少し紳士的（淑女的？）でも良いはずだ。
何もIS操縦者全員が「殺してやる」みたいな目対戦相手を見たりはしないはずだ、そう信じたい。

「言っておくけど、ISの「絶対防御」も完璧じゃないのよ。シー

ルドエネルギーを突破する攻撃力があれば、相手に直接ダメージを与えられるんだから」

「・・・」

「ああ、そうそう・・・その刀、『雪片』^{ゆきひら}だっけ？ 記録映像でア^{ビデオ}ンタの試合見たわよ・・・あの金髪の子、強かったわよね」

金髪・・・セシリアか。

「言っておくけど、あの金髪の子がアンタに一太刀喰らったのはあの子が油断してたから。それとその刀の特性を知らなかったからよ・・・そのへん、勘違いしてんじゃ無いでしょーね」

「・・・わかってるよ、それくらい」

「あ、そう・・・なら」

実際、ここ最近の訓練で嫌という程わかった。

何しろ、あの後3回模擬戦やって、3回とも負けたしな、しかもボコ負け。

俺が代表候補生並だなんて・・・思っちゃいない。

俺がそう考えた時、試合開始の鐘が鳴った。

「うらあっ!!」

女の子らしからぬ気合いの声、同時に鈴の手には刃に持ち手のついた巨大な青竜刀。

しかも両手、鈴は縦から横から斜めから、俺にそれを叩きつけて来

る。

右から左から、上から下から・・・刃と言うには生温い豪の一撃が、俺を襲う。

エネルギーと金属が打ち合う音が響き、俺のISは鈴の猛攻に耐えかねてジリジリと下がる。

圧倒的な攻撃力を誇る『ゆきひら・にがた雪片式型』を、攻撃に使えない。

セシリアのような正確な攻撃じゃない、けど筈のように洗練された剣でも無い。

ただ敵を叩き潰し、ねじ伏せる・・・そんな、攻撃だった。

「・・・っ！」

ヂッ・・・裁き切れなかった一撃が、ISの胸の装甲を削る。俺はたまらず、その勢いを逆用して下がろうと・・・。

「甘いつ!!!」

鈴が叫ぶと同時に、肩のアーマーがスライドして開いた。肩の横に浮遊しているそれは、中心が光ったと思うと・・・。

見えない「何か」が、俺を殴り飛ばした。

衝撃、『白式』が警報を鳴らす。
その衝撃の強さに、俺は成す術も無く空中から地表に叩き付けられた。

Side 篠ノ之 楓

第2アリーナの、一夏さんサイドのピット・ルーム。
そこには、私と箒姉さん、オルコットさん・・・そして、千冬姉様と山田先生がいる。
私達の前には、アリーナで繰り広げられている一夏さんの試合を映しだしているディスプレイ。

一夏さんが凰さんの猛攻に耐えかねて距離を取ろうとした瞬間、「何か」に吹き飛ばされた。
一夏さんがアリーナの地表部分に小さなクレーターを作った瞬間、箒姉さんが息を飲むのが聞こえた。

「一夏・・・！」

その呟きが無意識の物であることは、わかる。
何しろ、箒姉さんの目はディスプレイから動かない。
ディスプレイの中の一夏さんが立ち上がり、再び空に上がって・・・
ようやく、息を吐いた。

もしかしたら、息を止めていたのかもしれない。

「何だ、今は・・・映像でも見えなかったぞ」

「・・・『衝撃砲』、ですわね」

「『衝撃砲』・・・」

オルコットさんの返答を口の中で繰り返した篝姉さんは、千冬姉様の背中を見つめた後、私を見た。

その視線は何かを求めるような、そんな感情を窺わせる。

・・・あ、私、説明役？

正直、虚をつかれた感があるけど・・・篝姉さんの役に立てるなら。私は目の前の自前の空間投影型ディスプレイを止めて、新しいディスプレイを篝姉さんに見えるように展開、その下に浮かぶキーボードを叩く。

「そんな高価なディスプレイ、どこで・・・」

オルコットさんが、半ば感心、半ば呆れたように私のディスプレイを見る。

東お姉ちゃんが作ってくれました、まる。

お値段は、ちよつとわかんない。

いくらくらいするんだろ・・・興味無いから良いや。

「えー、『衝撃砲』とは、空間自体に圧力をかけ砲身を作り衝撃を砲弾として打ち出す装備。画像から、肩と腕に装備されている模様。砲弾だけではなく砲身すら目に見えないのが特徴で、砲弾の種類にはいくつかバリエーションあり。今のは・・・貫通型の方」

ディスプレイに浮かぶのは、事前に凰さんが学園側に提出したスペックデータ。

もちろん表向きの物なので数値などは控え目に書いてあるだろうし、隠し玉があるかもしれない。

オルコットさんの『ブルー・ティアーズ』にした所で、普段の試合では3割も力を出していないと思う。

何しろISは国家機密・軍事機密が満載なので・・・基本的に外部に公開がされない。

とは言え「情報公開」がどうか「知る権利」がどうか言う人が多いから、建前としてそれなりのデータが公開されてるわけで。

今、篝姉さんが見ているのは、そう言うデータ。

「な、なるほど・・・ところで、楓はさっきから何をしているんだ・・・？」

「今日は質問がたくさんで嬉しい、篝姉さん」

「・・・」

あ・・・黙っちゃった。

少ししょんぼりとしながら、私は作業を再開する。

空間投影型キーボードを4枚使って、中国のISのデータを集める。

・・・束お姉ちゃんのために。
一瞬、千冬姉様がこちらを見た気がするけど・・・すぐに一夏さんの試合に意識を戻す。
画面の中では、一夏さんが刀を振り上げて敵に迫っている所だった。
・・・。

Side 鳳 鈴音

思ったよりも、よく動くじゃない。
両肩と両腕の『衝撃砲』 中国第3世代装備『龍砲』 の
見えない砲弾を、アリーナの空間を限界まで動かすことで紙一重で
かわし続ける一夏を見ながら、私はそう思う。

この『龍砲』は砲身も砲弾も見えない、だから普通は回避なんてできない。
まあ、私が奇襲に使わずに直線的な撃ち方をしてるってのもあるんだけど。

ついでに言えば砲身斜角は、上下左右自由自在。
たぶん、ISのハイパーセンサーで空間の歪み値と大気の流れを探らせて避けてるんじゃないかな。

「やるじゃん、誰に習ったの？ その大規模高速回避行動」

「・・・できないと、翌日の授業に出られなかったからな！」
「ふーん」

ドンツ・・・会話の最中にも、衝撃砲を撃つ。

一夏は私から大きく距離を開けることで、それを回避する。
もちろん私は連射するから、一夏は常に私から離れて高速での回避行動を続ける。

本当に、良くやると思う。

IS稼働時間の記録を見たけど、私の3分の1以下。
と言うか、まだ1カ月くらいよね、ISを動かせるようになったの
って。

それでこれだけ動けるんだから、もしかしたら才能があるのかもね。
・・・でも。

「はああっ！」
「ぐっ・・・！」

衝撃砲で回避先を誘導、そこへ一気に加速して踏み込む。

この『甲龍^{シェンロン}』はパワータイプ、それでも鈍重ってわけじゃない。

接近した後、両腕の青竜刀を一夏に叩きつける。

一夏はそれを刀で受け止める、一瞬だけの拮抗。

「・・・あはっ」
「・・・！」

『龍砲』、発射

私が動きを止めていたから、一夏は回避行動が取れない。

だから、私の衝撃砲をモロに受けて吹き飛ぶ・・・今ので100くらいいは削れたかしら？

一夏、アンタ、きっとISの才能あるよ。

でも・・・まだ、私には勝てない。

砲撃、加速、接近、斬撃、砲撃。

これを3度繰り返し返す、すると段々と勝負とは呼べないような状況になっっていく。

「・・・強いな、鈴」

「当然・・・だって私は」

「代表候補生？」

「そゆこと」

4度目の砲撃　でも、その後の一夏の反応が違った。

吹き飛ばされると体勢を整えずに、そのまま私から離れて・・・連続で加速を始めた。

スペック上の機動力は、向こうの機体の方が上。

一夏は、アリーナ外周スレスレの所から旋回を始める。

私はそれを緩やかに追いながら、アリーナの内側でクルクル回る格好になる。

言っておくけど、IS操縦者は目を回して「ぐるぐる」なんてこ
とにはならないから。

一夏の描く円が徐々に小さく つまり、段々と近付いて来る
なっていく。

「・・・は」

何か仕掛ける？ 良いわよ、一夏。

・・・迎え撃って、あげるから！

両手の青竜刀の柄を連結、一つにして頭の上で回転させる。

一夏の姿が、一瞬だけ消える。

それは、私が青竜刀を連結させた瞬間を狙った急加速。

つまり、『瞬間加速』！
イグニッション・ブースト

一瞬でトップスピードに至り、奇襲する戦法・・・だけど『シエンロン甲龍』
が教えてくれる。

・・・後ろお！

「うおおおおっ！！」

「・・・はあああっ！！」

連結青竜刀『双天牙月』を振り下ろそうと背後を見ると、そこに一
夏がいた。

一瞬、視線が交差した。

両手で大太刀『雪片^{ゆきひら}』を持って、下段から……。

その時、アリーナ全体に衝撃が走った。

私と一夏が衝突したわけじゃない、私達の横を何かが通り過ぎて、地面にぶつかったのよ。

つまり、何かが空から落ちて来た。

な、何……アリーナの遮断シールドはどうなってんのよ……!?!?

S i d e 一夏

『織斑、凰！ 試合は中止だ……退避しろ!!』

通信機越しに響く千冬姉の声、だけど俺は何が起こったのか把握できていなかった。

アリーナの中央には、鈴の衝撃砲どころじゃない威力の何か突き刺さったんだ。

俺が作ったやつは何倍ものでかさがあるクレーター、その中央には。

<警告、アリーナ中央に熱源。所属不明のIS、標的認証されています>

『白式』^{びやくしき}の声、同時にアリーナから爆煙が消える。

観客席から生徒が悲鳴を上げて避難するのが見える、だけどそれよりも……。

異形が、いた。

深い灰色の機体、手が地面につくほどに異常に長い。

その両手には大砲のようなスリットが入っていて、しかも首と肩が一体化している。

そして2メートルを超える巨体は『全身装甲』^{フルアーマー}、普通はシールドエネルギーがあるから全身を覆う必要は無い。

それをあえてやっている所が、余計に異形さを際立たせていた。

「一夏！」

「おわっ!？」

鈴の声を認識した瞬間、『白式』^{びやくしき}のすぐ側を赤い閃光が走った。

目の前の侵入者が放った、極太のビームだった。

それはセシリアよりも威力がある……何しろISバトルでビクともしないアリーナの遮断シールドをぶち抜く程の威力があるからだ。

「一夏、試合は中止よ……すぐにピットに戻って！」

「り、鈴……お前は!？」

「先生達が来るまで、時間を稼ぐわよ・・・その間に！」

じゃきんつ、とカッコ良く俺を背に青竜刀を構えながら言う鈴。それは本当にカッコ良いと思うが・・・俺は男だ。女を置いて逃げるとか、無理だろ！

「馬鹿！ アンタの方が弱いんだから、仕方無いでしょ！？」

したら、思いつきり遠慮無く言われた。

いや、確かにさっきの試合では俺が押されまくってたわけだけども。

「私だって、最後まで戦り合う気は無いわよ・・・大体こんな事態、先生達がすぐに」

『織斑君？ 鳳さん？ ちょ、逃げてくださいよ！？ 今すぐ先生達が制圧に行きます！！』

山田先生の声、制圧とは穏やかじゃないな。だけど、先生。

「・・・ぎっ！？」

「コイツ・・・！」

敵の巨体ISが、見た目よりも俊敏な動きで飛翔、こっちに突っ込

んできた。

一瞬だけ組み合った鈴が、衝撃の強さに弾き飛ばされる。
おいおい……. っただけパワーあるんだよコイツ!?

かく言う俺も『雪片』^{ゆきひら}で敵ISの拳を受け止め……. きれない!?
ガクンッ、と視界が揺れて吹っ飛ばされる。

敵ISが両手を振り上げると、全身の銃口からビームの雨を振らせ
てきた。

ごめん、千冬姉、山田先生……. 逃がして、貰えそうにない!

S i d e

織斑 千冬

「もしもし? 織斑君、凰さん? 聞こえてますか!?’」

ISのプライベート・チャネルを開いての緊急通信……. 実は声を
出す必要は無いのだが、山田先生はそれを失念する程に焦っている
ようだ。

無理も無い、所属不明のISが乱入して来たのだから。

一旦、冷静になる必要があるだろう。

そこでコーヒーでも淹れようとしたわけだが、何故か「塩」と書か
れた容器が。

……. 何故、こんな所に塩が?

「お、織斑先生、どうでしょう・・・」

「・・・やることは決まってる。中に突入してガキ共を助ける、それだけだ」

だが、それだけのことが非常に難しい。

アリーナの遮断シールドが戦争仕様^{レベル・フォー}に設定されている上、会場に通じる全ての扉がロックされている。

シールド強度が上がったために、観客席の生徒の安全は保障されるが・・・中の2人は別だ。

「あのISの仕業・・・ですか？」

「おそらく・・・政府に支援要請はしたが、間に合うまい。シールドの解除は他の先生と3年の精鋭に任せているが、何分かかるかわからん」

「そんな・・・」

このIS学園には、訓練機を含めて30機弱のISが配備されている。

教員用の専用機も存在するし、中にさえ入れれば事態を収拾できるだろう。

問題は、いつ入れるかだが・・・。

・・・私が、出るべきか・・・？

いや、だが・・・IS学園のセキュリティを突破できる程の相手が、

何故アリーナに？

狙いは『白式』^{びやくしき}か『甲龍』^{シェンロン}か・・・それとも、操縦者か、コアか。

「・・・織斑先生、私も出るべきでしょうか？」

「いや、必要ない」

「そうですの、承知しましたわ」

オルコットは形式だけ助力を申し出て来たが、私はそれを断る。

イギリス代表候補生であるオルコットに万が一のことがあつては困るし、連携訓練時間の不足やビットの運用方法が確立していないと言う理由もあるが・・・。

オルコット自身もそこまで強い意思表示をしたわけでは無いから、特に問題は無い。

「織斑先生、教員の皆さんのアリーナ内外への配置、完了です。でも中に入れないので・・・」

「シールドクラックの時間次第か・・・」

親指の爪を軽く噛みながら、他の対処法が無いか考える。
シールドが破れた次の瞬間には、制圧できる。

だがそれまで、一夏と凰が持ちこたえられる確証は無い。

「あ、あら？ 篠ノ之さん達はどこに行ったのかしら・・・？」
「・・・？」

オルコットの声に振り向けば、確かに篠ノ之姉妹の姿が見えない。
・・・まさか、あの馬鹿共・・・！

「お、織斑先生！ 見てください！」

「・・・どうしました？」

「さ、さっきまでロックされてた会場へ続く扉の一部が、開いて・
・あ、でもまたすぐにロックされてるんですけど
「何・・・？」

山田先生の手元のディスプレイを覗けば、そこには第2アリーナの
地図が。

このピットから・・・これは、中継室までの道か？
通路の一部のロックが一時的に開き、ほぼ同時に再ロックされてい
る。

それも3分ほどの間隔を開けて、2回ずつ。

・・・これは。

ギリッ・・・誰にも気付かれないように、奥歯を噛みしめた。

Side 凰 鈴音

「ぜああああっ！ー！」

裂帛の気合い、だけど一夏の斬撃は当たらない。

舌打ちしながら、一夏が敵ISから離脱する・・・私がそれを衝撃砲で援護。

敵ISが一夏を追撃する構えを見せたら、今度は私が突っ込む。

ギンッ！

私の2本の青竜刀と敵ISの両腕が交錯する、火花を飛び散らせながら何度も斬り合う。

普通ならあり得ないくらいの運動性能・・・全身に推進機^{スラスタ}つけてるって、どんな変態よ。

しかもこっちの攻撃捌いた後が無茶苦茶、だって腕をブンブン振りまわして迫ってくるのよ？

「ああ、もう！面倒くさいわねコイツッ！！」

叫んで、衝撃砲で砲撃・・・けど、敵ISの腕は見えないはずの砲弾を普通に叩き落とす。

もう7回目、コイツ、いったい何なの？

どこの国がこんな意味不明なISを、と言うか乗ってる奴って正気なわけ？

「・・・なあ、鈴」

「何よ」

「アイツ、変じゃ無いか？」

「そうね、変ね」

「そうじゃなくて・・・何と言うか、機械じみてるって言うかさ」

ISは機械よ、言っておくけど。

まあ、7回も同じ防御、反撃を繰り返してるアイツは、確かに機械じみてるけ・・・。

「・・・アイツ、本当に人が乗ってるのか？」

「・・・無人機、ってこと？　あり得ないわ、ISは人が乗らなきゃ動かない」

「剣道やってる俺だからわかるんだけど・・・あんな緩急や乱れの無い動き、人間にできるのか？」

・・・無人機、あり得ない。

でも確かに、人間が乗ってるには不自然よね。

今も、私達の会話を聞いているみたいな・・・。

「鈴、残りエネルギーは？」

「180」

「俺は60、まともな攻撃は・・・たぶん、あと一回しかできない」

一夏の太刀『雪片^{ゆきひら}』は、シールドエネルギーを攻撃力に変換して使う武器。

昔、千冬さんが使っていた武器。

でも今は・・・確かに、使えるかもしれない。

私の攻撃はアイツのシールドを抜けない、『雪片』ならそれができるかもしれない。

仮に無人機だとすれば、全力で攻撃をしてもためらいは無いってわけね。

・・・まあ、この状況ならアレが有人で操縦者を殺しても、罪にはならないと思うけど。

「・・・でも、攻撃が当たらないじゃん、アンタ」

「次は当てる」

「言いきったわね・・・良いわ、援護してあげるから突っ込みなさいな」

「おう」

とは言え・・・素人の一夏が当てられる確率は、一桁あれば良い方よね。

さて、どうやって当てさせるか。

代表候補生の、腕の見せ所よね・・・面白いじゃない。

そして、私と一夏が次の行動に移ろうとした時。。

『一夏あつー!!』

心臓が、止まるかと思った。

アリーナには、学園全体に試合の映像を流すための中継室って場所があるの。

アリーナ外周南側の、少しせり上がった場所にあって・・・アリーナのスピーカーを通して、声が。

『男なら・・・男なら、そのくらいの敵に勝てなくて何とする!!』

「な・・・箒!？」

「ばっ・・・!!」

馬鹿じゃないの!?

そう言いたかった、けどそんな暇は無い。

目の前の無人機（仮）が、箒って子に興味を持ったのか・・・腕、つまり砲塔を向ける。

そこに光が集まって放たれるまで、数秒も無い。

「箒 っ!!」

一夏の声、突撃する。

けど、間に合わない。

無人機の砲撃が、無防備な中継室を

直撃した。

いてもたってもいられない、と言うのはこういう心境のことを言うのだろう。

気が付いた時、私はピットを飛び出していた。

アリーナへ続く通路は閉鎖されていると聞いたが、それでも……。

「ちょちよっ…… 篠姉さん、もしかしてもしかするけど！ 冷静じゃ無い感じ!？」

「…… 何でついて来る!」

「いやいや、むしろ1人で行かないで……!」

どう言うわけか、楓までついて来ていた。

ピットから観客席へ通じる道は、避難する生徒で溢れていた。

く…… これでは、一夏の所に行けないでは無いか！

「ね、姉さんってば…… どっちにしろ遮断シールドが」

「わ、わかっている！ だがじつとしていられないんだ!」

息を切らせて膝に手をつけている楓にそう言うと、ふと気付く。

コイツは身体が弱かったはずだが、こんなに走って大丈夫なのだろうか。

まあ、授業のランニングなどは普通について来ていたが（その代わり、速くも無い）。

…… 何だかバツが悪くなつて、楓から顔を背ける。

「とにかく、お前は戻れ。良いな」

「あ、ちょ……篝姉さん！」

楓をその場に残して、避難する生徒達の間を掻い潜りながら駆け出す。

観客席やピットがダメなら、アリーナに繋がる設備は……試合の中継室しか無い。

私は苦勞して避難する生徒の中を潜り抜けながら、通路の反対側の廊下へと進む。

少し進むと、鉄製の電子扉があった……当たり前だが。関係者以外が入れないようになってるのは、不思議なことでは無い。

やはりここも、入れないのだろうか……と、思っただけで扉の前に立つ。

「……っ」

シュツ……と音を立てて、扉が開いた。

扉の向こうには、無人の通路が続いている。

どうやら、すでに避難が済んでいるらしかった。

なのにどうして、ここだけ……？

……考えていても仕方が無い、進もう。

周囲を見渡して、誰にも気付かれていないことを確認した後・・・中に入った。

後ろで、電子扉が閉じる音が聞こえる。

その後、いくつか扉があったが・・・全部、勝手に開いた。まるで、誘われているような気さえた。

「一夏・・・っ」

そして、到着した。

中継室、誰もいないが機材の電源は生きている。

私は実況用のマイクを手に取ると、アリーナの全体スピーカーに繋げる。

アリーナの中央では、一夏とあの中国の代表候補生が、得体の知れない侵入者と戦っているのが見える。

ぎゅっ・・・無意識に、マイクを握り締める手に力がこもった。

「い・・・一夏あつ!!」

叫ぶと、アリーナのスピーカーを通じて私の声が響く。

観客席から避難している途中の生徒が立ち止まる程の音量、一夏達も気付いた。

見るからに、苦戦している様子で・・・声を出さずには、いられなかった。

男なら・・・一夏なら。

そんな敵、簡単に、倒せるだろう・・・！
身勝手の願望、そんなことはわかってる。
だけど、言わずには、願わずにはいられなかった。
一夏は、私よりもずっと強いはずだと。

『第 つつ！』

中継室の集音機材から、アリーナの一夏の声が聞こえる。
そして次の瞬間、アリーナ中央の敵が手をこちらに向けて。

砲撃。

中継室に爆風が吹き荒れて、私は小さく悲鳴を上げる。
周囲の機材や壁が揺れて、天井部分が吹き飛ぶ。
・・・だが、私自身には傷一つ無い。
何故・・・と、思ったのは一刹那。

「な、な・・・？」

私の目の前に、不思議な物があつた。
私の前と言うか、中継室の前方に、「それ」は浮かんでいた。
それは6つの剣のような、杭のような物体。
円環状に並んだそれは、『ブルー・ティアーズ』のビットのように
も見える。

決定的に違うのが、円状に並んだ剣型のビットの間に不可視の盾のような物を形成している所だ。

防御のためのビット・・・ISか？
だが、誰が・・・。

「大丈夫、姉さん・・・？」

声は、すぐ傍から。

首だけ回して振り向けば、そこには自分と同じ顔。

・・・楓？

「大丈夫、篝姉さんは私が守るよ」

私の隣に立っていた楓の身体を、光の粒子が包む。
ぶわっ・・・楓の短い髪が、風に揺れる。
天井を失った中継室の中で。

「だから・・・おいで、『黒叡』こくえい」

・・・こく、えい？

次の瞬間、楓の姿が闇色に染まった。

Side 篠ノ之 楓

身体を締め上げる感触と、コアと意識が融合するこの瞬間。

私はISと一体化するこの瞬間が、凄く好き。

自分の中に、何か^{はい}が這入ってくる感触。

ぶるっ・・・と身体を小さく震わせながら、小さく息を吐く。

目の前に並ぶのは、私とお姉ちゃんが作った第3世代型IS『^{こくえい}黒叡』のスペックデータ。

いくつものディスプレイに、様々な数値が並んでは消えて行く。

ガキンツ、と音を立てて、『^{こくえい}黒叡』の腰部のホルダーに^{ソード}剣型ビットが戻る。

6基あるそれは、特殊な盾を形成する自衛用の刃・・・名前は『^{こく}黒翼^{よく}』。

「楓、お前・・・？」

傍らの箒姉さんに、にこつ、と微笑んで見せる。

私のIS、『^{こくえい}黒叡』の機体カラーは黒、肩や腰部が丸みを帯びた流線的なデザイン。

背中にしよった2基のタンクが、可愛いでしょ？

「一夏さん、あと・・・えーと、凰さん！ 姉さんは大丈夫です・・・
やっっちゃってください！」

オープン・チャネルでISの通信回線を開いて、アリーナの2人に
そう伝える。

中継室、吹っ飛んじやったし・・・他に通信手段が無い。
まあ、別に良いけど。

『か、楓か！？ お前、その機体・・・』

「細かい話は後！ やっっちゃってください！」

『あ・・・ああっ！』

一夏さんが頷くのを確認すると、私は次の行動に移る。

腰部から再びソード・ビットを展開、正面からの衝撃に備える。
箒姉さんを『黒叢こくそう』の陰に隠すようにしながら、私は4つのデイス
プレイと4つのキーボードを開く。

「え、援護しないのか？」

「無理、攻撃用の武器が無いから」

「・・・は？」

いや、そんなぽかんとした表情をされても。

姉さんに返したように、このISに攻撃用の装備は無い。

ソード・ビットも防御・自衛以外には使えない。
ぶっちゃけ、このISで戦闘は無理。
模擬戦なんてしたら、10秒で負ける自信があるよ！

でも、箒姉さんが望むなら。

このISに武装は無い。

でもその代わり、東お姉ちゃん製のセンサー機器類は他のISとは比較にならない感度・精度を持つ。

元々、宇宙空間で活動する他のISを支援・補助するのが目的で設計したから・・・。

そして・・・開始する。

「じゃあ一夏さん、行きますよー？」

『何を！？』

「細工は流流、後は仕上げを御覧じろ！」

『だから何を！？』

それ以降は通信を遮断、集中しないと使えない。
ガコンツ、と音を立てて・・・背中から黒い何かが溢れ出る。

私の機体を伝って床に降りたそれは、次第に薄くなって空中に掻き消えて行く。

ナノマシン型兵装「黒叢」。

この機体の名前の由来、束お姉ちゃん製作の驚異のシステム。
コアへの干渉を可能にする、技術。

コアの開発者である束お姉ちゃんだからこそ、コアに干渉できるシステムを作る。

・・・ただ、私が使うには手間も時間もかかり過ぎる。

「一夏っ・・・！」

私が合計8枚のディスプレイとキーボードに視線と指先を集中させている間にも、アリーナ中央では戦闘が続いている。

中継室近辺にも、流れ弾が飛んでくる。

けれどそれは、私のソード・ビットの盾で防げる。

篝姉さんはソード・ビットの盾越しに、一夏さんの戦いを見る。

私のISのことも気になるだろうけど、一夏さんの方がもっと気になるのだと思う。

・・・了解、篝^{ロケ}姉さんがそれを望むなら。

「・・・行くよ、『黒叢』」

その瞬間から、私の意識から全てが消える。

視界に映るのは、必要な時間と工程表。

指先に感じるのはキーボードの感触のみ、それ以外は何も知らない。

何も、いない。

私と『黒叢』の、2人だけの世界。

・・・と言つかさ、アレ作ったの誰？

無人機かぁ、それはそれでロマンだよな。

S i d e 鳳 鈴音

ザア・・・と、耳元で鳴るはずの無い音がした。

ISのハイパーセンサーに一瞬だけ、黒い影みたいなのが映った。
でもそれらはすぐに消えて、元通りの映像状態に戻る。

「何・・・？」

こんなのは、今まで一度だつて無かった。

気のせいかとも思っけど、その「気のせい」すら起こさせない高性能な機械がISよ。

当然、不調でも無い。

だけど『^{シエンロン}甲龍』のハイパーセンサーには、何も映って無い。

ただ、周囲の光景がクリアに見えるだけで。

じゃあ、何・・・？

「・・・って、考えてる場合でも無いわね！」

どばっ・・・と言う擬音が合いそうな勢いで、敵ISが光弾をバラ撒く。

全方位攻撃、でも狙点が甘い。

ISの機動力なら避けられる・・・アリーナの地表や壁の各所が爆発する。

ピピッ・・・と中継室の方を確認すれば、あのビットの盾が正面を守っているのが見える。

あの黒いIS、どの機体？

公式発表されてる機体じゃ無いわよね、日本の機体・・・でも無い
か。

「でやあああああっ!!！」

「え・・・あっ、バカ！」

一夏が、エネルギー残量も無いのに突っ込んだ。

近接ブレードしか無いのに・・・案の定、敵ISの太い右腕で受け止められる。

左腕が動く前に私も加速、その左腕に青竜刀を叩きつける。

それで一旦動きが止まる・・・けど。

「・・・！」

敵ISの腕の砲塔から閃光が走るのと同時に、私も『龍砲』を撃つ。エネルギーがぶつかり合って爆発、3機が離れる。

「ちょ・・・一夏！？ 作戦も無しに突っ込んで勝てる相手じゃ無いでしょ!？」

「良くわからないけど、楓が何かするらしいんだ!」
「はあ？」

楓って・・・あの黒いISの子よね。

確かに凄そうな機体だけど、でもそれが何よ。

「いや、わからん」

「アンタね・・・で、賭け甲斐のある賭けなんでしょうね？」

「いや、わからん」

ぶん殴ってやろうかしらコイツ。

つまり何の根拠も無しに信じてるってわけ？

だとしたら、本当にバカだわ。

・・・ま、一夏らしいけどね。

とはいっても、私もエネルギー残り少ないし、そんなには保たない。実はもう『龍砲』も撃てない、つまり大ピンチ。

さーで、面白くなってきやがったわねえ・・・。

「・・・楓！」

『・・・了解ログ』

タンツ・・・何かのキーを押す音が、どうしてか耳に響いた。
妙に機械的な返答は、もしかしくなくても楓って子の声。
直後、一夏のISの様子が変わる。

近接ブレード『雪片式型』ゆきひら・にがたが、強い輝きを発した。

刃が2つに割れて展開、そこから白いエネルギーの刃が飛び出す。

『甲龍シェンロン』のハイパーセンサーには、『白式びやくしき』のエネルギー転換率が
急激に上昇したことを示すデータが映ってる。

な、何・・・何で急に？

『エネルギー転換率90%オーバー！ ISコア稼働率80%突破・
・・・一夏さん、やつちやってください！』

「お・・・おう！ コイツで斬れば良いんだな！？」

オープン・チャネルで響く楓とか言う子の声。

え・・・ってことは、一夏のアレはあの子が・・・？

・・・どうやって？

「よし！ 行くぞ鈴！」

「ああ、もう！ 指図さしずすんじゃ無いわよ！」

言いながら、すぐに行動。

敵に接近しながら段階的に加速、まず私が突撃。

ヒュゴツ・・・音を立てて、青竜刀が地面を砕く。

右隣、回避した敵。

そしてその背後に、『瞬間加速イグニッション・ブースト』で一夏が肉薄する・・・！

「うおおおおおおおっ！！！」

白いエネルギーの刃を振り下ろす、敵の右腕を斬り飛ばす。
そして返す刀で・・・って所で。

「・・・げ」

やる気満々で太刀を構えた一夏、その機体からキュウウウ・・・
んって力の抜けるような音。

・・・『白式びやくしき』のエネルギーが、切れた。

え、何それ、その機体ってそんなに燃費悪いの？
嘘・・・え、本気で？ 馬鹿じゃないのおっ！？

次の瞬間、残った左拳が一夏を殴り飛ばした。

「一夏!!」

最後の加速、敵ISと一夏の間に割って入る。

敵ISの砲塔がゆつくりと上がる・・・エネルギーが切れた今の一夏ならどんな衝撃でもヤバイ。

反射的に、倒れた一夏を背中に庇う。

私の機体は、まだ盾になれる・・・!

「・・・鈴!」

一夏の声、大丈夫、死にやしないわ。

・・・その後のことは、ちょっとわからないけどさ・・・!と、私が映画のヒロイン的に覚悟を決めた瞬間・・・。

「・・・へ?」

ガンッ、ガガガガガガ、ガガンッ!

甲高い音を立てたのは、無人機の装甲。

撃ち込まれたのは実体弾、もちろん私達は装備してない。

一夏に至っては近接ブレードオンリーだしね。

何かと思って顔を上げると、観客席に10機ほどのISが見える。

機体は第2世代型量産機の『打鉄^{うちがね}』と『ラファール・リヴァイヴ』。

武者鎧のような日本製のISとネイビーカラーのフランス製ISが

居並ぶ姿は、何だか壮観だった。
その中の1機・・・先頭に立っていた『ラファール・リヴァイヴ』
が、手にアサルトライフルを持っていて、銃口からは煙が上がって
る。

「学園の・・・」

私の声が届いたわけじゃないでしょうけど、先頭の『ラファール・
リヴァイヴ』の操縦者がアサルトライフルを肩に担ぐ。
乗っているのは20代の女性、バイザー型のマスクをしているから
顔はわからない。

だけどその機体には、IS学園の校章。

その女性 たぶん先生の誰か が、口を開く。

『ウチの生徒が随分と世話になったみたいじゃねえか・・・ああ？』

次の瞬間、遮断フィールドで遮られているはずの観客席から、先生
達の機体がアリーナに踊りこんでくる。

あ、あれ・・・シールドは？

私が少し困惑している間に、アリーナから撤退するように千冬さん
から通信が入る。

無人機は・・・何と言つか。

・・・虐殺？

Side 一夏

「・・・そんなわけで、お前達には罰を与えねばならないわけだが、どうだ、嬉しいか？」

誕生日に子供にプレゼントをあげた母親みたいな声音で、千冬姉がそう言う。

でも全然、内容は嬉しく無い。

ちなみに俺、鈴、箒、楓の4人がピットで千冬姉に正座させられて・

・・・あれ？

「えーと、千冬姉。ひょっとして俺達怒られてる？」

「死にたいのか？」

「生きたいデス」

いや、まあ、かなり無茶したとは思う。

何と言つても、遮断シールドに対するあの無人機の干渉がなくならなかったら、俺達死んでたかもしれないかったらしいし。

・・・試合は当然、無効。

イグニッション・フースト

ゆきひら

忙しいのに『瞬時加速』や『雪片』の使い方を教えてくれた千冬姉には、本当に申し訳ない気持ちだ。

「心配かけてゴメン、千冬姉」

「織斑先生だ」

「・・・織斑先生、えーと・・・他の3人はさ、俺を助けようとしてくれただけだし・・・」

「別に心配はしていない」

何てお優しいお言葉。

「・・・が、鳳はもう良いぞ、弟が世話になったな」

「い、いえ、幼馴染ですし・・・」

鈴の言葉に、隣で正座してた箒がピクツ、と反応する。

でも千冬姉の前だからか、大人しい。

千冬姉の前でこれ以上何かすると、逆に何をされるかわからん。

鈴は許され、俺は反省文10枚を言い渡されて解放。

箒と楓は、別件でさらに叱られるらしい。

・・・楓のISについて聞いたかったけど、まあ、今度で良いか。たぶん、束さんに貰ったんだと思うし。

「あー・・・鈴、すまん、いろいろと」

「もう良いわよ・・・私だって、ムキになってたしね」

千冬姉の説教でグロッキーだからか、鈴も何だか素直だった。
・・・あ。

「あー・・・思い出した、約束。正確には『料理上手になったら、私の酢豚を毎日食べてくれる?』だったよな」

「う、うん・・・ま、まあ、ほら、誰かに食べて貰うと上達するでしょ? それだけよ・・・ほ、本当にそれだからねっ!」

「お、おう・・・まあ、あの親父さんに習ってんなら、上手くなるだろ」

ピットから更衣室へ続く廊下を2人で歩きながら、ポツポツと話す。そんな中で、俺は鈴ががつきり親父さんに料理を習ってんだと思ってたけど・・・鈴の両親が離婚して、親父さんとは1年以上会っていないってことを初めて聞いた。

「家族って、難しいよね」

深いため息を吐きながらそう告げた鈴の顔が、とても印象的だった。家族・・・家族、俺にとっては、千冬姉だけだ。家族を、箒や楓、鈴や俺に関わる人全部を守りたくて、ISの訓練も耐えてきたけど・・・。

良くはわからないけど、あのエネルギーの刃・・・『零落白夜』も出せたけど。

実際には、エネルギー切れ起こしてお荷物だ。

・・・強く、ならないとな。

今日一日で、俺は改めてそう思った。

S i d e 篠ノ之 篇

・・・私達が織斑先生の説教 反省文・各方面への謝罪文その他 などから解放されたのは、一夏達が解放されてからさらに3時間、夜10時を過ぎてからのことだった。

危険地帯に自ら飛び込んだ馬鹿、織斑先生に15回ほど連続で言われて流石に落ち込むが。

「まあ、今回は緊急事態だ・・・本来は正式に罰則を与える所だが、今日の所はこれで勘弁してやろう」

とのことで、何とか解放された。

本来なら停学を飛ばして退学でもおかしくは無いが、諸事情でそれもできないそうだ。

織斑先生は理由を告げなかったが、私にはわかる。

私達姉妹が、「篠ノ之束」の妹だからだ。

姉さんの存在は、それだけ重い。

嫌だと思っても、消えてなくなるわけじゃない。

そしてそれが、自分を守っている。

・・・都合の良い時にそれに助けられ、また甘える自分が本当に嫌になる。

「ああ、篠ノ之・・・ああ、ややこしいですね、篝さん。寮の部屋の調整が付きましたので・・・明日中に、お引越ししてくださいね？」

「え・・・？」

「返事はどうした、篠ノ之姉」

「は、はいっ！」

去り際、山田先生に一夏とのど、同居が終わったことを知らされた。そ、そうか・・・まあ、普通はそうなる、よな、うん。

自分にいろいろと言いつつながら、私はアリーナのピットから出て行った・・・。

「あはは・・・ゴメンね姉さん。私、出て来た意味、あんまり無かったよね・・・？」

一緒に解放されたわけだから、当然、寮までは楓と一緒にだ。正直、こちらもどう接したら良いのかわからない。いや、楓自身をどう・・・とかは、思っていない。だが・・・。

「・・・あ、このISはね、私が東お姉ちゃんと一緒に作ったんだよ。基本設計は私・・・可愛いでしょ？」

「か、可愛い・・・？」

「うんっ」

可愛い、と言うのはわからないが・・・待機状態なのだろう、左手の黒いひし形の指輪を見せて来る楓の顔は、笑顔だった。織斑先生に叱られた直後だと言うのに、にへら、と笑みを浮かべている。

その笑みは・・・昔見た、あの人の笑みに重なって見えた。

そして、IS・・・姉さんと一緒に作ったと言う、専用機。

国籍は無い、所属は・・・「篠ノ之東の個人所有」。

正直、国際IS委員会や政府が黙っていないだろうと思うが・・・そこまでは、私にもわからない。ただ・・・。

「あ、それとね・・・実は、東お姉ちゃんから、伝言があって・・・ずっと言わなくちゃって思ってたんだけど・・・」

「伝言？」

「・・・『篝ちゃんのも、ちゃあんと用意してあるからね』・・・だっ」

私のも、用意してある・・・その言葉の意味を。私はおそらく、正確に把握している。

「じ、じゃあ・・・おやすみなさいっ」

私はパタパタと寮の中に駆けて行く楓の後ろ姿を、見つめるしかできなかつた。

・・・私は。

姉さんには、頼りたく、無いのに・・・。
あの人に、だけは。

S i d e 千冬

ガキ共への説教を終えた後、私と山田先生もアリーナから移動する。学園の地下50メートルの地点にある、特殊区画。レベル4の権限を持つ人間しか入れない、隠された空間。

例の試合に乱入してきたISが運ばれ、解析されているのもここだ。私が一夏や篠ノ之姉妹を留めている間に、全てが進行していたわけだ。

それに、私の権限ではアイツらに叱責以上の罰は「与えられない」。

「・・・解析結果、出たようです」

「ああ、どうだった？」

「はい、アレは・・・無人機です」

世界中で様々な国が技術の粋を集めて開発しているIS、それにはまだ確立されていない技術もある。

その内の一部が、リモート・コントロール・スタンバイ・アローン遠隔操作と独立稼働だ。

つまり、ISの無人化・・・判明した時点で、学園関係者に緘口令が敷かれた。

もしこの技術が外に漏れれば・・・。

「・・・コアは？」

「未登録・・・467の登録コア以外の、新しいコアです」

「そうか・・・」

自壊システムが組みれていたのか、解析した段階で機能中枢のデータは全てデリートされていた。

積み重ねていたISコアは、現時点ではただの素材の塊に過ぎない。つまり・・・現段階では、確たることは何も言えない。

だが、ISのコアを作るのは世界でただ一人。

もちろん、決めつけるのは危険だが・・・。

「それにしても・・・楓さんの専用機、やっぱり問題ですよね」
「・・・ああ」

今回、篠ノ之妹は姉を守るためにISを使った。
基本的なスペックデータは他の専用機持ち同様、学園に提出されて

いる。

束の個人所有のコアと機体、と言うことで・・・委員会と政府も扱いに苦慮しているようだが、束がはっきりと「これは私のだ」と宣告している以上、手は出せないだろう。

・・・やり過ぎるなと言ったはずだぞ、束。

篠ノ之妹の専用機「黒叢」の能力は、ナノマシンによるコアの活性化だ。

それが、ISのコアに直接干渉する・・・そしてISの稼働率を高め、ワンオフ・アビリティ単一特殊技能に目覚めさせるだど・・・？

それは、下手を打てば世界の軍事バランスを崩しかねない程の能力。

「・・・」

今回、土壇場で無人機側からの遮断シールドへの干渉が止んだ。

それが無ければ・・・教員部隊はアリーナへ突入できなかっただろう。

どうして急にシールドのロックが解除されたのか、わからない。

・・・タイミングとしては、一夏が『零落白夜』を出した次の瞬間に干渉は止んだ。

まるで、目的は達したとも言わんばかりに・・・。

・・・結果論、だが。

家族が死ぬのは、寝覚めが悪い。

そういう意味では、助かったと言っべきなのだろうが。

気に入らない、な・・・。

「織斑先生、何か心当たりでも・・・？」
「・・・いや、無い・・・今はまだ、な」

私の表情が気になったのか、山田先生が不思議そうに首を傾げる。
そんな私達の目の前では、例の無人機の解体・解析作業が進められていた・・・。

第5話：「クラス対抗戦」（後書き）

篠ノ之 楓：

どうもです、ようやく活躍できましたー。

いやはや、まあ、あんまり意味無かった気もするですけど。
ちにみに、無人機の動きを止めたのは私じゃ無いですよー。

だから千冬姉様、そんな探るような目で私を見ないでくださいよー。

篠ノ之 束：

むむ？ ちーちゃんが楓ちゃんばかり？

むー、ちーちゃんを誑かしたのはこのほっぺかー！？

篠ノ之 楓：

へ？ ちよ、束お姉ちゃん、出番はいつも後書き最後・・・うにゃ
ああああっ！？

篠ノ之 束：

げっへへへー、口ではそう言いながらも身体は正直ほじくだのー。

篠ノ之 楓：

うみやみやみや、ふおうふいふえふあー！。

*助けて、箒姉さーん！

織斑 千冬：

・・・馬鹿共が。

過去編：「運命のクリスマス」（前書き）

思うに、キャラクターには歴史を積まさないとい．．．。
と言っわけで、ここでちょっぴり過去編です。
では、どうぞ。

過去編：「運命のクリスマス」

過去編：「運命のクリスマス」

それはまだ、篠ノ之 束によって変革される前の時代。

IS学園はおろか、人々がまだ「IS」と言う兵器の存在を知るはずも無かった時代。

世界が、1人の天才の「遊び場」になる前の時代。

3人の姉妹と2人の姉弟が、まだ共に在った時代。

まだ・・・何もかもが台無しになる、直前。

これは、そんな時間の物語　　。

少年と少女が、向かい合っている。

いや、少年と少女と言うこともできない程に幼い2人は、男の子と女の子と表現すべきだろう。

年の頃は、小学校に入学したかどうか・・・5、6歳ほどだろうか。

1人は黒髪の男の子で、活発さを表すように髪の色がピンピン跳ねている。

女の子はリボンをつけたポニーテールで、幼いながらもすでに凛とした雰囲気を持っている。

2人が着ている物は道着であり、手に持っているのは竹刀。
そして立っているのは、冬の空気が冷たい板張りの剣道場……。

「今日は、俺が勝つ！」

「ふん」

「……だああああっ！」

鼻で笑われたのが気に入らなかったのか、男の子はすぐに竹刀を大きく振りかぶって斬りかかった。

まだ剣道を始めて間が無いのか、その行動はどこか直線的で直情的だった。

対する女の子、こちらは慣れているのか、冷静に相手の剣先を避けて竹刀を横にして……。

べしっ、ぐしゃっ。

見事に胴が決まり、男の子が剣道場の床に沈む。

それから女の子が型を崩した瞬間、男の子はがばりと身を起こした。その顔は、悔しさで真っ赤になっている。

「あ、明日は俺が勝つからな！ 箒！」

「ふん、その明日はいつ来るのだろうな、一夏」

いつも同じ問答をしているのか、男の子
織斑 一夏と、女の

子　篠ノ之　箒は、どこか慣れたような雰囲気を漂わせている。一夏にしてみれば女子に勝てないと言うのが我慢できず、箒にしてみれば剣道場の娘として始めたばかりの一夏に負けるわけにはいかない、と言う事情がそれぞれにあるわけだが・・・。
お互いにそれを察せられる程には、まだ成長していない。

「・・・くりすます？」

「んだよ、知らないのか？　千冬姉が言ってたぞ、ケーキとか食う日だよ」

2人しかない剣道場で、自分の道具を手入れしながら　篠ノ之道場の伝統である　一夏と箒は12月25日と言う今日、クリスマス話題に興じていた。
厳密にはクリスマスはケーキを食べる日では無いわけだが、そこは子供、細かい点は無視である。

「けーき・・・？」

「知らねーのか？」

「ば、馬鹿にするな！　それくらいは知っている！」

もちろん、箒はケーキと言う食べ物は知っている。

ただ家が神社でしかも剣道場なため、クリスマスと言う習慣とは无缘なのである。

箒自身、そう言うナヨナヨしたイベントは好まないわけだからして・・・。

「……箒姉さん？」

その時、2人きりだった剣道場にもう1人、客が現れた。
いや、客と言うのもおかしい……何故ならそれは、ここ篠ノ之神社の娘の1人なのだから。
名前を。

「楓！」

妹の名を呼んで、箒が立ち上がる。

そして道場の入口まで駆けて行く小さな背中を、一夏はぼんやりと眺めていた。

ああ、明日は勝ちてえなあ

と、そう思いながら。

篠ノ之 楓と言う名の少女
ける子供だった。

女の子は、どこか儂げな印象を受ける。
おかつぱの黒髪に、日の光に当たったことが無いかのような白い肌。
道場の引き戸に半分隠れている小さな身体には、白い襦袢を纏っている。

どこか不安そうだった表情は、姉である箒が駆け寄ってくると明るい物に変わる。

普通なら日が差したような明るさとして表現する所だが、この女の子の場合は雪に月明かりが反射したような、静かな明るさと言うのが相応しいだろう。

姉・・・箒がその薄い肩に触れると、妹の身体がひどく冷えていることに気付く。

「ダメじゃないか、寝ていないと・・・こんなに冷えて」

「大丈夫だよ、今日は気分も良いし・・・空気が冷たくて気持ち良いくらい」

「ダメだ、昨日もそう言って熱を出したばかりじゃないか」

蚊の鳴くような小さな声で応える楓に、箒は厳しい言葉を返す。

箒は、真っ赤な顔をして目を回していた昨夜の妹の様子を覚えている。

そんな姉の気持ちはわかってる物の、楓は姉のように動き回りたえと言う気持ちを抑えられない。

なので、割と揉める2人でもあった。

「箒、俺もう帰るぜー？ 千冬姉がうるせーから」

「あ、ああ、また明日な」

「おーう・・・ちゃんと寝てろよ」

最後の言葉は楓に向けて、一夏は姉妹の傍を駆け抜けて行った。

彼は彼で、自分の姉の待つ家へと帰りたくなったのである。
箒はそれを目だけで追った後・・・再び妹を睨んだ。

・・・なお箒本人は睨んでいるつもりは無いのだが、ツリ目のためかそう見えてしまうのである。

そこは、本人も少し悩んでいる様子である。

それはそれとして、箒は楓の背中を押しながら。

「ほら、早く部屋に戻るんだ」

「箒姉さん、今日はケーキ食べるの・・・？」

「何だ、聞こえていたのか？　　うちは神社だぞ、ケーキなんて出ないに決まっている」

「あ・・・そう、なんだ・・・」

箒に背を押されながら、しょぼん、と沈む楓。

そんな妹の様子に片眉をピクリと動かしながらも、箒は楓を部屋の布団に戻そうと・・・。

「・・・こほっ、こほっ・・・」

「ああ、ほら。早く布団に入って寝るんだ、また熱が出るぞ」

「・・・うん」

軽く咳き込み始めた楓の背中を撫でてやりながら、箒は心配そうに楓の顔を覗きこむ。

少し赤みを帯びた頬が、白い肌に映えて妹の可憐さを彩っている。

だがそれが良く無い 体調を崩す 兆候であることを知っている筈は、心配でならなかった。

身体の弱い末の妹、楓。

一日のほとんどを布団の中で過ごす、双子の妹。
・・・この時、筈は妹のために小さな、そして大きな決断をした。

カシャンッ・・・多少くぐもってはいる物の、陶器が割れたような音が響く。

そして実際、ような、では無く割れた物がある。
新聞紙に包まれたそれを丁寧に扱うのは、幼い少女・・・筈だった。

側には小さなトンカチがあり、新聞紙の包みからは薄桃色の陶器の破片が出て来た。

そして破片に塗れるような形で、何枚かの硬貨が見える。

薄桃色のそれを繋ぎ合わせると、豚のような形になったかもしれない。

とどのつまり、豚さんの貯金箱を割ったのである。

「ひい、ふう、みい・・・の・・・」

たどたどしい手つきで数を数えながら、筈は膝の上に置いていた赤

いがま口に硬貨を大事そうにしまっている。

それは、箒が今まで貯めて来たささやかな貯金だった。
それを今日、使う。

・・・妹のために。

「・・・良し」

がま口を首から下げて、部屋を飛び出す箒。

隣の部屋　　楓が寝ている　　の方を見て、箒の表情は決意の
色に染まる。
そして・・・。

「箒ちゃん、どこに行くのぉ？」

縁側に面する部屋の襖が開いたかと思うと、ズルズルと何かが這い
出て来た。

のんびりした動作と口調、しかし伸ばし放題になった長い髪が廊下
の板に広がっていて、幼い箒は少し怖かった。

「姉さん」

「堅いよー、楓ちゃんみたいにお姉ちゃんって呼んでよー」

「・・・嫌だ」

「えええ」

駄々っ子のようにその場でゴロゴロしているのは、篠ノ之 束と言
う名の少女だった。

篠ノ之家の長姉であり、風変わりな娘として周囲から敬遠されてい
る。

とは言え、2人の妹にはいつも優しい、そんな姉だった。

どこかの村娘のような、村人のような、黒い西洋風のドレスのよう
な服。

コンセプトは、「1人ヘンゼルとグレーテル」。

年齢の割に豊満な胸が、窮屈そうにブラウスの中に納まっている。

「むぎゅー」

「ね、ねね姉さん、離して・・・っ」

「お姉ちゃんって呼んでよー」

「・・・」

「んー？」

束に身体を掴まれて引き倒され、柔らかな姉の身体の上でモフモフ
される筈。

その顔は、トマトのように赤い。

でも嫌がられてはいない、だから束もニコッと笑っている。

筈は右に左に視線を彷徨わせた後、普段からは想像もできない程に
小さな声で。

「・・・お姉、ちゃん・・・」

「か・・・可愛い　　！」

「ね、姉さん、ね・・・っ!？」

散々姉に抱き潰された後、箒は息を荒げながら束から離れた。

束はニコニコと上機嫌そうに笑っていたが、箒の首に下がったがま口を見て首を傾げる。

はて、どこかに行くのだろうか？

「箒ちゃん、どこに行くの？」

「ちょ、ちよつと商店街まで・・・」

「しょーてんがい？」

うん？ と首を傾げる束。

箒は少し恥ずかしさが残っているのか、赤い顔のまま姉に背を向けて駆け出す。

「静かにしててね、楓が寝てるんだから！」

「え、うんー」

頭の上に「？」をいくつも浮かべながら、束は活発な妹を見送る。

この時点で、1人を除いて並ぶ者が無い程の才能を発揮している彼女。

そんな彼女をしても、人の心は複雑怪奇にして摩訶不思議、その深さの全てを知ることはいできない。

だからこそ、興味がある・・・相手が大事な妹となれば、なおさら。そう思い、束はもう1人の妹が寝ているであろう隣の部屋へと視線を向けた・・・。

織斑 千冬と言うのが、その少女の名前だった。

艶やかな黒髪、はっとするほど整った顔、雪よりも白く映えるきめ細やかな肌。

モデル並の長身を学校の黒い制服で包むその姿は、男女を問わず通りすぎる人々の視線を惹きつけてやまない。

鋭さとキツさを併せ持つ切れ長の瞳は、吸いこまれそうな程に美しい黒。

彼女がそこにいるだけで、周囲の空気までもが張りつめた物になりそうな程だ。

実際に声をかける勇氣ある男性もいるが、その全てが視線一つで追い払われてしまう。

そんな彼女の心配事は、たった1つ。

「・・・遅くなってしまった。一夏も腹を空かせて待っているだろう」

ポツリと呟いたその言葉にだけは、鋭さとは無縁の温かな感情が見え隠れしている。

特に「一夏」・・・弟の名を紡ぐ時、その表情に浮かぶ感情は冷厳さよりも温かさの方が勝っているように思える。
そんな彼女の手には、大きく膨らんだ買い物袋。

彼女が今まさに商店街で購入した食材であり、今日の夕飯の材料である。

料理はあまり得意では無い千冬だが、クリスマスくらいは弟に温かい食事を食べさせてやりたい。

両親が蒸発して以降、弟の世話だけが千冬にとって・・・。

「・・・うん？」

商店街の端にまで来た時、千冬は足を止めた。

はたと立ち止まって見つめるその先には、剣道着姿の小さな女の子がいる。

道行く人の多さに戸惑っているのか、酷く困っている様子だった。
普段なら気にも留めない千冬だが、それが良く知る顔だっただけに無視はできなかったのである。

「・・・箒？」

「あ・・・千冬さん」

そこにいたのは、箒だった。

千冬にとっては通っている剣道場の娘であり、たばね親友の妹である。
加えて言えば、千冬の弟の友達でもある。

「どうした？」

「あ、その・・・」

胸の前で手を握り締める箒に、千冬はしゃがみ込んで視線を合わせる。

いつも明瞭な受け答えをする箒にしては珍しく、どうも言いにくそうである。

千冬は内心で頭を掻きながら、根気強く待った。

だがむしろ、幼い箒は千冬の視線の鋭さに気圧されていたわけだが・・・。

・・・この点、千冬と箒は共通の悩みを抱えていると言える。

「・・・実は・・・」

やがて、ポツポツと箒は自分が1人で家を出て来た理由を告げる。それを聞いた千冬は、話の最中に頷きを返しつつ事情を了解した。箒が行きたい場所は・・・。

「・・・良くわかった」

ぽんっ、箒の頭に手を置きながら、千冬は厳格に告げる。

「では一緒に行こう、ちょうどうちの予約した分を取りに行く所だ」
「・・・い、良いん、ですか？」
「構わないさ」

そこで初めて笑って、千冬は立ち上がる。
そして箒に手を差し伸べると、箒は戸惑いつつもその手を取った。
2人は手を繋いだまま、商店街の雑踏の中に消えた。

・・・なお結果として、箒が持っていた分のお金では目的の物は買えなかった。
千冬が箒から受け取った分にそつと100円玉を足してレジの店員に渡したのは、また別の話である。

「・・・つたく、千冬姉はどこに行ったんだよ」

たつ たつ たつ・・・と道を走りながら、一夏は不満そうに唇を尖らせる。

家にいるはずの姉の姿は家に無く、一夏は姉を求めて近所を駆けずり回っていたのだ。

本人は絶対に認めないが、つまりは姉が恋しいのである。
箒と楓を見て、影響されたのかもしれない。

「・・・つたくよー、箒はよー」

思い出したせいか、一夏は別の意味で唇を尖らせる。

寒い冬の空気の中で、一夏はどうしたら箒に勝てるかを考える。

・・・が、妙案は何も思い付かなかった。

「あーくそー・・・勝ちてえなあ、勝てねえかなあ・・・」

元々、姉の千冬に無理矢理やらされていた剣道。

だが、箒の存在が一夏のやる気を刺激している。

同じ年の女の子に勝てないと言っつのは、幼い男の子のプライドに大きな傷をつけているのである。

だが実直な姉の影響か、一夏は原因を自分の力不足に求める。

箒のことは気に入らないが、それで箒自身をどうこうとは思わない・・・。

「・・・あ？」

いくつか角を曲がったあたりで、一夏は足を止める。

目を細めて先を良く見ると・・・。

・・・そこに、数人の男子に囲まれた箒の姿を見つけた。

商店街で千冬と別れた後、箒は急いで家に帰ろうとしていた。
もうすぐ日が暮れる時間で、トタトタと走る。
もつとも、子供なのでそれほど速くは無いが……。

あと少しで神社……家につくと言う所で疲れたのか、肩で息をしながら立ち止まる。
はあ、はあ……と息を吐きながら、箒は自分の胸元に視線を落とす。

そこには、両手で大事そうに抱えた白い箱があった。
箒はその箱を見ると、かすかに笑みを浮かべて……。

「あ、男女だ！」

おとこあんな

「本当だ、男女がいるぞ！」

「……？」

その時、道の向こう側から2、3人の男子がやってくるのが見えた。
箒と同じ年の男子で、箒も知っている顔だった。
かと言って、それは仲が良いことを意味しない。
そもそも仲が良ければ、箒のことを「男女」とは呼ばない。

「おい、男女、今日は木刀持っていないのかよ」

「喋り方も変だもんな、俺知ってるぜ、武士って言うんだ」

「武士って男だもんな、やっぱり男女だよな」

木刀では無く、竹刀だ。

だがそれを訂正する気にもなれない、箒は今度は本当に相手を睨んでいる。

剣道を習っている箒は、基本的に同い年の男子よりも強い。それが原因で、こう言うことは何度もあった。

「あれ？ コイツ今日リボンしてるぞ、男女のくせに」

「わっ、ほんとだ、似合わねー」

箒は普段から髪を縛っているが、基本的にリボンはつけない。

リボンをつけるのは、一夏との稽古の日だけだ。

だがそれにも、箒は手にした箱を抱き締めるだけで何も言い返さない。

「・・・何だ？ その箱」

「・・・っ、触るな！」

ぱあんっ・・・乾いた音が響く。

箒の持つ箱に触ろうとした男子の顔を、箒が片手で張った音だ。頬を張られた男子は少しよろめいた後、顔を押さえながら。

「な・・・何すんだよ、コイツ！」

「やっちまえ！」

男子達が箒に掴みかかろうとして、そして箒が両手で箱を庇おうとした時……。

「よってたかつて、何してんだお前ら」

「……一夏！」

家に帰ったはずの一夏が何故ここに、と言う疑問を箒が感じている間に、一夏は3人の男子相手に喧嘩を始めた。
箒も加勢したかったが、両手が塞がっていてできない。

……と言うか、剣道に加えて千冬に武術の基礎の基礎を習っている一夏は、途中から3人の男子を一方的に殴っていた。
むしろ、一夏が苛めているようにも見えるから不思議である。

「ぱ、パパに言い付けてやるからな！」

「お、覚えてろよ！」

「へっ、おとといきやがれってんだ」

覚えてたの言葉が無駄に使いながら、一夏は舌を出して男子達を追いかつた。

流石に無傷では無いが、逃げて行く男子達に比べれば軽い物だった。
ぐいっ……手の甲で頬を擦りながら、一夏は「へっ」ともう一度鼻で笑う。

「い、一夏……」

「ん？ ああ、大丈夫かお前」

「あ、ああ……」

どことなく視線を彷徨わせながら返事をする箒、一夏は心の中で「へんなやつ」と思うが、それを口にはしなかった。

「べ、別に、お前の助けなんていらなかったんだ」

「別にお前を助けたわけじゃねーよ。ただ男のくせによつてたかってつてのが気に入らなかつただけだ、勘違いすんなよ」

「ふ、ふん。そうか、それなら良いんだ」

そつぽを向きつつも、箒はチラチラと一夏のことを見る。

一夏は逆に、頭を掻きながら箒から目を離す。

箒は、箱をぎゅっと抱き締めながら……。

「あ……あ、あり、ありが「ああ、それよりさあ」と……何だ？」

「千冬姉、知らね？」

「……もう、帰つてると思うぞ。さっき商店街で別れた」

「マジ！？ ヤッベ……！」

「あ、おい……」

そのまま別れも告げず、一夏は一目散に駆けて行く。
伸ばしかけた手を引つ込めて、箒はそんな一夏の背中を見送る。
一夏としては、千冬に叱られたくないがための行動である。
とは言え、箒としては拍子抜けも良い所だった。

「じゃーな、箒！ また明日な」
「・・・ああ！」

それでも、一夏の声に手を振って応じる。
また明日、その言葉があればそれで良かった。
箒は手を振った拍子に落としかけた箱を、慌てて持ち直す。

再び顔を上げた時には一夏の姿は見えなくなっていて、溜息を吐く。
・・・それから、思い出したかのように駆け出した。
家へ・・・妹の、所へ。

軽く咳き込む音と、熱に浮かされたような呼吸。
姉によって布団に押し込められた後、やはりと言うか何と言うか、
楓は体調を崩していた。
箒が心配していたように、身体を冷やしたのが不味かったのかもしれない。

母親は風邪だろうと言い、楓に少量のおかゆと薬を飲ませた後、楓を寝かしつけた。

楓が目を覚ましたのは、夜になってからのことだった。

障子の向こう側は真っ暗で、自分がまた1日を布団の中で過ごしたことを嫌でも思い知らされた。

それが幼い楓には辛くて悔しくて、仕方が無かった。

「・・・はあ・・・」

熱を孕んだ吐息を漏らして、楓は半身を起こす。

その時、はらりと額に乗っていた濡れタオルが落ちる。

それから体調を崩した時に特有の寒気を感じて、自分の身体を抱くようにする。

楓は思う、幼いながらに。

自分をもっと、いや、ほんの少しで良い。

丈夫な身体で生まれて来ていれば、良かったのに。

「お姉ちゃん達は、良いな・・・」

2人の姉は2人とも、病気とは無縁の生活を送っている。

上の姉は良く分からない人だが、とても頭が良くて明るい。

下の姉は楓の憧れで、毎日を健康に健全に生きて、剣道では年上にも勝つ程だと言う。

2人の姉はあんなにも、輝いているのに・・・。

「・・・にゃんにゃにゃーん・・・」

「え・・・？」

その時、楓の寝ている部屋の襖がゆつくりと開いた。

暗がりの中、そこから頭を出したのは・・・大きなクマさんだった。クマなのに何故「にゃ」なのかは、不明である。

「にゃにゃにゃ、おはようにゃーん」

「・・・東、お姉ちゃん？」

「ギクウツ！ 何故にバレたにゃ？」

楓よりも大きそうなクマさんの影から出て来たのは、東だった。

楓が起きるのを待っていたのかどうなのか、そそくさと部屋の中に入ってきて・・・。

筈と同じように、楓を抱き潰しにかかった。

「にゃるるん、楓ちゃんは可愛いなあ」

「わぷつ・・・！」

「ん？ んん？ 楓ちゃん、身体がポカポカだね。どうしたの、オーバーヒート？」

普通に熱っばいだけである。

「ほいほーい、お姉ちゃんからのクリスマスプレゼントだよん」
「・・・くまん？」
「むふふ、見て見て楓ちゃん！ これねえ、ここを押すと」
『やふー、東お姉ちゃんだよん！ 今日もらぶりい？』
「ほらほら、お姉ちゃんの声で喋るんだよ、凄いでしょー？」
「う、うん・・・」

これでいつもお姉ちゃんと一緒だからね、と笑う東の顔を、楓はとも眩しそうにしながら見上げる。
東は、本当に何でもできる。
自分とは、大違いだと思いながら・・・。

「・・・お姉ちゃんは、凄いな」
「うん？ むふふ、そりゃあ天才の東さんだからね。仕方無いよ、お姉ちゃんが凄いの生まれの時から決まってることだもん。で、嬉しい？ 楓ちゃん嬉しい？」
「う、うん、ありが「楓ちゃん可愛い」！ もががが・・・っ」

むぎゅうつ、と抱き締めたり頬をスリスリしたり、やりたい放題な姉であつた。

とは言え、東の体力に楓がついていけるはずも無く・・・。

「・・・こほっ、こほっ・・・」
「おやおや？ 楓ちゃん風邪？ キャッチコールド？」

「ん・・・ぐすつ・・・」

すんすん、と鼻を吸いながら咳き込む楓を、束は不思議そうに覗き込む。

「お姉ちゃんは、良いな・・・」

それは、羨ましさを通り越して羨望ですらあった。
外を走りたい、遠くに行きたい。
自分の足で駆け回って、いろいろな所へ。

「楓、お外で遊びたい・・・」

「ふーん、そうなの。変なお願いだねえ、ふーん」

束は首を傾げて妹を眺めた後、ふむつ、と腕を組んで思考の海に沈む。

ぽく、ぽく、ぽく・・・ちーんっ。

まさにそのような感じで、ぽんっ、と手を打つ束。

「おーけー、おーけー、任せて楓ちゃん。お姉ちゃんがぜえんぶ、何とかしてあげるからねっ。大丈夫、束お姉ちゃんは世界一の大天才だかね、ドクターゲ も真っ青さ！」

「どく・・・？」

「うんうん、楓ちゃんはなあんにも、心配しなくて良いからね。全

部お姉ちゃんがやったげる、何もかも隅から隅まで塵一つ残さず、綺麗さっぱり全部！ うん、もういつそのこと星の外まで行っちゃう感じで・・・ああ、うん、良いねそれ・・・」

ぐしぐしぐし・・・妹の頭を撫でて、束は立ち上がる。

鼻歌など歌いつつ出て行く姉を呼び止めようとするも、楓の小さな声は届かない。

こほっ・・・小さく咳き込みながら、楓は姉を見送るしかなかった。

上の姉の考えていることは、幼い楓にはわからない。
ただ、疲れたように息を吐いて・・・。

「・・・楓？ 今、姉さんが来ていたのか・・・？」

そして、もう1人・・・下の姉が、楓の部屋を訪れた。
その手に、小さな箱を持って・・・。

「・・・ほら」

「・・・？」

そっぽを向きながら筭が押しつけて来たのは、小さな白い箱だった。

押しつけられる格好となった楓は、不思議そうな顔で手元のそれを見る。

何かが入っているのか、少し重い……。

「これ、何……?」

「良いから、開けてみる」

そつぽを向いたままそう告げる姉、楓は小さく首を傾げながら箱を開ける。

そこには……。

「わぁ……」

そこには小さな苺のショートケーキが、一つだけ入っていた。しかも、砂糖菓子のサンタがちょこんと鎮座している。楓の目が、一瞬だけ輝いて見えた。

箒は妹が目を輝かせるのを見て、少しだけ嬉しそうな顔をしたのだが……。

楓が自分のことを見ると、慌てて仏頂面でそつぽを向くのである。

「は、早く食べる。父さんに見つかったら、叱られるぞ」
「うん、うん」

付属のプラスチックのフォークを使って、楓は小さく切り取ったケーキを口に含む。

クリームの甘さに、熱とは別の種類の赤みが頬にさす。

本当は、体調が悪い時にケーキは食べない物だが……。

「う、美味いか？」

「うん、うん……」

「そ、そうか。もっと食べる」

「ん、ん……」

口一杯にケーキを詰め込んで頷く妹に、箒はほっとしたような表情を浮かべる。

その時、不意に楓は箒を見た。

そして少しだけ首を傾げて……。

「……箒さんは、食べないの……？」

「わ、私は……こ、ここに来るまでに食べてしまったのだ。だから気にするな……ほら、早く食べる！」

「う、うん……」

姉に急かされて、楓は慌ててケーキを食べるのを再開する。

……本当は、箒もケーキを食べたかったのだが。

それでもケーキを食べる楓を見てみると、箒は小さな胸に温かい何かを感じることができた。

第にとって、楓は守るべき大切な妹で。
その妹を喜ばせられるのが、どうしようも無く嬉しかった。
それは・・・そんな夜の、出来事だった。

クリスマスから幾日かが過ぎて、年も改まったある日。

千冬は篠ノ之神社への初詣のついでに、唯一とも言っても良い親友を訪ねた。

両親や妹まで 例によって寝込んでいる楓は別として が
忙しくしている中、巫女としての役割を欠片も果たしていない親友を。

「東、いるのか？」

勝手知ったる何とやら、居住スペースの屋敷の縁側を歩きながら、
千冬は東の名前を呼ぶ。

普段はやかましいくらいに付きまとして来る親友が、この1週間は
音信不通。

本人は認めないだろうが、千冬も心配になってきていたのである。

そうこうしている内に、東の部屋の前に到着する。

耳を澄ましてみれば、部屋の中からは何かの電子音や何かを削っているような音が響いている。

和風の家には、似つかわしく無い音だった。
とは言え、それは今に始まった話では無い。

「東、入るぞ」

千冬は軽く眉を顰めて襖を開けて・・・結果、さらに深く眉間に皺を寄せることになる。

意外と広い畳の部屋、そこには・・・。

白銀の、鎧のような「ナニカ」があった。

周辺は奇妙な機材やコードで溢れており、気のせいで無ければ化学薬品の匂いや何かが焦げているような音すら聞こえる。

和風な部屋には似つかわしく無い物が、その部屋には揃い過ぎていた。

そして数々の計器の中に埋もれるように、1人の少女が何かをしている。

その少女、篠ノ之 東は千冬に気が付くと、にへら、と頬を緩めた。

「ちーちゃん」

「・・・何を、しているんだ？ 東」

「え、これ？ うふふ、まだ内緒だよん」

ニヤニヤと、悪戯を仕掛けている最中の子供の顔で東が告げる。

千冬はそれに対して、さらに顔を顰める。
何故なら今の束の顔は、とんでもないことをやらかす時特有の物だったからだ。

「うーん、でも私これ乗れないしなあ・・・そだ。ねえねえ、手伝つてよ、ちーちゃん」

「手伝う？」

「うんうん、2人の愛の共同作ぎよおおおおおお・・・!？」

千冬のアイアンクローにバタバタと悶える束、それを無視しながら千冬は部屋の真ん中で鎮座する無骨な鎧のような「ナニカ」を見上げる。

鋭く、目を細めて・・・。

「・・・で、束。コレは何だ」

「え？ うーん、まだ名前とかは決めて無いんだけどねえ・・・とりあえず・・・」

千冬のアイアンクローからしれつと逃れて、束は楽しそうに白銀の「ナニカ」を見上げる。

まだ誰も知らない、世界で2人しか知らない「ナニカ」を。
むふふと笑って、束は告げる。

「『白騎士』^{しろきし} ってのは、どうかなあ？」

その時の束の顔を、この後、千冬は生涯忘れないことになる。
何故ならそれは、運命の瞬間だったのだから。

過去編：「運命のクリスマス」（後書き）

篠ノ之 楓：

懐かしいなあ、いつのクリスマスだっけ。

あの頃はまだ身体が弱くて、ほとんど寝てばかりだったけど・・・。

篠ノ之 箒：

そう、だったな・・・。

篠ノ之 束：

あの頃は箒ちゃんも「お姉ちゃん、お姉ちゃん」ってお姉ちゃんの後についてきてくれてただけだねえ、懐かしいなあ。

篠ノ之 箒：

う、嘘を言わないでください！

と言っか、何でいる・・・！？

篠ノ之 束：

箒ちゃん、ひどういつ！

ねえ、楓ちゃん、酷いよねえ！？

篠ノ之 楓：

え、ええええ・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0293z/>

インフィニット・ストラトス 黒き叡智

2011年12月25日18時07分発行